貝塚市埋蔵文化財調査報告　第62集

貝塚市遺跡群発掘調査概要24

2002. 3. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は北に大阪湾を望み、南に和泉山脈を仰ぐ、穏やかな気候と多くの緑に恵まれた地域であります。このような自然環境によって豊かな土壌が育くまれ、市域には昔から多くの人々がさまざまな営みを繰り返し、多くの文化遺産を残しました。

今日残る文化遺産には地上にある神社仏閣、古文書等のほかに、地中に埋もれた古人の生活痕跡を残す埋蔵文化財があります。華やかではありませんが、地中に刻まれた人々の痕跡はその時の先人達の営みを如実に語ってくれる貴重な語り部と言っても過言ではないでしょう。

今回、平成13年度中に実施いたしました緊急発掘調査の結果を報告いたします。開発に伴う調査で、大部分が非常に小規模ではありますが、現市域に住んでいた人々の生活を考える上で欠かせない多くの成果を得ることができました。また、今年度は国指定史跡丸山古墳の発掘調査を実施しました。昭和31年度に史跡指定を受けてから、初めての本格的発掘調査となり、古墳時代における貝塚市一帯の歴史を解明する大きな成果を得ることができました。本書を刊行することにより、皆さまの文化財に対するご理解を深めていただく一助となれば幸いに存じます。

また、発掘調査ならびに本書の作成にあたり、関係各位には多大なご指導、ご協力をいただき、深く感謝申し上げます。今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成14年（２００２）３月31日

貝塚市教育委員会
教育長　山　本　太　三　郎

例　言

1．本書は貝塚市教育委員会が平成 13 年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域に　おける埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告である。
　なお、遺物整理の都合から一部平成 12 年度調査についても掲載している。

2．発掘調査は貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係、学芸員前川浩一、三浦基、上野裕子が担当し、平成 13 年 4 月 1 日より実施し、平成 14 年 3 月 31 日に終了した。

3．本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は上野が行った。

4．調査図面については、図 2 ～ 7 の調査地位置図が縮尺 1 ／10,000、方位が座標北を上に統一している。調査区位置図の方位は磁北を示している。

5．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

目　次

はじめに
例　言
目　次（本文目次、挿図目次、図版目次）

第１章　平成13年の発掘調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　調査結果
Ⅰ　貝塚寺内町遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
2000－59区、2000－63区、2000－73区、2001－21区、2001－37区 、
2001－47区、2001－49区
Ⅱ　積善寺城跡　2000－54区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Ⅲ　海塚遺跡　2000－57区、2001－３区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Ⅳ　東遺跡　2000－60区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
Ⅴ　堀秋毛遺跡　2001－６区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
Ⅵ　加治・神前・畠中遺跡　2001－１区、2001－17区、2001－51区・・・・・・・・・・・15
Ⅶ　清児遺跡　2000－67区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
Ⅷ　名越遺跡　2000－68区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
Ⅸ　窪田遺跡・窪田廃寺　2001－30区、2001－39区・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
Ⅹ　沢新出遺跡　2001－４区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
ⅩⅠ　土生遺跡　2001－12区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
ⅩⅡ　新井ノ池遺跡　2001－18区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
ⅩⅢ　津田遺跡　2001－29区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
ⅩⅣ　麻生中下代遺跡　2001－23区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
ⅩⅤ　地蔵堂遺跡　2001－８区、2001－35区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
ⅩⅥ　三ヶ山西遺跡　2000－69区、2001－20区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
ⅩⅦ　木積観音寺跡　2001－５区、2001－10区、2001－13区、2001－26区・・・・・・・・24
ⅩⅧ　半田北遺跡　2001－46区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
ⅩⅨ　地蔵堂丸山古墳　2000－72区、2001－27区、2001－38区・・・・・・・・・・・・・31
ⅩⅧ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

挿図目次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図
図３　調査地位置図
図４　調査地位置図
図５　調査地位置図
図６　調査地位置図
図７　調査地位置図
図８　2000－59区、2000－63区、2000－73区
図９　2001－21区、2001－37区、2001－47区、2001－49区
図10　2000－54区
図11　2000－57区、2001－３区
図12　2000－60区
図13　2001－６区
図14　2001－１区、2001－17区、2001－51区
図15　2000－67区
図16　2000－68区
図17　2001－30区、2001－39区
図18　2001－４区
図19　2001－12区
図20　2001－18区
図21　2001－29区
図22　2001－23区
図23　2001－８区、2001－35区
図24　2000－69区、2001－20区
図25　2001－５区、2001－10区、2001－26区
図26　2001－13区
図27　2001－46区
図28　2001－46区出土遺物
図29　2000－72区、2001－27区
図30　2001－38区
図31　2001－38区出土遺物

図版目次

図版１　木積観音寺跡（2001－13区）、麻生中下代遺跡（2001－23区）
１．木積観音寺跡調査区全景
２．麻生中下代遺跡調査区全景
図版２　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）
１．第１区調査区全景
２．北壁断面
図版３　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）
１．第２区調査区全景
２．西壁断面
図版４　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）
１．第３区調査区全景
２．西壁断面
図版５　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）
１．第４区調査区全景
２．西壁断面
図版６　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）
１．第５区調査区全景
２．西壁断面
図版７　半田北遺跡（2001－46区）
１．ＳＫ－１、２
２．Ｐｉｔ３
図版８　地蔵堂丸山古墳
2001－38区第１区（１～４）、第２区（５～９）、第３区（10～16）出土円筒埴輪、朝顔形埴輪、土器
図版９　地蔵堂丸山古墳
2001－27区（17、18）出土形象埴輪
図版10　地蔵堂丸山古墳、半田北遺跡
2001－27区（19）、2001－38区、2001－46区ＳＫ－１（７～17）、ＳＫ－２（18、19）出土形象埴輪、土器
図版11　半田北遺跡
ＳＫ－１、２出土瓦

表目次

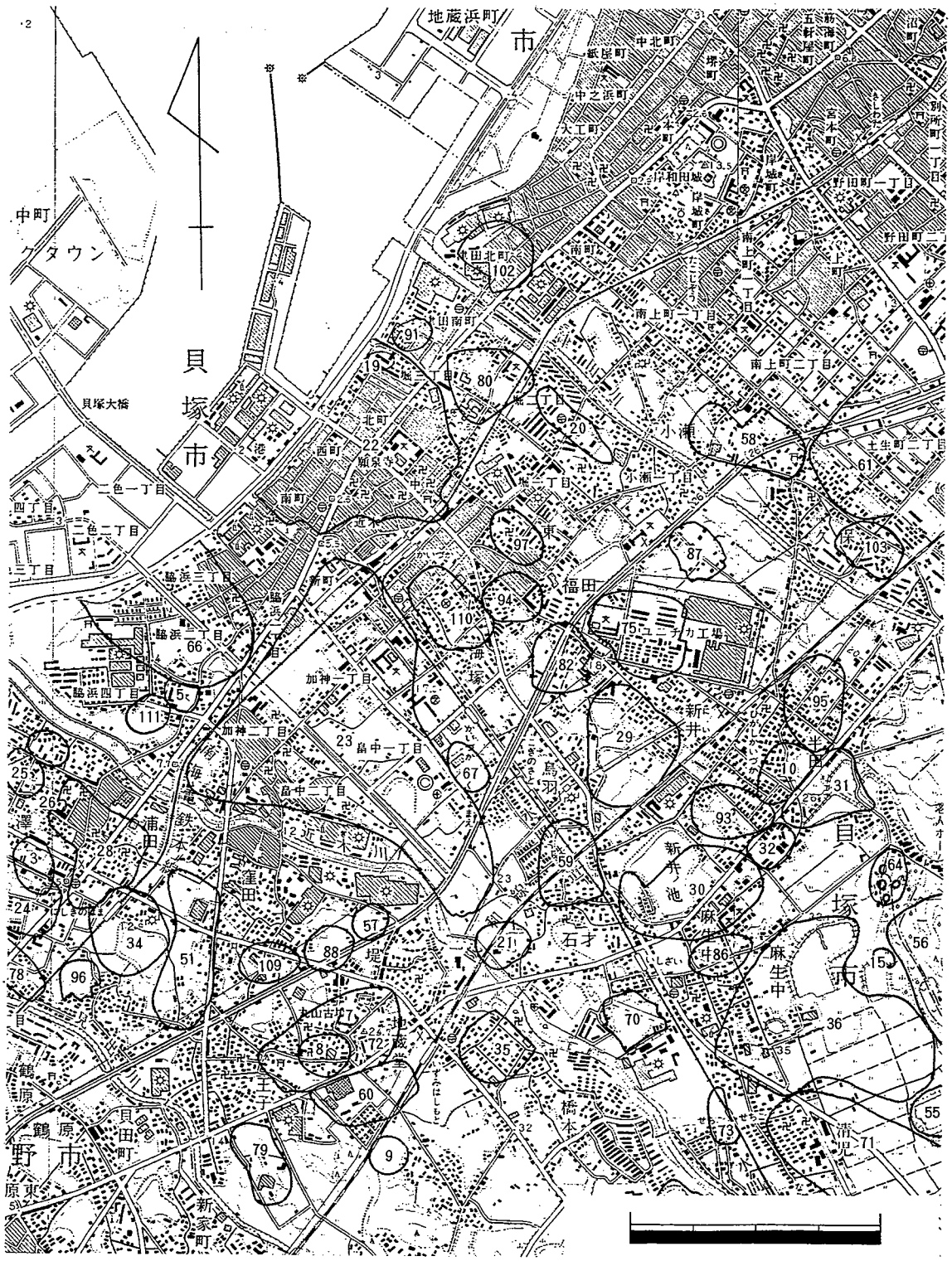
表１　平成13年国庫補助事業一覧（平成13年１月～12月）

第１章　平成 13 年の調査概要

平成 13 年は埋蔵文化財発掘届出書提出数 226 件、遺跡外試掘調査依頼 13 件を数える。この中から届出に関わる発掘調査 76 件、立会調査 32 件を実施した。慎重工事は 92 件である。76 件のうち国庫補助対象となる個人専用住宅建設に伴う調査は 33 件である。遺跡外の確認調査は８件実施した。また、国指定史跡、丸山古墳の現状変更申請書を提出し、平成 13 年３月から 10 月にかけて発掘調査３件を実施した。

	遺跡名	調査番号	遺跡略号	開発地
	（平成12年度）			
1	積善寺城跡	2000-54	SZJ	橋本6-2
2	海塚遺跡	2000-57	UD	海塚302-1
3	貝塚寺内町遺跡	2000-59	JN	西町569-6、-16
4	東遺跡	2000-60	HG	堀1丁目706-4、706-7
5	貝塚寺内町遺跡	2000-63	JN	中795-1
6	清児遺跡	2000-67	SG	麻生中276-1
7	名越遺跡	2000-68	NG	清児358-3
8	三ケ山西遺跡	2000-69	MYN	三ツ松543
9	地蔵堂丸山古墳	2000-72	GMY	地蔵堂198
10	貝塚寺内町遺跡	2000-73	JN	近木1061-4、1061-5、1065-70
	（平成13年度）			
11	加治・神前・畠中遺跡	2001-1	KKH	加神2丁目308の一部
12	海塚遺跡	2001-3	UD	海塚173の一部
13	沢新出遺跡	2001-4	SSD	沢398-2の一部
14	木積観音寺跡	2001-5	KKD	木積2028-14
15	堀秋毛遺跡	2001-6	HA	海塚27-1の一部、27-9
16	地蔵堂遺跡	2001-8	GZZ	地蔵堂181-2
17	木積観音寺跡	2001-10	KKD	木積1994-5
18	土生遺跡	2001-12	HB	久保187-3、581-3
19	木積観音寺跡	2001-13	KKD	木積804-1、-2、805-1、-2、806-1、-2、-3
20	加治・神前・畠中遺跡	2001-17	KKH	加神2丁目331-2
21	新井ノ池遺跡	2001-18	NI	鳥羽64-1、-2
22	三ケ山西遺跡	2001-20	MYN	三ツ松690-3
23	貝塚寺内町遺跡	2001-21	JN	北町175-4
24	麻生中下代遺跡	2001-23	ANS	麻生中1150-3
25	木積観音寺跡	2001-26	KKD	木積657-3
26	地蔵堂丸山古墳	2001-27	GMY	地蔵堂198
27	津田遺跡	2001-29	TD	堀3丁目298-5、297-13
28	窪田遺跡、窪田廃寺	2001-30	KTK	沢1369-8、18、22
29	地蔵堂遺跡	2001-35	GZZ	地蔵堂274-1
30	貝塚寺内町遺跡	2001-37	JN	西町674-3
31	地蔵堂丸山古墳	2001-38	GMY	地蔵堂198
32	窪田遺跡、窪田廃寺	2001-39	KTK	沢1369-19、1369-17
33	半田北遺跡	2001-46	HK	半田757
34	貝塚寺内町遺跡	2001-47	JN	中812-6
35	貝塚寺内町遺跡	2001-49	JN	南町1076
36	加治・神前・畠中遺跡	2001-51	KKH	畠中2丁目171-4

表１　平成 13 年国庫補助事業一覧（平成 13 年１月～ 12 月）



3．沢遺跡　5．長楽寺跡　7．(国史跡)地蔵堂丸山古墳　8．地蔵堂廃寺　9．下新出遺跡　10．秦廃寺　15．麻生中新池遺跡　19．泉州麻生塩壺出土地　20．堀遺跡　21．橋本遺跡　22．貝塚寺内町遺跡　23．加治・神前・畠中遺跡　24．明楽寺跡　25．沢共同墓地遺跡　26．沢西出遺跡　28．沢城跡　29．新井・鳥羽遺跡　30．新井ノ池遺跡　31．半田遺跡　32．麻生中遺跡　34．澱池遺跡　35．積善寺城跡　36．清児遺跡　51．窪田遺跡・窪田廃寺　55．槍ヶ谷城跡　56．半田遺跡(清児地区)　57．堤遺跡　58．小瀬五所山遺跡　59．石才遺跡　60．王子遺跡　61．土生遺跡　64．海岸寺山遺跡　66．脇浜遺跡　67．今池遺跡　70．石才南遺跡　71．名越遺跡　72．地蔵堂遺跡　73．名越西遺跡　75．新井・鳥羽遺跡　78．沢西遺跡　79．王子西遺跡　80．津田遺跡　82．福田遺跡　86．麻生中出口遺跡　87．小瀬遺跡　88．堤三宅遺跡　89．沢新開遺跡　91．堀新遺跡　93．麻生中下代遺跡　94．堀秋毛遺跡　95．半田北遺跡　96．沢老ノ塚遺跡　97．東遺跡　102．津田北遺跡　103．久保遺跡　109．窪田ハマデ遺跡　110．海塚遺跡　111．脇浜川端遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

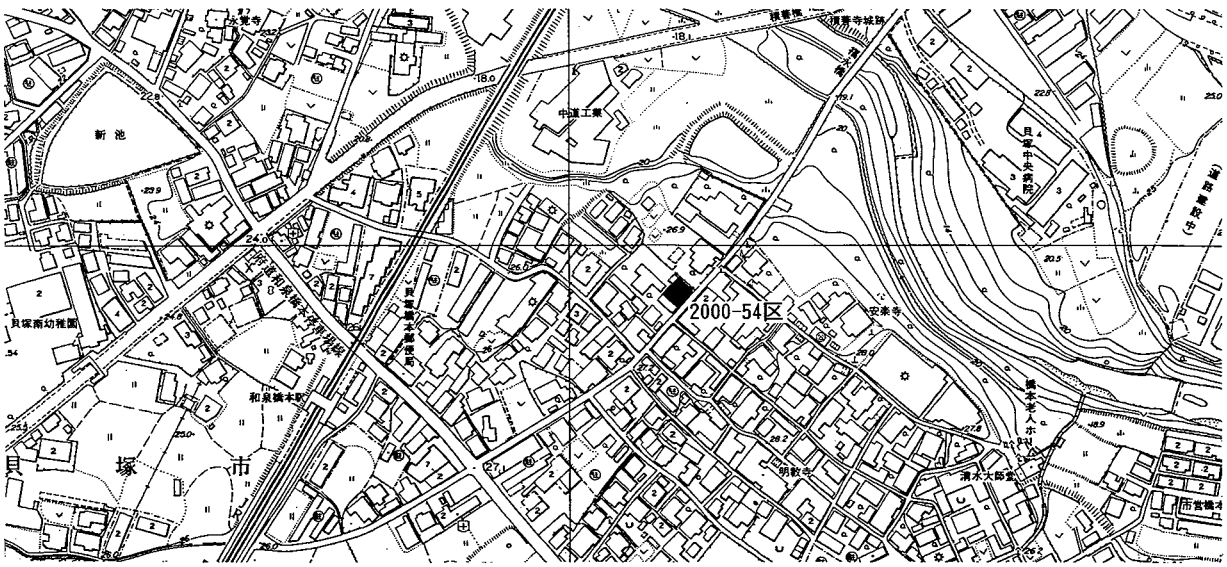
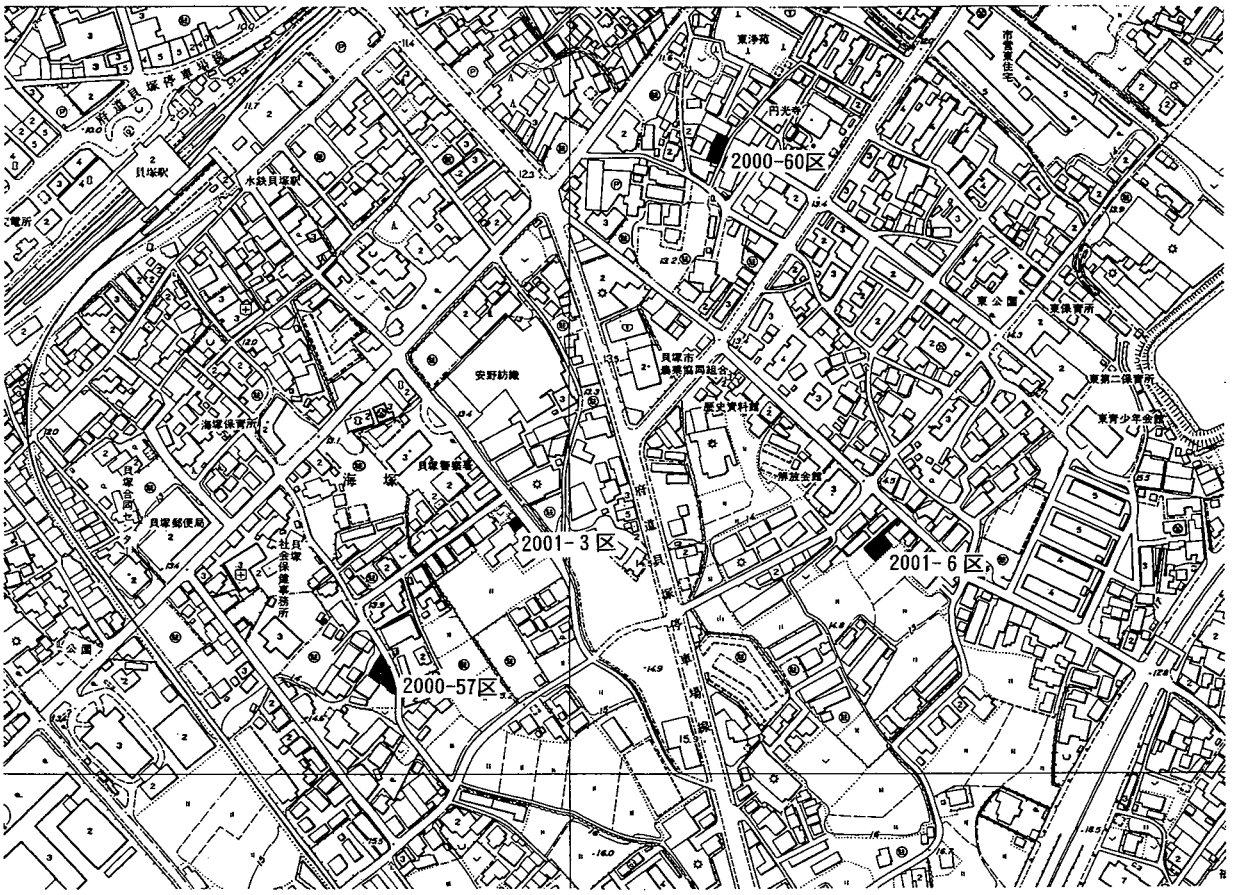


図２　調査地位置図（Ｓ＝１／５，０００）



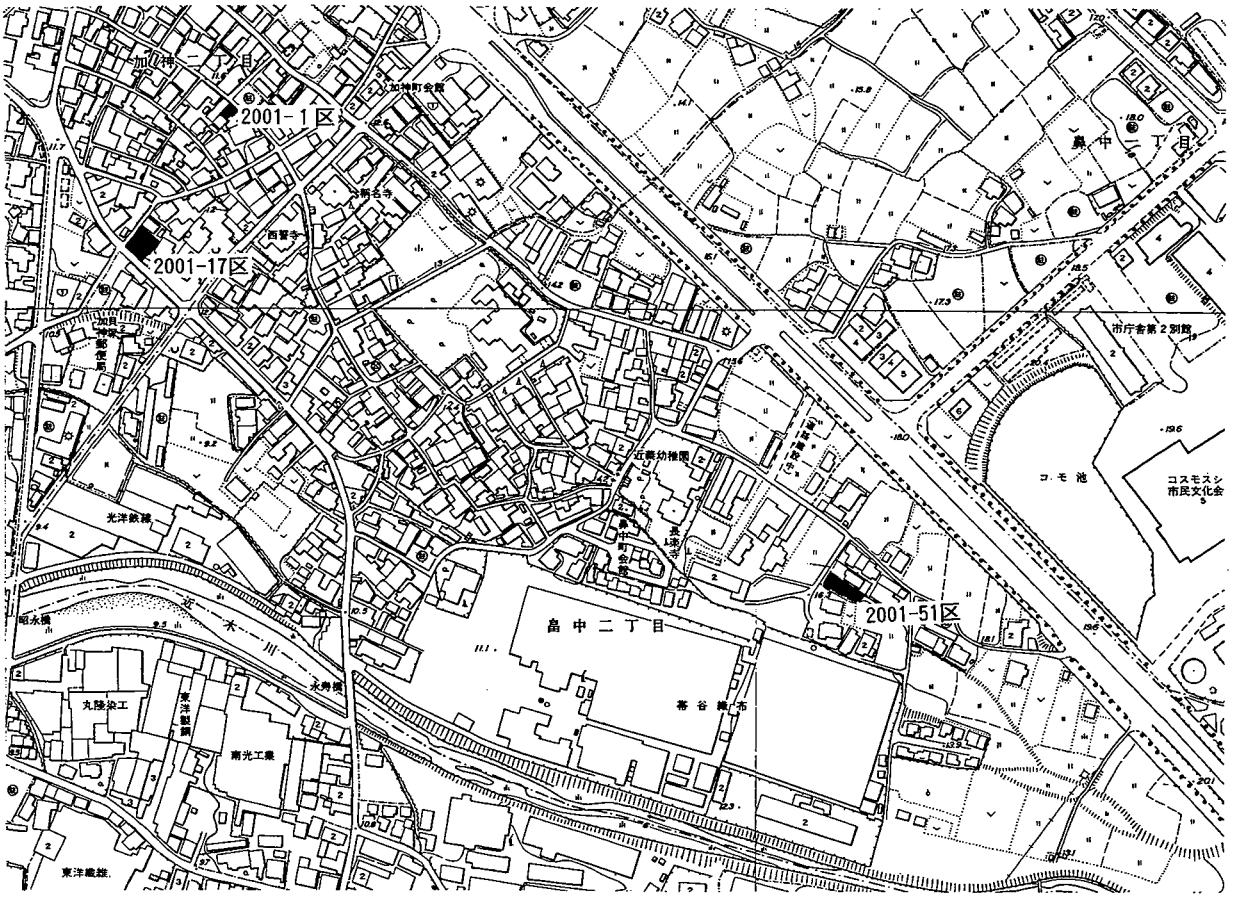
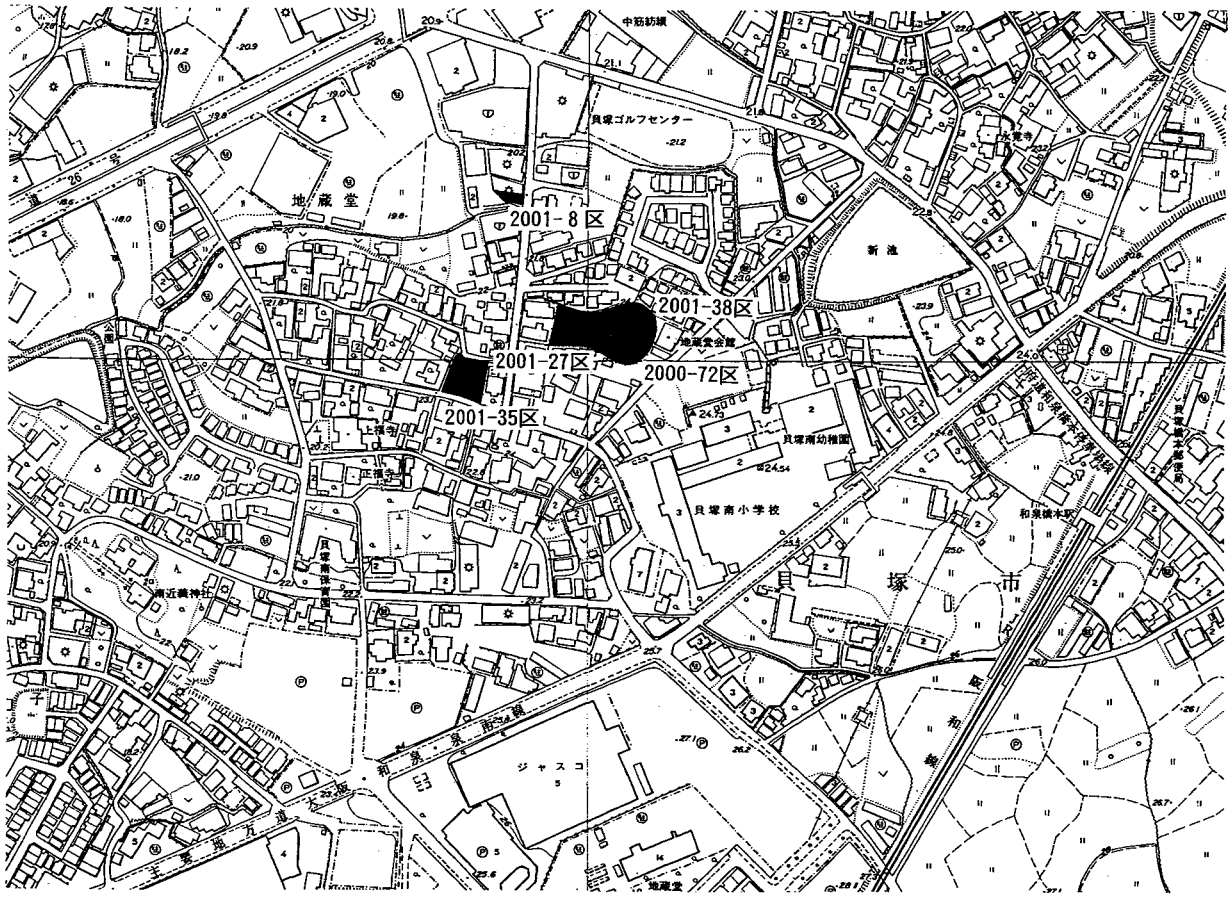


図3　調査地位置図（S＝1／5，000）

図4　調査地位置図（S＝1／5，000）

図5　調査地位置図（S＝1／5，000）



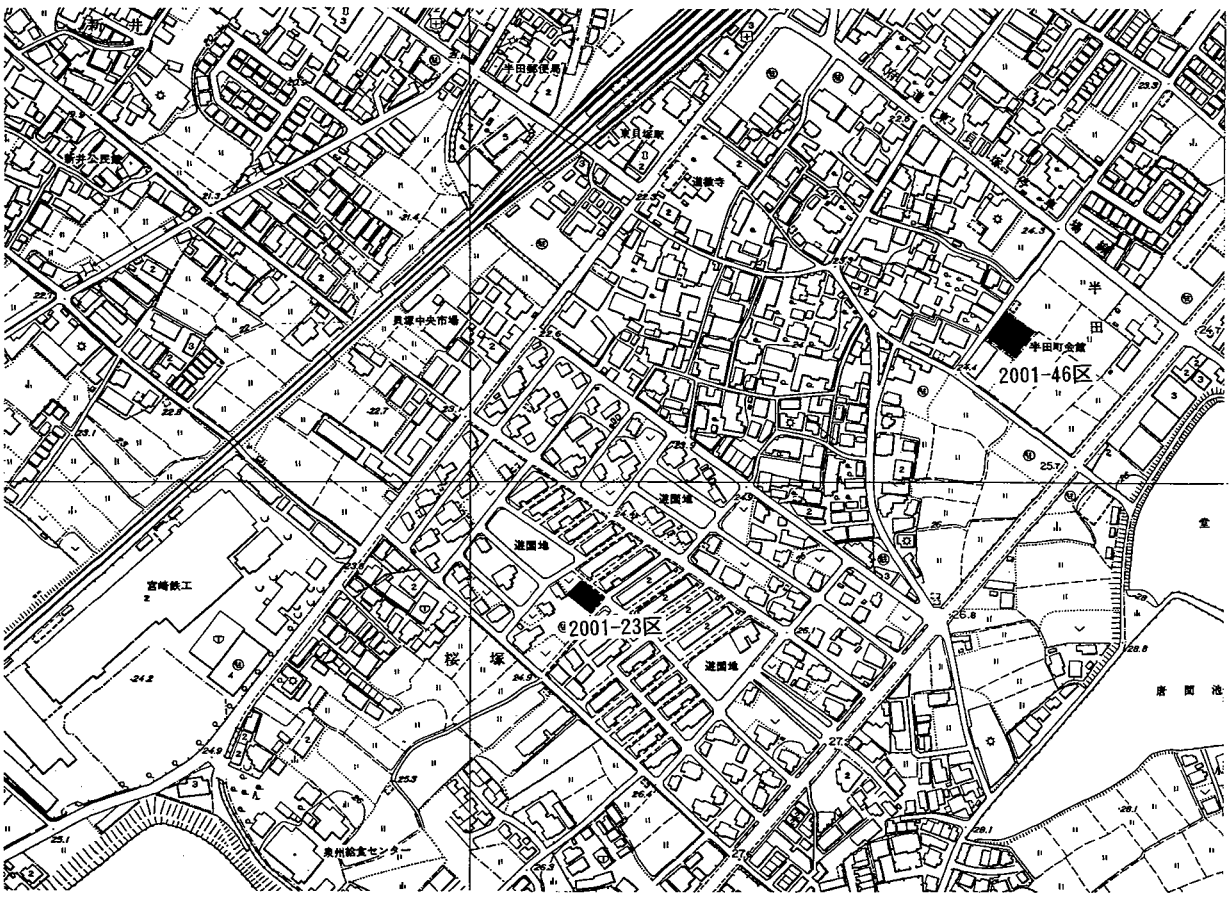
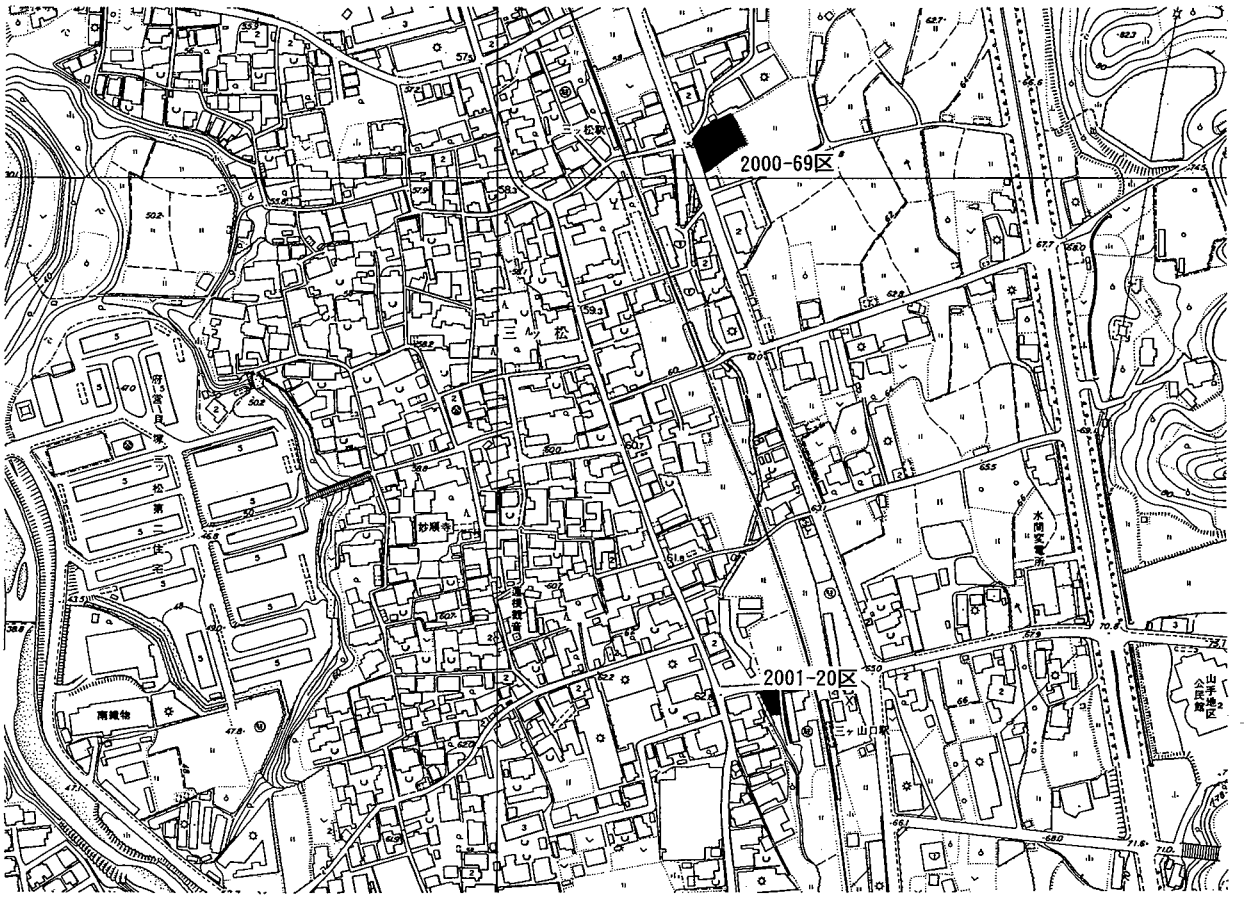


図6　調査地位置図（S＝1／5，000）



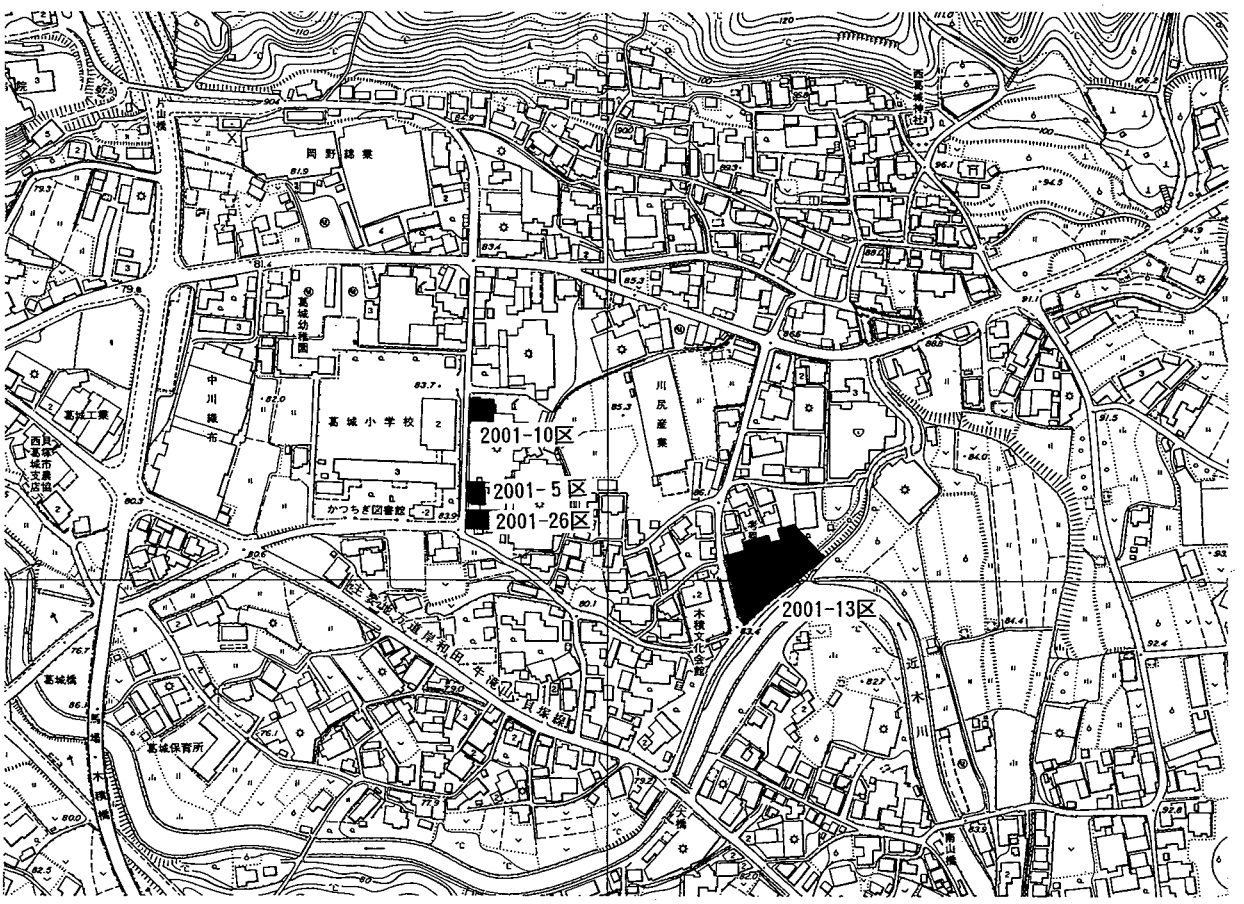


図7　調査地位置図（S＝1／5，000）

第２章　調査結果

Ⅰ　貝塚寺内町遺跡

貝塚寺内町遺跡は貝塚市北西の大阪湾に面し、中世から近世にかけて願泉寺を中心に栄えた都市遺跡である。北西を大阪湾、南東を北境川、南西を難波川で三方を画し、海岸部から沖積段丘面を経て洪積段丘上に位置している。16 世紀代に寺内に取り立てられ、1583(天正 11)年には紀州鷺森から顕如を迎え、1585(天正 13)年に天満本願寺に移るまで本願寺御堂として存在した。その後江戸時代を通じて、寺領として願泉寺ト半家の支配下に置かれた。

2000 － 59 区の調査

調査地は貝塚市西町 569 － 6、569 － 16 である。調査は建設予定地に 1 × 1.5 mの調査区を設定して行った。

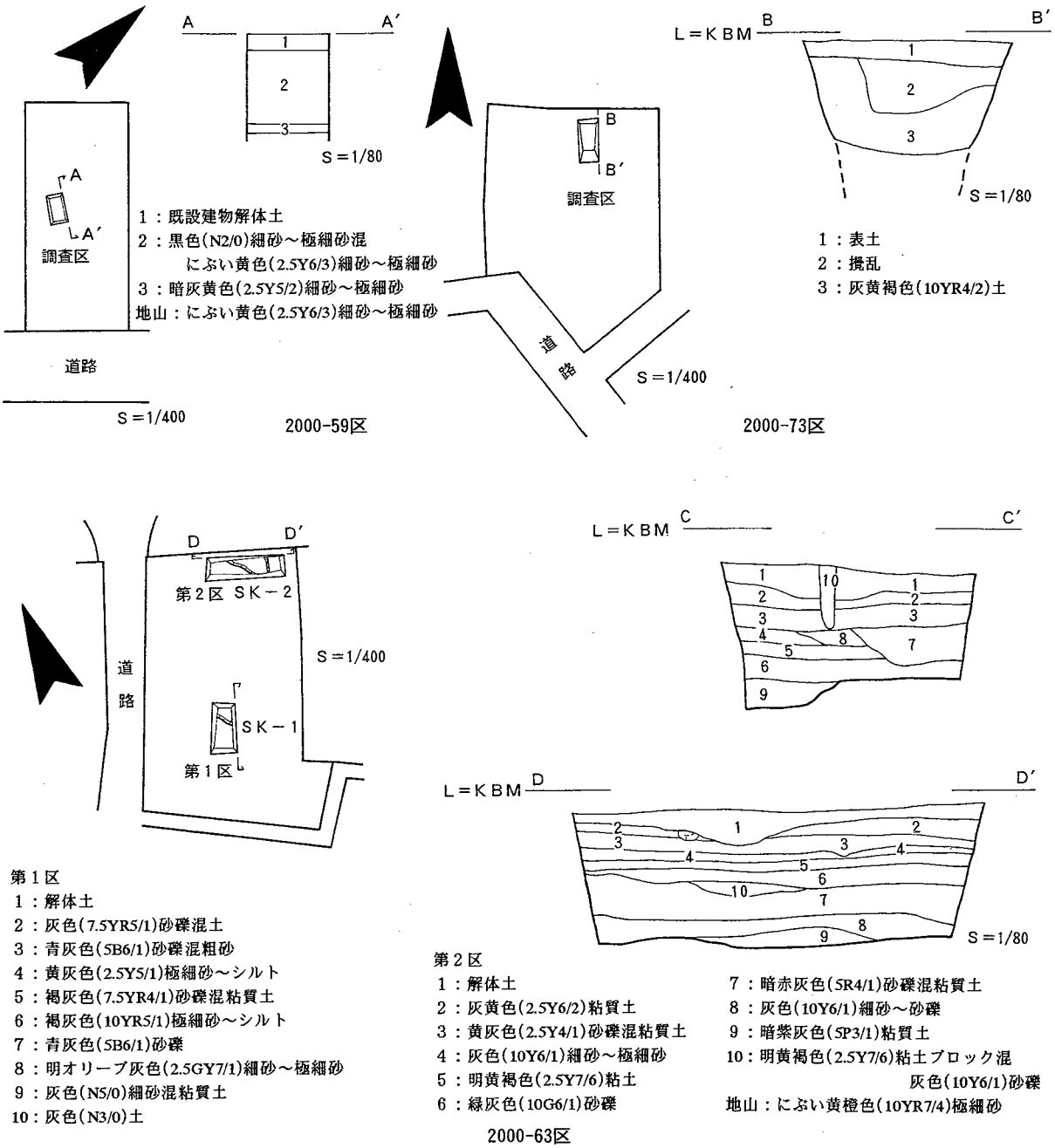


図８　2000 － 59 区、2000 － 63 区、2000 － 73 区

調査区には既設建物解体土(第１層、層厚 0.2 m)の下に黒色細砂～極細砂混にぶい黄色細砂～極細砂(第２層、層厚 0.9 m)、暗灰黄色細砂～極細砂(第３層、層厚 0.1 m)が堆積する。現状地盤より 1.2 mでにぶい黄色細砂～極細砂の海岸自然堆積層(第４層)に達する。

第２層は近代以降の整地層である。第３層からは遺物の出土はなく、自然堆積層と考えられる。調査区は平成７年度に寺内の町屋と海岸部を限る土塁を検出した地点より海岸側に位置し、町屋の外側にあたる部分である。近代まで開発は受けず、それ以降の整地盛土によって宅地化したものと考えられる。　(上野裕子)

2000 － 63 区の調査

調査地は貝塚市中 795 －１である。開発地内の南側に 1.5 ×３m、北側の道路に面して 1.5 ×５mの調査区を設定し実施した。調査区名は南側を第１区、北側を第２区とした。

調査区には既設建物解体土の下に、５面の生活面を確認した。第５面(地山上面)では、第１区で土坑１基(ＳＫ－１)、第２区で土坑１基(ＳＫ－２)を検出した。第４面は第１区、第２区とも２層の整地土を入れた後、生活面を築いている(第１区：第５層上面、第２区：第７層上面)。第２区の断面で浅い土坑を確認した。第３面は第１区、第２区とも１層の整地土を入れて築いている(第１区：第４層上面、第２区：第５層上面)。第１区の断面で幅約２mを測る土坑を確認した。第２面は第１区、第２区とも１層の整地土を入れて築いている(第１区、第２区：第３層上面)。第１面は解体土直下にあり、既設建物に伴うものである。第５面と第４面の間にも生活面が築かれていた可能性がある。地山はにぶい黄橙色極細砂で第１区では 1.25 ～ 1.4 m、第２区では 1.55 ～ 1.7 mで検出した。各生活面は、遺構出土の遺物等から第５面は 18 世紀代、第１～４面は 19 世紀以降の時期が与えられる。

土間層は道に面していたと考えられる第２区には存在するが、第１区には存在しない。建物は道に面した場所に位置していたと思われる。また、地山上層には赤褐色の炭灰を含む層が堆積しており、火事の片付け層と考えられる。周辺調査においても火事の片付け層を確認していることから、調査地一帯で記録に現れない火災があったものと思われる。　(上野裕子)

2000 － 73 区の調査

調査地は貝塚市近木 1061 －４、1061 －５、1065 － 70 である。調査は 2.5 ×１mの調査区を設定して行った。

堆積状況は、表土（層厚 0.2 m、第１層）の下に灰黄褐色土（第３層）の盛土を確認した。盛土は一部撹乱を受けており、層厚は２m以上である。そのため、地山や遺構は検出できず、遺物は、第１層、撹乱から陶磁器（近世～明治）が出土している。盛土から遺物は出土していないが、撹乱内には煉瓦、ガラス等の大正、昭和のものが含まれており、盛土は明治あるいはそれ以後と考えられる。　(三浦基)

2001 － 21 区の調査

調査地は貝塚市北町 175 －４である。開発地内中央に１×３mの調査区を設定し実施した。

調査区内には６層の土層が堆積していた。上から順に黒褐色細砂(第１層、層厚 0.3 ～ 0.4 m)、褐灰色細砂(第２層、層厚 0.2 m)、にぶい黄橙色細砂(第３層、層厚 0.1 ～ 0.2 m)、灰黄色細砂(第４層、層厚 0.1 ～ 0.15 m)、にぶい黄橙色細砂(第５層、層厚 0.05 ～ 0.2 m)、にぶい黄褐色細砂(第６層、層厚 0.25 ～ 0.4 m)である。地山は浅黄色細砂で、現地表面より約 1.3 mで検出した。

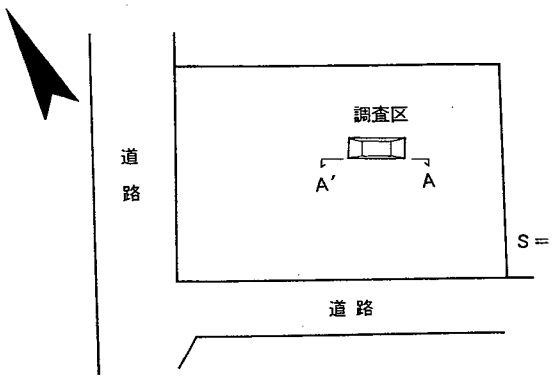
調査では３面の生活面が認められた。第１層は煉瓦片を含んだ既設建物解体土で、第２層上面は既設建物に伴う生活面である。第４層は固く叩き締められ、層上面が生活面となる。第２、３層は整地層である。第３層上面には生活面があったと思われるが、削平等の理由により不明である。第５層は整地層である。第６層は貝殻片を大量に含み、食用に貝を加工した後の貝殻を捨てた層と考えられる。

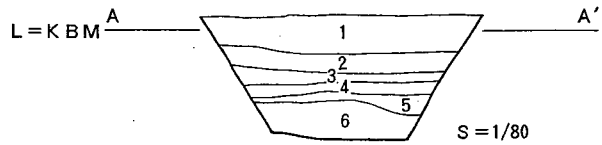
第１層より幕末～明治の和泉音羽焼、肥前系磁器、磁器製人形等が出土し、第２層上面はこの頃の生活面と考えられる。以下、各層の年代は出土遺物がなく不明だが、江戸時代と推定できる。　(上野裕子)

2001 － 37 区の調査

調査地は貝塚市西町 674 －３である。調査は開発地内に合計 14 ㎡の調査区を設定して実施した。

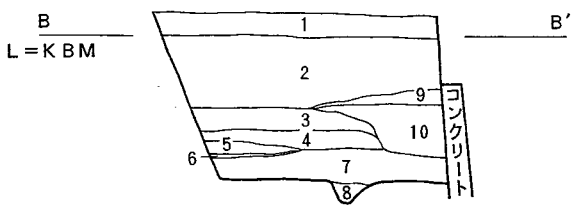
第１区は盛土 (0.2 m)、撹乱盛土 (0.8 m)、にぶい黄色土 (0.25 m、第３層)、にぶい黄褐色砂質土 (第４層、0.2

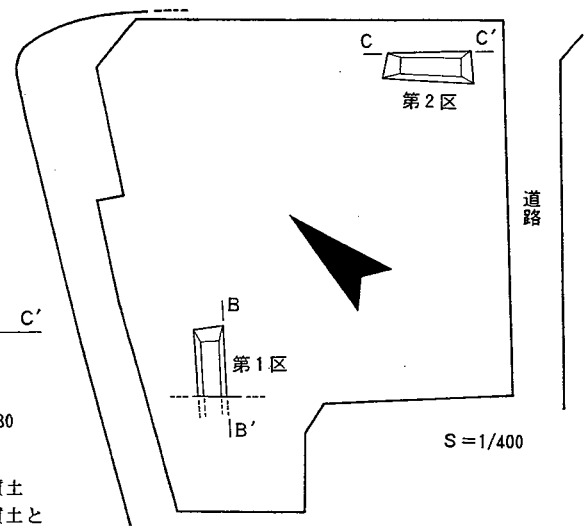


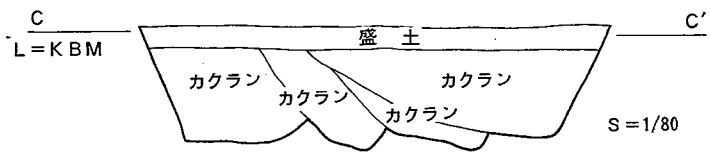


1：黒褐色(2.5Y3/1)細砂
2：褐灰色(10YR5/1)細砂
3：にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂
4：灰黄色(2.5Y6/2)細砂
5：にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂
6：にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂
地山：浅黄色(2.5Y7/4)細砂

2001-21区

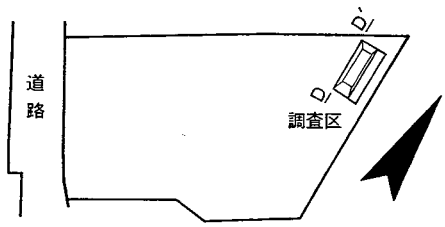


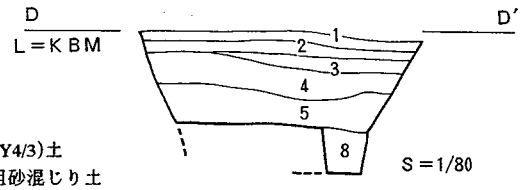




1：盛土
2：撹乱盛土
3：にぶい黄色(2.5Y6/4)土
4：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
5：にぶい赤褐色(5YR4/3)土
6：明黄褐色(2.5Y6/6)土
7：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
8：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土と
　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂
9：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂
10：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂混
　にぶい黄褐色(10YR4/3)土
地山：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂

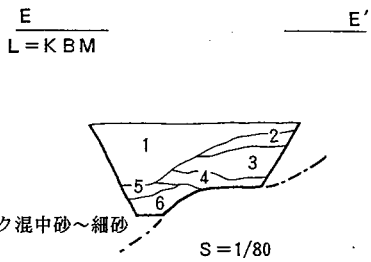
2001-37区

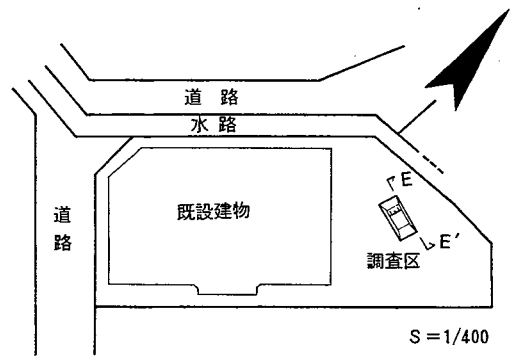




1：表土
2：整地土
3：整地土
4：オリーブ褐色(2.5Y4/3)土
5：黄褐色(2/5Y5/4)粗砂混じり土
6：灰色(7.5Y5/1)シルト混じり土
地山：緑灰色(10GY6/1)礫混じり土

2001-47区





1：黒褐色(10YR3/1)粗砂～砂礫
2：暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂
3：暗紫灰色(5P4/1)粘土ブロック混中砂～細砂
4：灰白色(10Y7/1)中砂
5：青灰色(5B5/1)粗砂～砂礫
6：暗青灰色(5PB4/1)中砂～細砂
地山：灰白色(N7/0)細砂

2001-49区

図9　2001－21区、2001－37区、2001－47区、2001－49区

m)、にぶい赤褐色土（第５層、0.15 m)、明黄褐色土（第６層、0.05 m)、にぶい黄褐色砂質土（第７層、0.3 m）で地山はにぶい黄褐色砂である。第２区は 0.2 mの盛土下は現状地盤から 1.3 mの深さまで撹乱をうける。

遺構は第１区にて直径 0.4 m深さ 0.2 mの土坑１を検出した。遺物は、瓦片、陶磁器片が少量出土した。第５層は焼土層であり周辺の調査において確認されている焼土層に対応すると考えられる。これらの状況から、調査区では江戸時代後半に土地利用が開始されたと考えられる。（三浦基）

2001 － 47 区の調査

調査地は貝塚市中 812 －６である。調査は 1.4 × 3 mの調査区を設定して実施した。

調査区の地層の状況は、表土（第１層、0.1 m)、整地土（第２層、0.1 m)、整地土（第３層、0.15 m)、オリーブ褐色土（第４層、0.3 ～ 0.4 m)、黄褐色粗砂混じり土（第５層、0.3 ～ 0.4 m)、灰色シルト混じり土（第６層、0.5 m）で地山は緑灰色礫混じり土である。上層から第３層までは明治期の陶磁器を含み、第４層は撹乱されているものの 18 世紀後半の陶磁器、同時期と考えられる軒丸瓦、平瓦が出土している。第５層は第６層の湧水を止めるためのものと考えられる。第６層は湧水が激しく流水、滞水の状況も確認できること、調査地が谷の中にあることから水路あるいは小河川の一部と考えられる。

現在も湧水が激しく遺構は検出できなかった。遺物は 18 世紀後半以降の陶磁器、瓦が第４層、第５層を中心として出土している。（三浦基）

2001 － 49 区の調査

調査地は貝塚市南町 1076 である。調査は増築予定部分の北東に 1 × 2.2 mの調査区を設定して行った。

調査地の南東は段丘崖となり、貝塚寺内の南端にあたる。調査では寺内を巡っていた濠を確認した。濠は調査区全域に及んでいる。調査区東側では現状地盤より約 0.7 mで地山の灰白色細砂となり、約 0.6 mの平坦面をもち、西側ではさらに深くなる。深さは１m以上である。濠は現水路に平行して北東～南西にあったものと考えられ、調査区より南東側に濠の端があると思われる。埋土は西側の一段低い部分に青灰色粗砂～砂礫（第５層)、暗青灰色中砂～細砂（第６層）が堆積している。その上は黒褐色粗砂～砂礫（第１層)、暗灰黄色（第２層)、暗紫灰色粘土ブロック混中砂～細砂（第３層)、灰白色中砂（第４層）が堆積している。遺物は第１層から陶器擂鉢、ほうらく、肥前系磁器碗などが出土した。

断面観察により、第１～４層は同時期に一括で埋められている。埋没時期は第１層出土遺物から 19 世紀代である。第５、６層は遺物の出土が無く、埋没時期は不明である。第１～４層と同時期か少し前に埋めたものと考えられる。調査地南西側の駐車場では調査時に濠が見つかっており、貝塚寺内南端の段丘崖際では濠が続いていたことが判明した。（上野裕子）

II　積善寺城跡

積善寺城跡は近木川左岸、標高 26 ～ 28 mの場所に位置する。熊野街道に沿った交通、戦略上の要地であり、永禄元年(1558)に根来衆の砦として築かれた。天正 13 年(1585)の豊臣秀吉の根来攻めの際には出原右京を大将として総勢 9,500 名が立て籠もったが、卜半斎了珍の仲介によって和談開城したという。

2000 － 54 区の調査

調査地は貝塚市橋本６－２である。開発予定地南東の浄化槽設置部分、建物基礎部分に 1.5 × 7.4 mの調査区

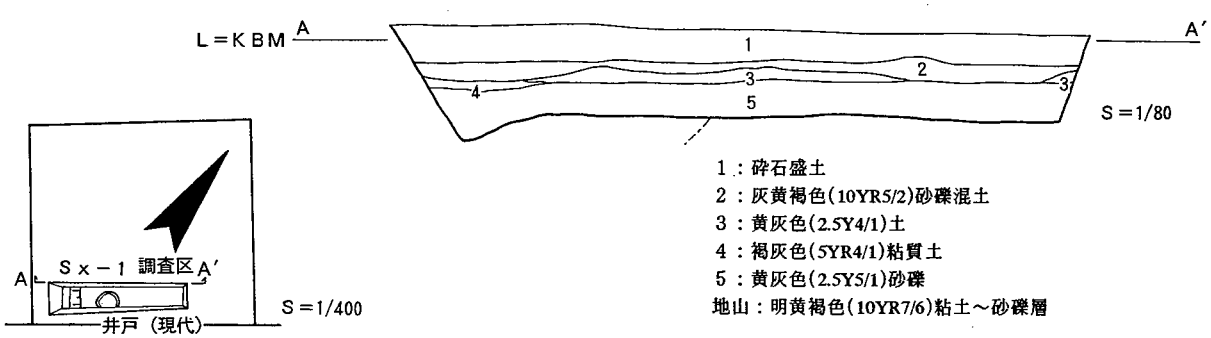


図 10　2000 － 54 区

を設定して行った。

調査地には砕石盛土(第１層、層厚 0.3 ～ 0.4 m)の下に灰黄褐色砂礫混土(第２層、層厚 0.1 ～ 0.3 m)、黄灰色土(第３層、層厚 0.1 ～ 0.2 m)、褐灰色粘質土(第４層、層厚 0.1 m)、黄灰色砂礫(第５層、約 0.4 m)が堆積している。第２層は既設建物に伴う層である。第３～５層は整地層である。第３、４層は分層したが、同一時期の整地層である。第２～４層は煉瓦片を含む。第５層からは幕末～明治の陶器片が出土した。地山は明黄褐色粘土～砂礫層で、現状地盤より約 0.9 mで検出した。

調査区南西端の地山上面では幅１mの落ち込みＳＸ－１を検出した。ＳＸ－１はなだらかに南西に向かって落ち、深さ約 0.3 mを測る。第５層整地時に一気に埋められ、滞水した形跡は認められない。形状や埋没状況から見て、自然のものと考えられる。その他の溝、建物等の遺構は認められなかった。　　(上野裕子)

Ⅲ　海塚遺跡

海塚遺跡は近木川右岸の洪積段丘上、南海本線貝塚駅より南東約 450 mの場所に位置する。今年度調査区より東側で平成８年度と平成９年度に民間開発に伴う発掘調査が実施され、奈良時代の溝や性格不明遺構、中世の溝等を検出している。周辺では現状地盤より 0.5 ～ 0.7 mで地山の洪積層に達するが、近世に建築用材として粘土採掘が行われ、各地で粘土採掘坑を検出している。

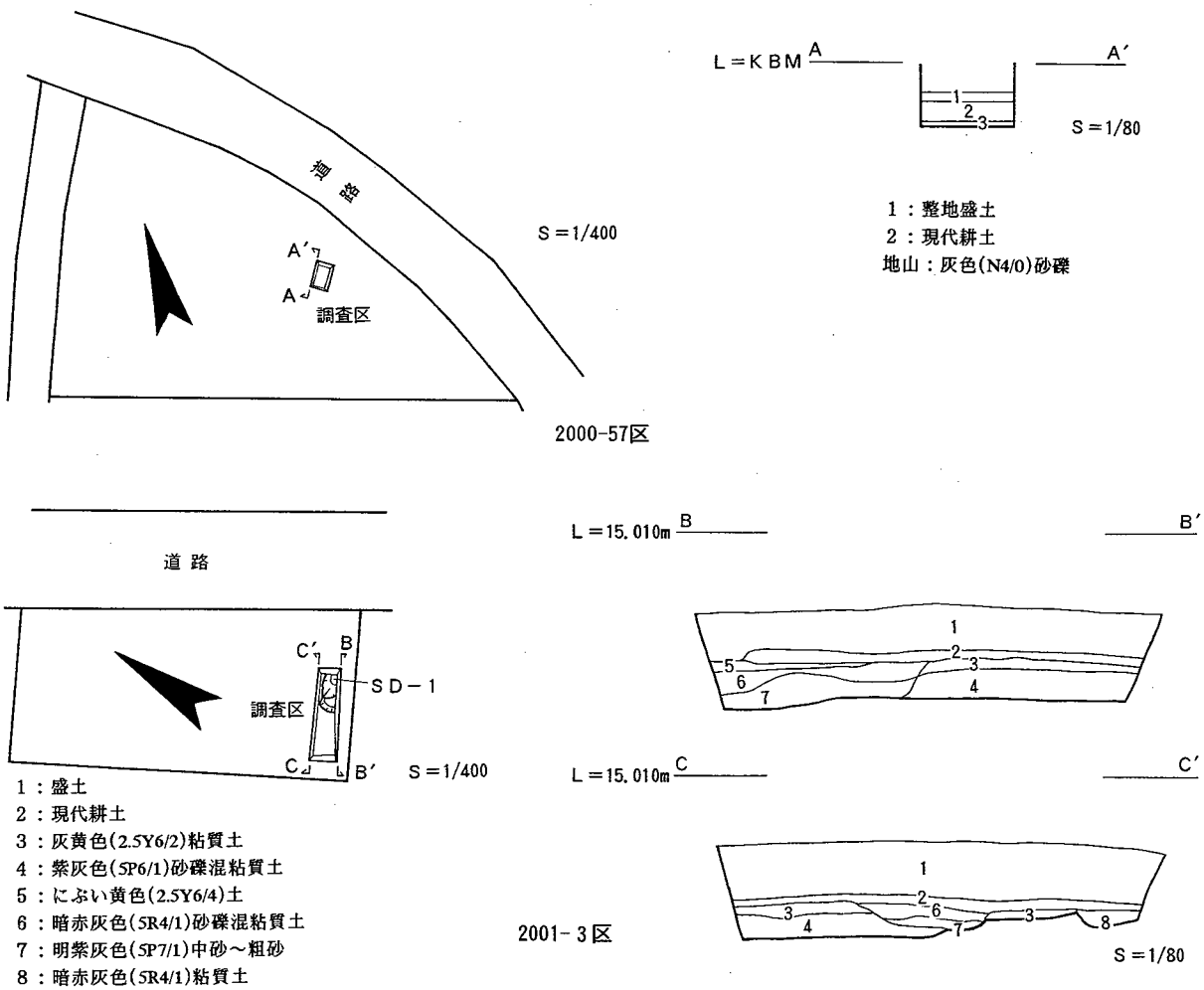


図 11　2000 － 57 区、2001 － 3 区

2000 － 57 区の調査

調査地は貝塚市海塚 302 － 1 である。建物建設予定地に 1 × 1.5 mの調査区を設定して行った。

調査区はすでに現状地盤より 0.4 mの基礎掘削が行われていた。基礎掘削面より下の土層堆積は整地盛土(第１層、層厚 0.2 m)、現代耕土(第２層、層厚 0.06 ～ 0.1 m)である。地山は灰色砂礫層で現状地盤より約 0.7 mにて検出した。地山上面にて遺構は確認できず、遺物の出土も無かった。　　(上野裕子)

2001－3区の調査

調査地は貝塚市海塚173である。調査は建物建設予定部分南東に1.5×5mの調査区を設定して行った。

調査地には上から層厚0.5～0.6mの盛土（第1層）、層厚0.1mの現代耕土（第2層）が堆積する。地山面は調査地北東から南西にかけて約0.3～0.4m低くなり、北東では現状地盤より0.6mの現代耕土直下、南西では現状地盤より0.9～1mにて検出する。地山の低い部分には灰黄色粘質土（第3層、層厚0.1m）、紫灰色砂礫混粘質土（第4層、層厚0.25～0.3m）が堆積している。第3層と第4層は耕作土とは考えにくく、また細かいブロック等を含むため、地山が低い部分を整地して平坦にするために人為的に入れた土と考えられる。

遺構は第2層下面より切り込む溝ＳＤ－1を検出した。ＳＤ－1は幅1.4～2.2m、深さ0.2～0.4mを測り、やや蛇行してほぼ東西方向に流れている。埋土は上層が暗紫灰色砂礫混粘質土、下層が明紫灰色中砂～粗砂である。下層から奈良時代の土師器が出土した。

調査地の周辺で行った発掘調査では、平成9年度に前面道路をはさんで北側で行った調査（98－9次調査）と南東で平成8年度に行った調査（97－55次調査）がある。98－9次調査では中世の溝を検出し、97－55次調査では中・近世の溝、土坑等のほか奈良時代の溝を検出している。

97－55次調査では地山面が北東にむかって低くなり、最も高い部分でTP＋14.000m前後である。98－9次調査ではTP＋12.000mとなり、調査地から97－55次調査区にかけての範囲が周囲より一段高くなっている。奈良時代の遺構はこの一段高い部分に存在する。

97－55次調査で検出した奈良時代の溝と今回調査で検出した溝ＳＤ－1はほぼ直交しており、何らかの関係がある可能性が高い。今後周辺の調査を含めて慎重に考えていく必要がある。（上野裕子）

Ⅳ　東遺跡

東遺跡は海塚遺跡の北東に位置する中世～近世の集落跡である。平成6年度～平成7年度にかけて実施した市営住宅建て替えに伴う発掘調査では、近世の大規模な粘土採掘坑や動物の骨が大量に出土した土坑を検出したほか、中世の井戸を検出して中世集落の北端部を明らかにした。

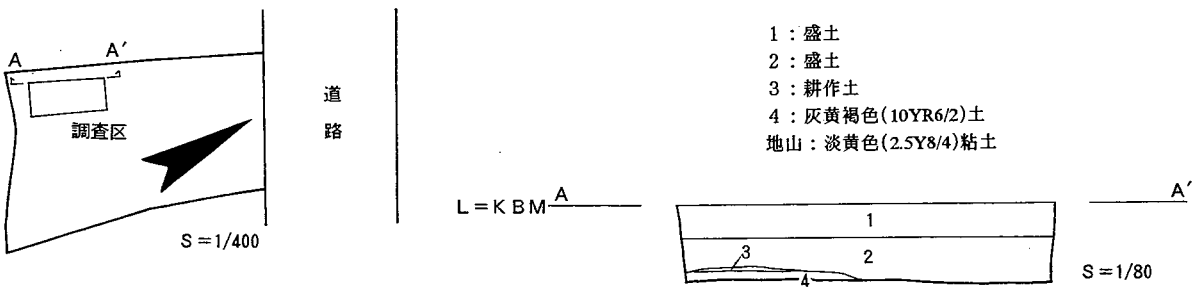


図12　2000－60区

2000－60区の調査

調査地は貝塚市堀1丁目706－4、706－7である。調査は、基礎掘削部分に調査区を設定した。

地層の状況は、現状地盤から盛土（第1層、約0.7m）、耕作土（第2層、0.05m）、灰黄褐色土（第3層、0.1m）、地山（淡黄色粘土）である。第2層は削平を受けており、調査区の一部分で残っているにすぎない。遺構は検出できなかった。遺物は第2層から須恵器、土師器（奈良時代～平安時代）、盛土から印判染付（明治時代）が出土した。調査区では、地山面まで削平により破壊を受けている状況であった。（三浦基）

Ⅴ　堀秋毛遺跡

堀秋毛遺跡は近木川右岸の洪積段丘上に位置する中世の集落跡である。遺跡の北側には東遺跡、西側には海塚遺跡が隣接する。周辺では開発が少なく調査例は乏しいが、中世の包含層を確認している。立地条件から今後集落等の遺構検出が期待できる遺跡である。

2001－6区の調査

調査地は貝塚市海塚27－1の一部、27－9である。調査は開発予定地南西側に1.8×6.7mの調査区を設定して行った。

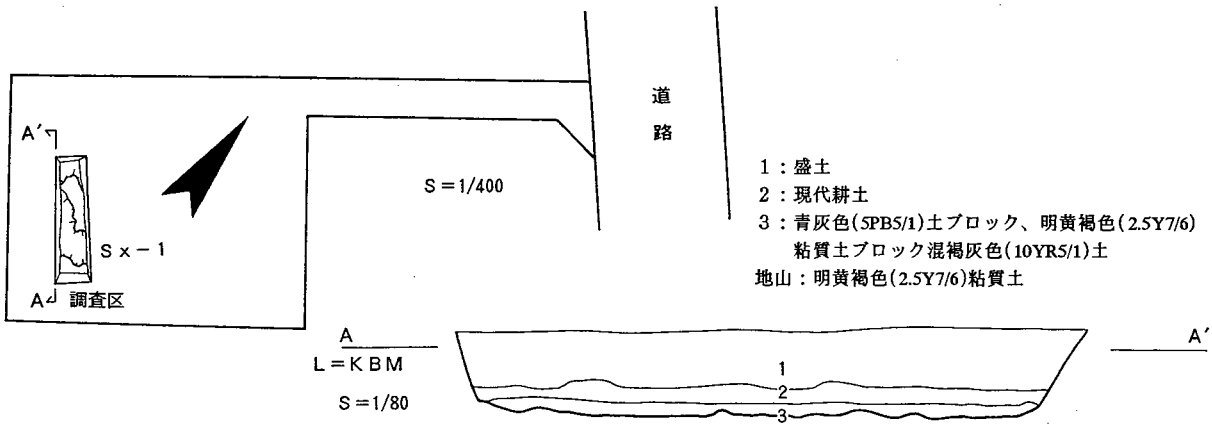


図13　2001－6区

調査地では盛土(第1層、層厚0.5～0.6 m)、現代耕土(第2層、層厚0.2～0.25 m)の下で地山となる。地山は明黄褐色粘質土で、現状地盤より0.7～0.8 mで検出した。

地山上面ではほぼ全面において、落ち込みSX－1を検出した。SX－1は青灰色土ブロックや地山の明黄褐色粘質土ブロックが混在する褐灰色土を埋土とする。周辺の海塚遺跡、東遺跡等の調査でも同様の遺構を検出しており、粘土採掘坑と考えられる。粘土は貝塚寺内の町屋を建築するためのもので、江戸時代に採掘されたと考えられる。　(上野裕子)

Ⅵ　加治・神前・畠中遺跡

加治・神前・畠中遺跡は近木川右岸の洪積段丘上に位置する。遺跡内は近年開発に伴う発掘調査が最も多く実施されている。調査では弥生時代～近世までの遺構を確認している。とくに貝塚市役所周辺から南海本線にかけての一帯は弥生時代前期、古墳時代後期、飛鳥～平安時代の集落が確認され、飛鳥～平安時代には検出遺構や出土遺物から役所等の公的な建物が存在したと考えられる。また、平安時代には熊野参詣に伴う貴族の休憩所「近木堂」が推定され、平成12年度には寺院建立に伴う瓦窯を発見している。

2001－1区の調査

調査地は貝塚市加神2丁目308の一部である。調査は開発地内に0.8×4 mの調査区を設定して実施した。

地層状況は表土（層厚0.15 m、第1層)、耕作土（層厚0.1 m、第2層)、盛土（層厚0.2 m、第3層)、灰黄褐色土（層厚0.3 m、第4層)、にぶい黄褐色土（層厚0.2 m以上）で、地山面は基礎掘削の関係で確認できなかった。遺物は第3層から陶磁器（幕末～明治期）が出土しているほか、第4層は近世陶磁器を含む包含層である。遺構は確認できなかった。

調査地は、幕末期～明治期にかけて盛土を行い、一時的に耕作地として利用していた。その後、盛土を行い宅地として利用し、現在に至っている。　(三浦基)

2001－17区の調査

調査地は貝塚市加神2丁目331－2である。調査は開発地内北側に1.3×5.2 m、南側に1.3×5.1 mの調査区を設定した。調査区名は前者を第1区、後者を第2区とした。

調査区内には上から現代盛土(第1層、層厚0.3～0.5 m)、現代耕作土(第2層、層厚0.1～0.15 m)、褐灰色砂礫混土(第3層、層厚0.2～0.7 m)が堆積している。第1区については建物基礎部分に該当し、工事の関係により第3層下面にて掘削を中止した。第1区では北端で黄橙色砂礫の地山面を検出し、地山面は南側に向かって低くなる。低い部分には黄褐色粘質土ブロック混褐灰色土(第4層、層厚0.2～0.3 m)、青灰色粘質土(第5層、層厚0.15～0.3 m)が堆積している。第2区では地山は明黄褐色粘質土で、現地表面より1.3 mで検出した。第3～5層は粘土ブロック等を含み、周辺の耕作に伴う層と比べると堆積状況は緻密ではなく、整地盛土と考えられる。地山面では遺構は検出しなかった。遺物は第3層より江戸時代の肥前系磁器、煉瓦、瓦等が出土し、近代の盛土と考えられる。第4、5層についても周囲の状況から考えて近世以降に盛土されたと考えられる。

周辺の調査では一帯は近木川の影響を受けており、流路等を確認している場所がある。調査地においても近世

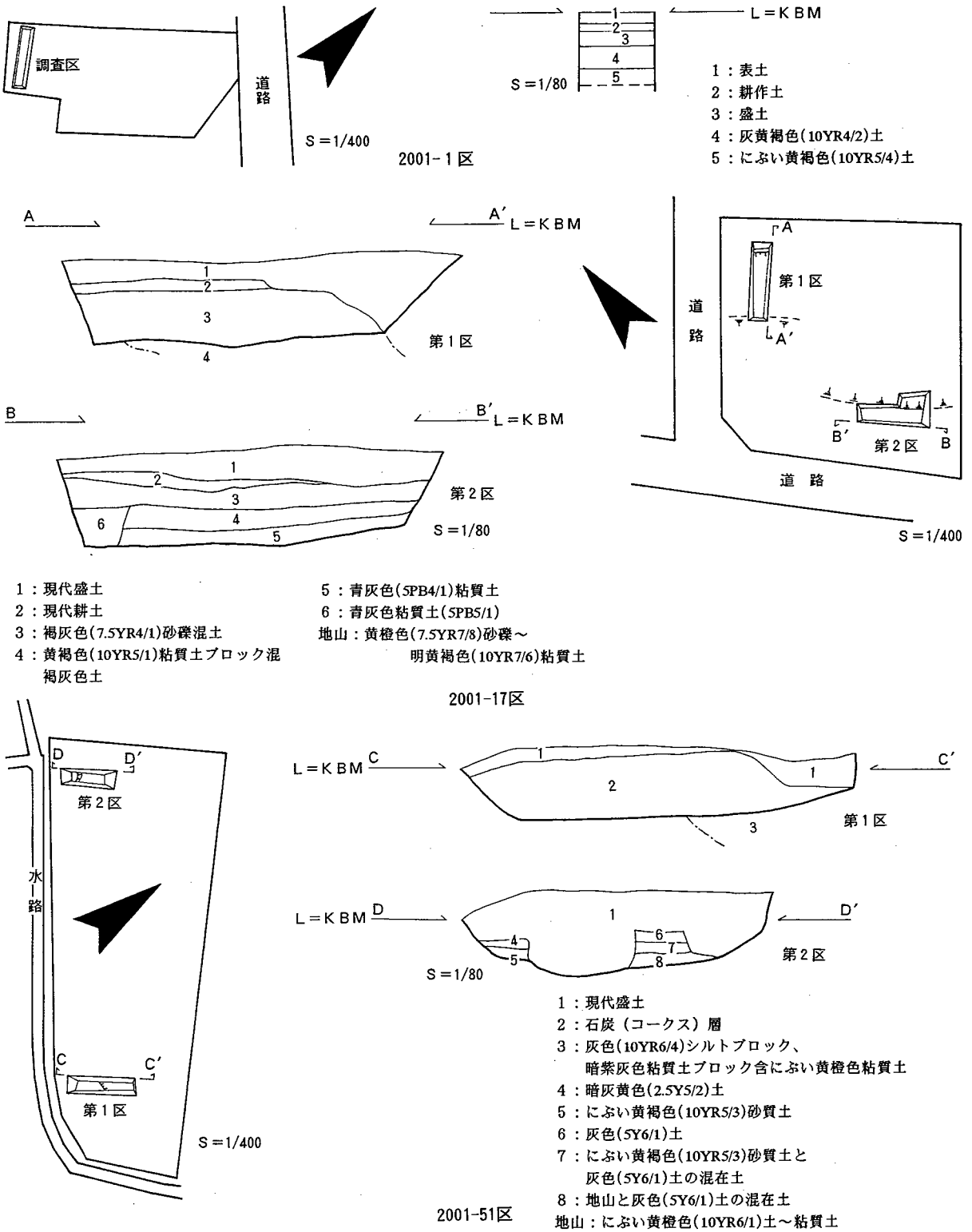


図14　2001－1区、2001－17区、2001－51区

まで土地は安定せず、近世のある時期以降に盛土をくり返して生活面を築いていたと考えられる。(上野裕子)

2001－51区の調査

調査地は貝塚市畠中2丁目171－4である。調査は開発地内の南東側と北西側に1.1×5.2 m、1.1×4 mの調査区を設定し、第1区、第2区とした。

調査地には現状地盤より0.1～0.6 mの盛土が堆積する。その下は第2区の南西隅で耕作土を2層確認した以外はすべて現代のコークス層を含む撹乱層が堆積していた。耕作土は近世陶磁器が出土し、19世紀以降のもの

と考えられる。地山はにぶい黄橙色粘質土で、現状地盤より 0.8 ～1 mで検出した。地山上面では遺構は確認できなかった。撹乱や第1区の少し窪んだ部分には古代～中世の層の一部や遺物が確認できる。もともと遺構はあったと考えられるが、近、現代に削られたようである。 （上野裕子）

Ⅶ　清児遺跡

清児遺跡は近木川右岸の洪積段丘上に位置し、市中央部の標高 30 ～ 35 mの場所に広がる奈良～平安時代の散布地である。発掘調査では近木川分流と考えられる埋没河川が数条確認され、現在残る溜池はそれらの流路を堰き止めたものと考えられる。遺跡南東の府道貝塚中央線に伴う調査では飛鳥時代の土坑、平安時代の掘立柱建物等を検出し、古代に集落が営まれた。中世には耕作地として開発され、全域で鍬溝や耕作土を確認している。

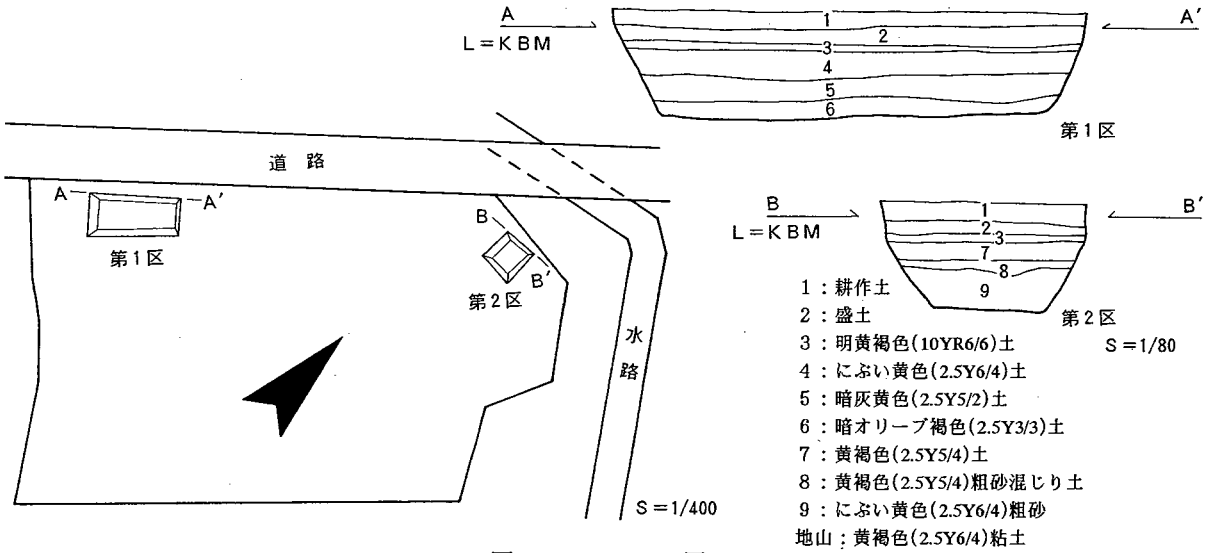


図15　2000 － 67 区

2000 － 67 区の調査

調査地は貝塚市麻生中 276 － 1 である。調査は開発地内2ヵ所に調査区を設定した。

第1区（2×5 m）の層序は、上層から耕作土（第1層）、盛土（第2層）、明黄褐色土（第3層）、にぶい黄色土（第4層）、暗灰黄色土（第5層）、オリーブ褐色土（第6層）で地山は黄褐色粘土である。遺物包含層は、第5層（土師器、須恵器、瓦器）、第6層（瓦器）であり、中世の遺物が出土した。遺構は検出できなかった。

第2区（2×2 m）の層序は第1層から第3層は同様であるが、黄褐色土（第8層）、黄褐色粗砂混じり土（第9層）、にぶい黄色粗砂（第 10 層）で自然層（地山）は黄褐色粘土である。第 9 層、第 10 層は堆積状況から流路の可能性がある。遺物は第8層から青磁（中世）が出土している。 （三浦基）

Ⅷ　名越遺跡

名越遺跡は近木川右岸の洪積段丘上に位置し、清児遺跡の南に隣接する。遺跡内のほとんどは市街化調整区域

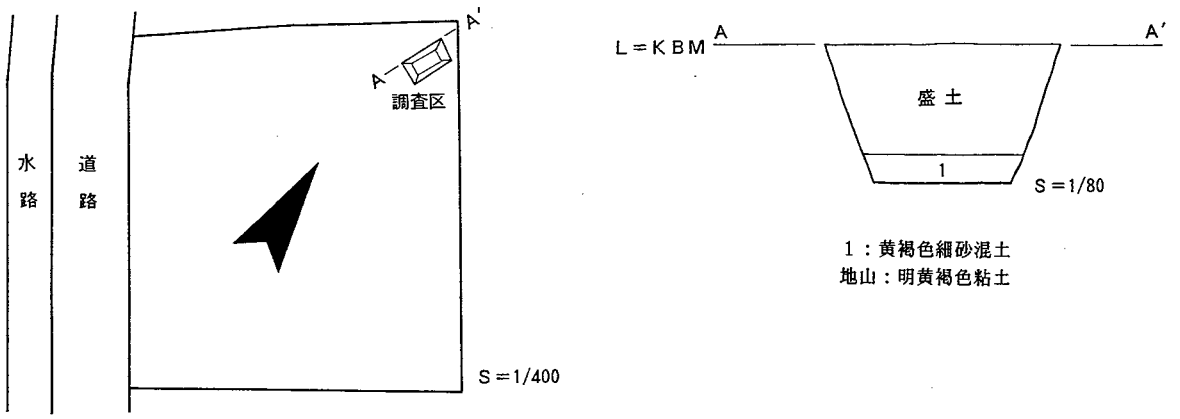


図16　2000 － 68 区

で開発に伴う発掘調査例は少ないが、中世の遺物包含層や耕作跡を確認している。

2000－68区の調査

調査地は貝塚市清児358－3である。調査は開発地内に1.3×2.5 mの調査区を設定した。

地層状況は層厚1.16 mの盛土の下に、黄褐色細砂混じり土（層厚0.3 m、第1層）が堆積し、地山の明黄褐色粘土となる。第1層は遺物を含む層（遺物包含層）である。遺構は確認できなかった。遺物は第1層から土師器、瓦器（中世）が出土しており、調査地の開発が中世には開始されたことがあきらかとなった。　（三浦基）

Ⅸ　窪田遺跡・窪田廃寺

窪田遺跡・窪田廃寺は近木川と見出川に挟まれた洪積段丘上に位置する。北東には弥生時代～中世にかけての集落が確認されている沢遺跡、明楽寺跡、沢城跡、澱池遺跡等が隣接している。遺跡北半部では今年度調査地南側の民間開発に伴う調査で中世の掘立柱建物や飛鳥～平安時代の溝、落ち込み等を検出しているが、南半部では遺構の検出は少ない。また、小薬師の字名が残る場所は古くから瓦が出土し、平安時代の蓮華文軒丸瓦や宝塔文軒丸瓦が採集されている。

2001－30区の調査

調査地は貝塚市沢1369－8、－18、－22である。

調査は開発地内の地盤改良実施部分において地山上面での遺構検出を行い、調査区南半では柱穴を検出した。北半では西側4分の1の範囲において遺構検出を行ったが、地山の状況が異なり、柱穴等遺構の密度が薄いことから、これより北側の遺構の広がりはないと判断し、東側の調査は行わなかった。調査区は幅5 m、西側の長さ5.9 m、東側の長さ約3.5 mのL字型の調査区となった。

調査区内には盛土(第1層、層厚0.3～0.6 m)、黄色粘土ブロック含灰色土～暗青灰色土の現代攪乱土(第2層、層厚0.1～0.3 m)、旧耕作土(第3層、層厚0.05～0.2 m)の下に、褐灰色土(第4層、層厚0.1～0.15 m)が堆積していた。第4層からは瓦器、土師器、須恵器、瓦等中世の遺物が出土し、下面に第4層を埋土とする鍬溝を確認していることから、中世の耕作に伴う層であると考えられる。地山は南半が黄色粘質土で、現地表面より0.7～0.8 mで検出するが、北半では明黄褐色粘質土となり、地山検出面は南半より若干高い。

柱穴は5基確認した。Pit 1と3は掘方が一辺0.3～0.4 mの隅丸方形を呈し、埋土は暗紫灰色粘質土である。Pit 3には径0.1 mの柱痕が確認された。Pit 2と4は径0.2～0.3 mの円形を呈している。埋土は暗紫灰色粘質土である。Pit 5は0.4×0.2 mの隅丸長方形を呈し、埋土は紫灰色粘質土である。柱穴の形状、埋土の状況により、Pit

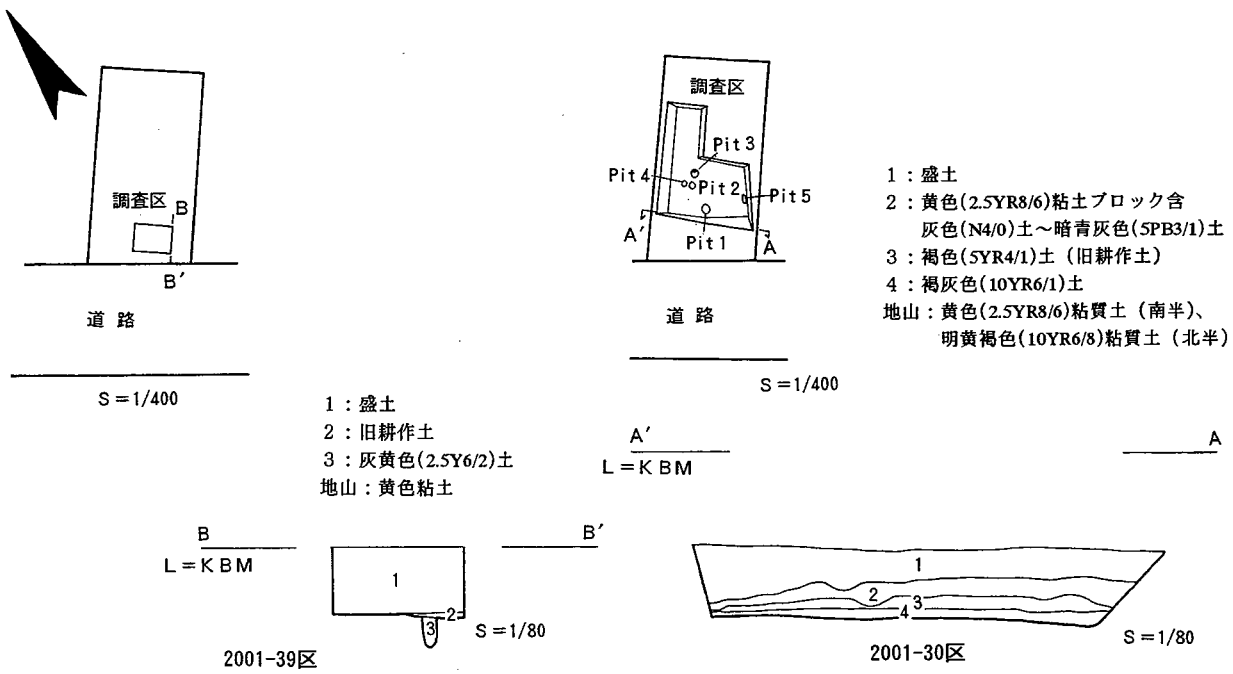


図17　2001－30区、2001－39区

1と3、Pit 2、4、5がそれぞれ同一建物を構成するものと考えられる。このうち、Pit 2と3について掘削を行った。Pit 2は検出面よりの深さ 0.06 ～ 0.07 mを測り、断面の形状は緩やかなU字型を呈している。Pit 3は検出面よりの深さ 0.1 mまで掘削したが、開発基礎掘削深度の関係で底面まで検出できなかった。断面の形状は逆台形になると思われる。Pit 2と3ともに瓦器、土師器が出土した。柱穴の埋土は上層の第4層と異なり、調査区には堆積していないことから、調査区は第4層にて耕作時に削られたと考えられる。

調査地南側周辺では、発掘調査で中世の掘立柱建物や井戸を検出しており、沢地域にかけて中世の集落が広がっていたことが確認されている。今回の調査によって、これら集落の北限が確認でき、中世集落の範囲を考えるうえで重要な結果となった。 (上野裕子)

2001 － 39 区の調査

調査地は貝塚市沢 1369 － 17、19 で、2001 － 30 区の隣地である。今回は浄化槽設置部分で調査を実施した。

層序は 0.4 mの盛土の下に耕作土（0.1 m）、旧耕作土（0.05 m）が部分的に残り、その下は黄色粘土の地山である。地山面は削平を受けていたが、土層断面にかかる幅 0.15 m、深さ 0.3 mの柱穴を検出した。柱穴内からは瓦質羽釜、土師質土器片が出土しており、中世の遺構と考えられる。 (三浦基)

X　沢新出遺跡

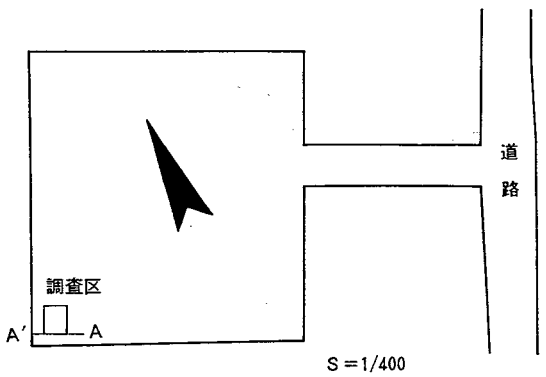
沢新出遺跡は見出川右岸の海岸部に位置する弥生時代の散布地である。遺跡の北西はすぐ大阪湾となり、二色の浜公園から近い部分にある。南東の洪積段丘上には沢遺跡、沢城跡等の弥生～中世の遺跡が存在している。

2001 － 4 区の調査

調査地は貝塚市沢 398 － 2 の一部である。調査は開発地内に 1.2 × 1.5 mの調査区を設定して行った。

地層の状況は、上層より耕作土（第1層、層厚 0.6 m）、黄褐色中粒砂混じり土（第2層、層厚 0.36 m）、オリーブ褐色粗砂（第3層）となっており、3層ともに砂を多く含んだ層である。遺構は検出できなかった。遺物は第1層からは煉瓦、瓦、磁器染付（近世）が出土している。第2層からは近世（江戸時代）のものと考えられる土師質蛸壺1点が出土している。

調査地の立地、出土遺物や地層の状況から近世以降に土地が利用されはじめたと考えられる。 (三浦基)



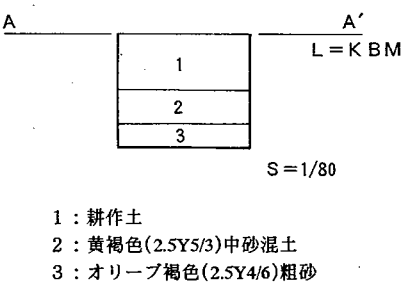


図18　2001 － 4区

XI　土生遺跡

土生遺跡は津田川右岸の洪積段丘上に位置し、貝塚市から岸和田市にかけて広がる弥生～古墳時代、中世の集落跡である。遺跡内は弥生～古墳時代の溝等を多数検出している。特に平成8年度に実施した宅地造成に伴う発掘調査では集落の南限を画する弥生時代後期～古墳時代前期の溝を検出した。また、青磁碗や土師器皿、古銭を埋納した中世の土坑墓を検出している。

2001 － 12 区の調査

調査地は貝塚市久保 187 － 3、581 － 3 である。調査は建物建設予定地に 1 × 4 mの調査区を設定して行った。

調査地には上から現代耕土(第1層、層厚 0.1 ～ 0.3 m)、中砂～粗砂ブロック含黄灰色粘土(第2層、層厚 0.2 ～ 0.35 m)、中砂ブロック含灰白色粘土(第3層、層厚 0.1 m)が堆積している。第2、3層はブロック等を含み、整地土であると考えられる。地山は灰白色粘土で現状地盤より 0.35 ～ 0.55 mで検出した。遺構、遺物は確認さ

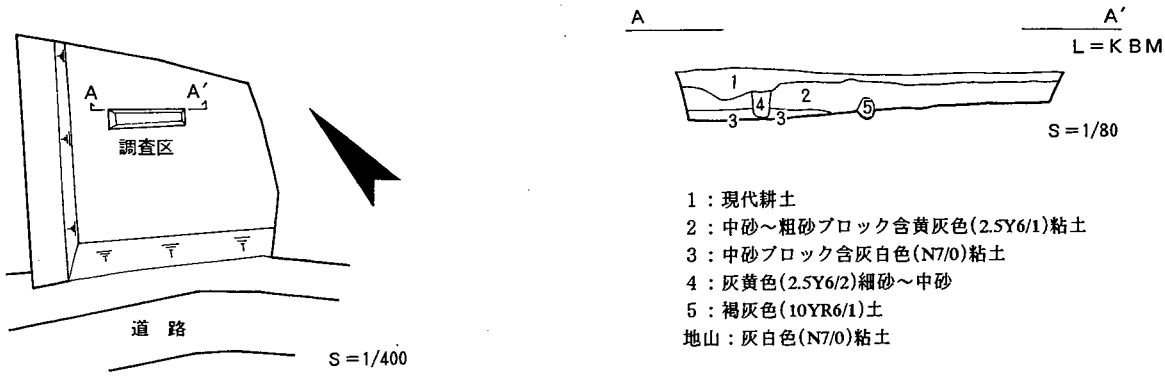


図19　2001－12区

れなかった。

調査地と南側道路面には約1mの段差がある。更に南側には津田川が流れており、この段差は津田川開析谷端部にあたるものと考えられる。緩やかな谷地形が、土地の改変を受け現在のような段差になったものと思われる。開析谷内には中世(13世紀～16世紀)の包含層や古墳時代(3世紀～5世紀)の流路等が存在している。調査地にも包含層が存在した可能性は高いが、削平されたと考えられる。　(上野裕子)

XII　新井ノ池遺跡

新井ノ池遺跡は近木川と津田川に挟まれた洪積段丘上、標高27～28mの場所で、新井ノ池の南側に位置する。北東には白鳳期の寺院である秦廃寺が存在したとされ、寺院建立に関わる人々の集落も検出している。平成9年度に遺跡南側の貝塚市立中央小学校の校舎増築に伴う調査で、中世～近世の耕作跡のほか、自然流路を検出した。新井ノ池は谷地形を利用して溜池としており、周辺では埋没河川の影響を受け、土地の起伏があり、遺構の有無は場所によって異なる。遺跡東側では民間開発に伴う発掘調査で古墳時代の溝を確認している。

2001－18区の調査

調査地は貝塚市鳥羽64－1、－2である。調査は開発者の了承を得て、開発地内南西側に1×2mの調査区を設定し、土層確認を行った。

調査区には現状地盤直下に層厚約1mで砕石を含む廃材が堆積している。調査地は既設建物建設以前に石加工業が営まれており、石加工の際に出た廃材等を埋めたものと考えられる。その下は黄褐色砂礫の湧水層となる。調査地周辺は北へ流れる埋没河川の存在が推定されており、発掘調査でも度々自然流路が確認されている。検出した黄褐色砂礫も周辺調査例と同様、流路堆積と考えられる。遺構、遺物は認められない。　(上野裕子)

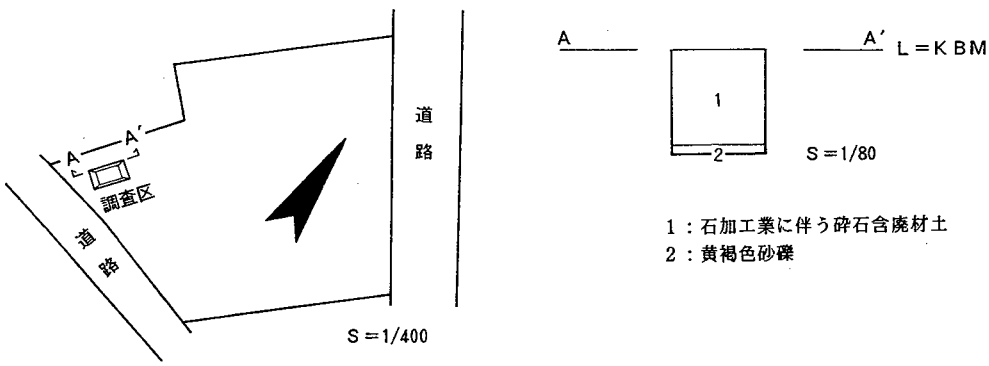


図20　2001－18区

XIII　津田遺跡

津田遺跡は津田川左岸の洪積段丘上に位置する。一帯は建築用材や窯業のための粘土採掘が頻繁に行われ、遺跡南側の貝塚市民病院建設に伴う調査では、近世～近代の粘土採掘坑を検出している。また、紀州街道に面した場所には、幕末～明治時代の陶器、和泉音羽焼の窯跡が存在したとされ、窯跡の北側には灰原も残っている。周辺の発掘調査では窯道具のほか、未製品を含む和泉音羽焼の陶器片が多量に出土する。

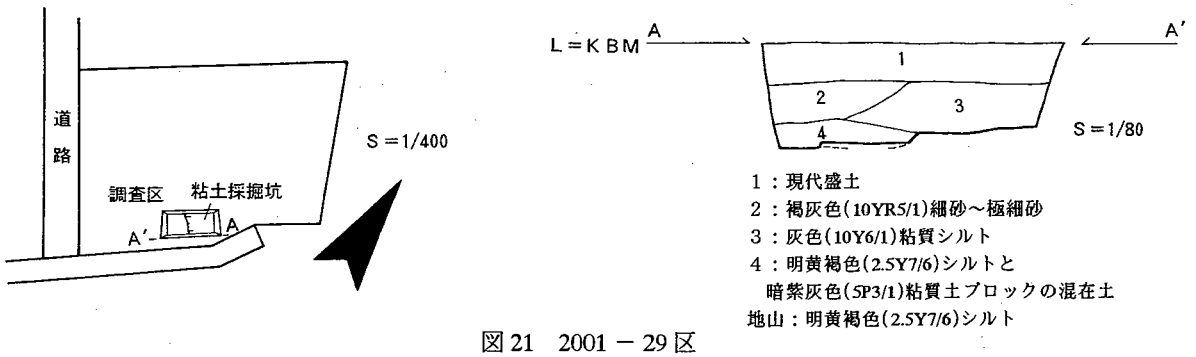


図21　2001－29区

2001－29区の調査

調査地は貝塚市堀3丁目298－5、297－13である。調査は開発地内に、北東～南西方向、1.3×3mの調査区を設定し実施した。

調査区内には上から順に現代盛土(第1層、層厚0.4 m)の下に、褐灰色細砂～極細砂(第2層、層厚0.4 m)、灰色粘質シルト(第3層、層厚0.5 m)の整地土が堆積していた。第2、3層の下面からは現代の瓦片が出土しており、整地は既設建物に伴うものと考えられる。地山は明黄褐色シルトで、現地表面より約0.9 mで検出した。

調査区の北東側では、検出幅1.5 m、深さ約0.25 mの土坑を検出した。埋土は明黄褐色シルトと暗紫灰色粘質土ブロックの混在土である。周辺の調査では建築用材の粘土採掘坑を検出しており、埋土の状況が同様であることから、本調査で検出した土坑も粘土採掘坑であると考えられる。時期は明治時代頃と考えられる。遺物は出土しなかった。　(上野裕子)

XⅣ　麻生中下代遺跡

麻生中下代遺跡は津田川及びその支流である小淵川左岸洪積段丘上に位置する。東側には白鳳期の寺院跡である秦廃寺のほか、半田遺跡、麻生中遺跡が近接する。今年度の調査地に隣接した府営住宅の建て替えに伴う調査では、秦廃寺寺域の南限を示す段差を確認したほか、6世紀後半から8世紀前半にかけての竪穴住居や掘立柱建物等を検出した。これら建物は秦廃寺他の周辺遺跡でも検出しており、秦廃寺に関連した人々の集落と考えられる。そのほか、弥生時代の竪穴住居跡も検出している。

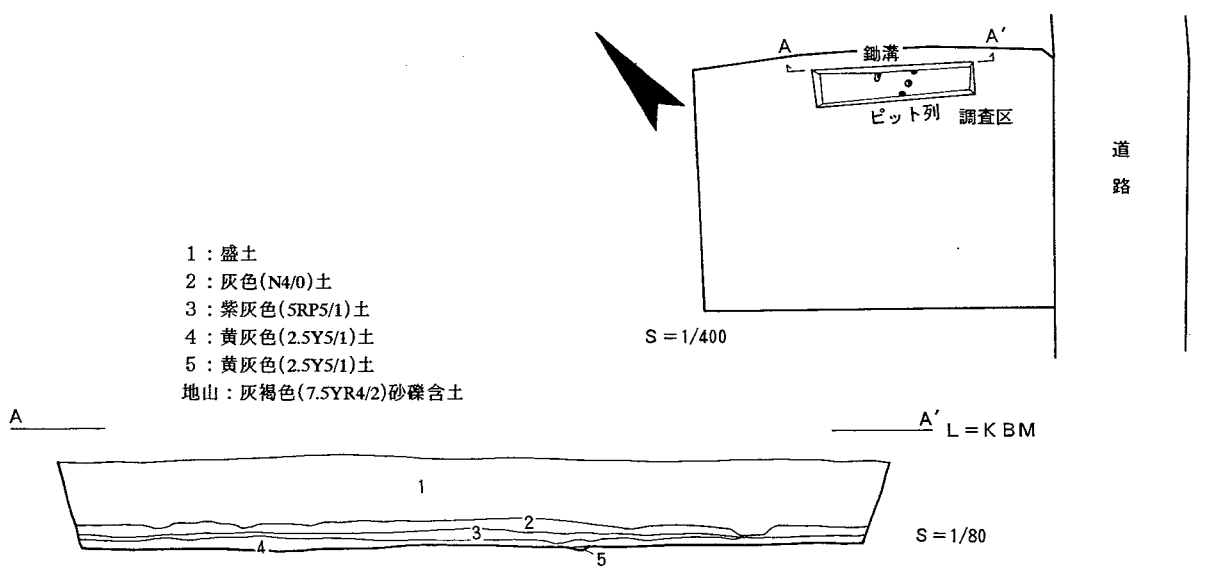


図22　2001－23区

2001－23区の調査

調査地は貝塚市鳥羽64－1、64－2である。調査は開発地内北東に、8.8×1.5 mの調査区を設定し実施した。

調査区内には上から順に盛土(第1層、層厚0.6～0.7 m)、灰色土(第2層、層厚0.1 m)、紫灰色土(第3層、層厚0.05～0.1 m)、黄灰色土(第4層、層厚0.1～0.15 m)の4層が堆積している。第2層は既設建物以前の耕作土である。第3層は削平により調査地南東にかけて薄くなる。地山は灰褐色砂礫含土で、現地表面より0.9～

0.95 mで検出した。

地山上面にて耕作に伴う鍬溝やPit列を検出した。いずれも埋土は第4層と同じ黄灰色土である。Pit列は径0.15～0.25 mを測る円形のPitがW－45°－Nで並ぶ。遺構の深さは0.05～0.1 mと浅い。上面が削平を受けたためと考えられる。

第4層からは土師器、須恵器が多量に出土しているが、瓦器が若干出土しているので、堆積したのは中世（鎌倉～室町時代）と考えられる。土師器、須恵器は奈良時代（陶邑Ⅳ型式）のもので、下層に奈良時代の包含層が堆積していた可能性が高い。

調査地北東の府営住宅建て替えに伴う発掘調査では、弥生時代～奈良時代にかけての建物や溝、遺物包含層などが検出されている。府営住宅から調査地を含む北西側は地山面が高くなる。調査地には元来、奈良時代の包含層、遺構が存在していたが、中世の開発により削平されたものと考えられる。（上野裕子）

XV　地蔵堂遺跡

地蔵堂遺跡は近木川左岸の南東～北西にのびる台地上に位置する。遺跡内には昭和31年に国史跡の指定を受けた地蔵堂丸山古墳、平安時代の寺院跡である地蔵堂廃寺跡を含んでいる。地蔵堂丸山古墳の南側では貝塚市立南小学校の体育館等の建設に伴う発掘調査で円墳2基、方墳2基の埋没古墳を検出している。台地上部は近世以降の削平等を受け、遺構の検出は少ない。

2001－8区の調査

調査地は貝塚市地蔵堂181－2である。調査は建物基礎予定地に1.3×5 mの調査区を設けて行った。

調査区の土層は上から盛土(第1層、層厚0.25～0.6 m)、現代耕土(第2層、層厚0.1～0.25 m)、灰黄色土(第

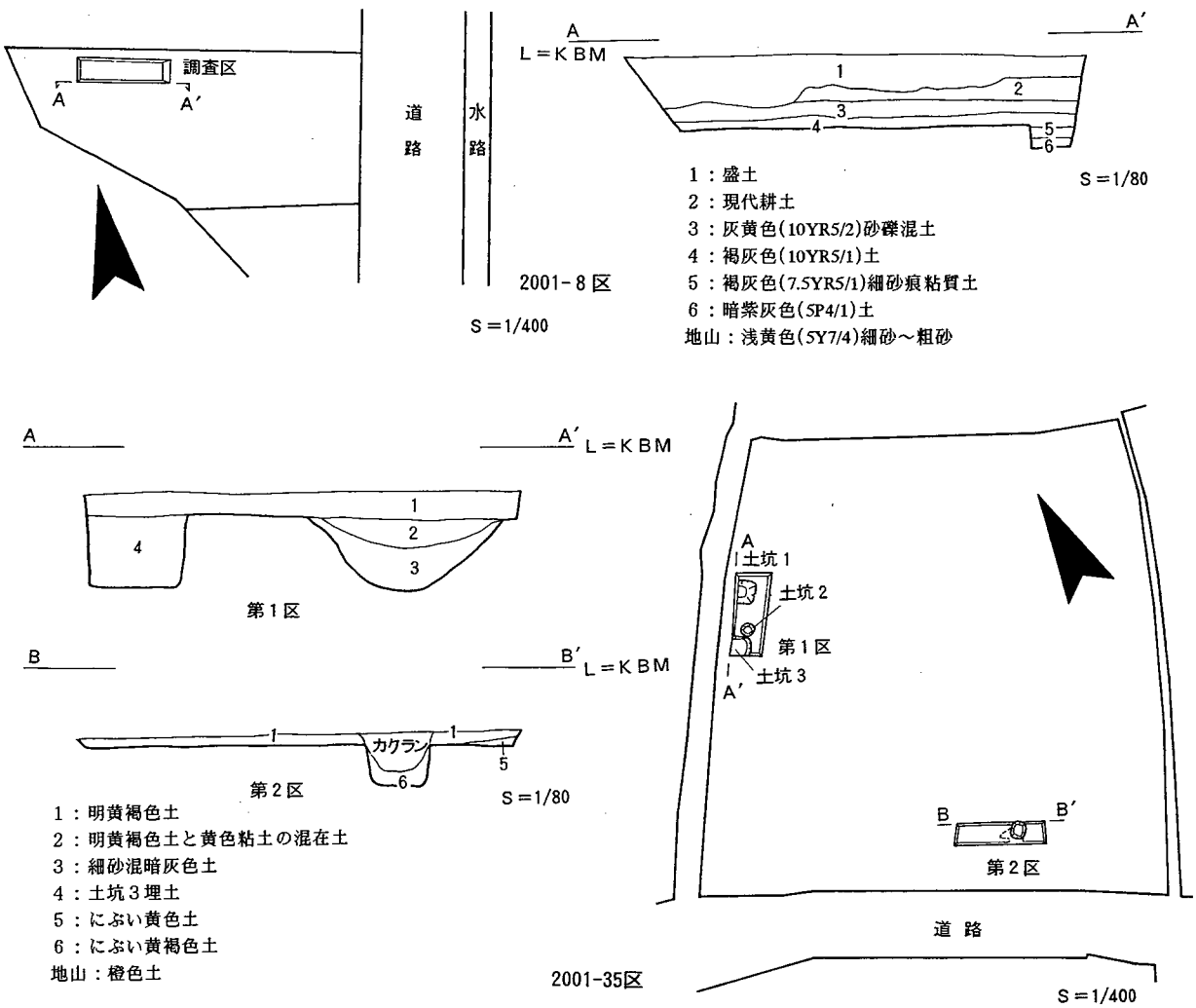


図23　2001－8区、2001－35区

3層、層厚0.1～0.2 m)、褐灰色土(第4層、層厚0.1～0.15 m)、褐灰色細砂混粘質土(第5層、層厚0.15 m)、暗紫灰色粘質土(第6層、層厚0.1 m)が堆積している。

調査は基礎掘削深度を越えない範囲で行うこととなり、第5層の上面にて検出を行い、5～6層と地山については部分的に確認した。

遺物は第4層から瓦器片が出土した。第3層には土師器細片が確認されたが、胎土が脆く取り上げられなかった。周辺の調査例および出土遺物から第3層は近世～中世、第4、5層は中世、第6層は中世以前の時期が与えられる。

地山は浅黄色細砂～粗砂で現状地盤より約1mで検出した。地山面は湧水層で調査地周辺は流路であった可能性が高く、第6層は流路埋没後に堆積した自然層と考えられる。第3～5層は耕作土である。　(上野裕子)

2001－35区の調査

調査地 は貝塚市地蔵堂274－1である。調査は2ヵ所（約15 ㎡）の調査区を設定して行った。

基本層序は0.1～0.2 mの明黄褐色土層（第1層、撹乱盛土層）の下は、橙色土（第4層、地山層）である。地山面は削平を受けていたが、地山上面で土坑4ヵ所（第1区・土坑1～土坑3、第2区・土坑4）を検出した。

土坑1は長軸1.3 m、断面すり鉢状で砂を多く含む。埋土中に20cm以上の石が含まれ、石組みの水溜であったと考えられる。遺物は江戸時代後半の陶磁器、瓦が出土している。土坑2、土坑3は有機物を多く含む状況から、便槽と考えられる。土坑2は直径0.5 mで底部に0.3 mの円板を置く。土坑3は1辺1 m以上の方形である。遺物は江戸時代末～明治期の陶磁器、瓦が出土している。土坑4は1辺0.7 mの方形で、遺構の一部が撹乱を受けている。埋土はにぶい黄褐色土で中世の瓦、土師質土器が出土した。特に瓦が多く出土しており、瓦を廃棄した土坑と考えられる。　(三浦基)

XVI　三ヶ山西遺跡

三ヶ山西遺跡は近木川右岸の洪積段丘高位に位置する。近木川は遺跡の南側で東西2方向から流れてきた川が合流している。合流地点には水間観音が建てられている。合流した川は大きな流れとなり、遺跡西側にある現在の三ツ松集落内付近までは氾濫原が広がり、近世まで開発を受けていない。一方、遺跡の東寄りを通る府道貝塚中央線建設に伴う発掘調査では、6世紀末～7世紀前半の掘立柱建物、竪穴住居を検出し、集落が広がっていたことを確認している。

2000－69区の調査

調査地は貝塚市三ツ松543である。今回の調査は2 m×3 mの調査区を設定して行った。

堆積状況は上から盛土（層厚0.2 m、第1層）、耕作土（層厚0.14 m、第2層）、黄褐色細砂混じり土（層厚0.22 m、第3層）、黄褐色砂質土（層厚0.04 m、第4層）、にぶい黄褐色土（層厚0.3 m、第5層）、灰黄褐色土（0.13、第6層）で地山は明黄褐色粘土である。第3層、第4層は旧耕作土であり、第5層は第4層と混じっている状況が観察できる。このような状況から、調査地では耕作土を運び込みかさ上げを行っていることが考えられる。第6層は遺物包含層である。遺構は検出できなかった。遺物は第6層から瓦器が出土した。　(三浦基)

2001－20区の調査

調査地は貝塚市三ツ松690－3である。調査は開発地内の浄化槽設置予定部分に、2.4 × 1.7 mの調査区を設定し実施した。

調査区内には7層の土層が堆積していた。上から順に盛土(第1層、層厚1 m)、暗青灰色土(第2層、層厚0.1 m)、青灰色砂質土(第3層、層厚0.1 m)、青灰色土(第4層、層厚0.12 m)、にぶい黄色粘質土(第5層、層厚0.18 m)、紫灰色粘質土(第6層、層厚0.15 m)、紫灰色砂礫混粘質土(第7層、層厚0.15 m)である。地山は黄橙色粘質土で、現地表面より1.8 mで検出した。地山面において東西方向の溝を検出した。溝は幅1.1 m以上、深さ0.2 m以上を測り、調査区西側を流れる水路に直交する。埋土は上層が暗青灰色粘質土で下層は暗青灰色粗砂～中砂となる。遺物は出土しなかった。

周辺の調査から第2層は現代、第3、4層は近世～近代、第5～7層は中世の耕作土層である。溝の年代は遺物の出土がなく中世以前としか言えない。現水路に直交するが、関係があるかどうかは不明である。(上野裕子)

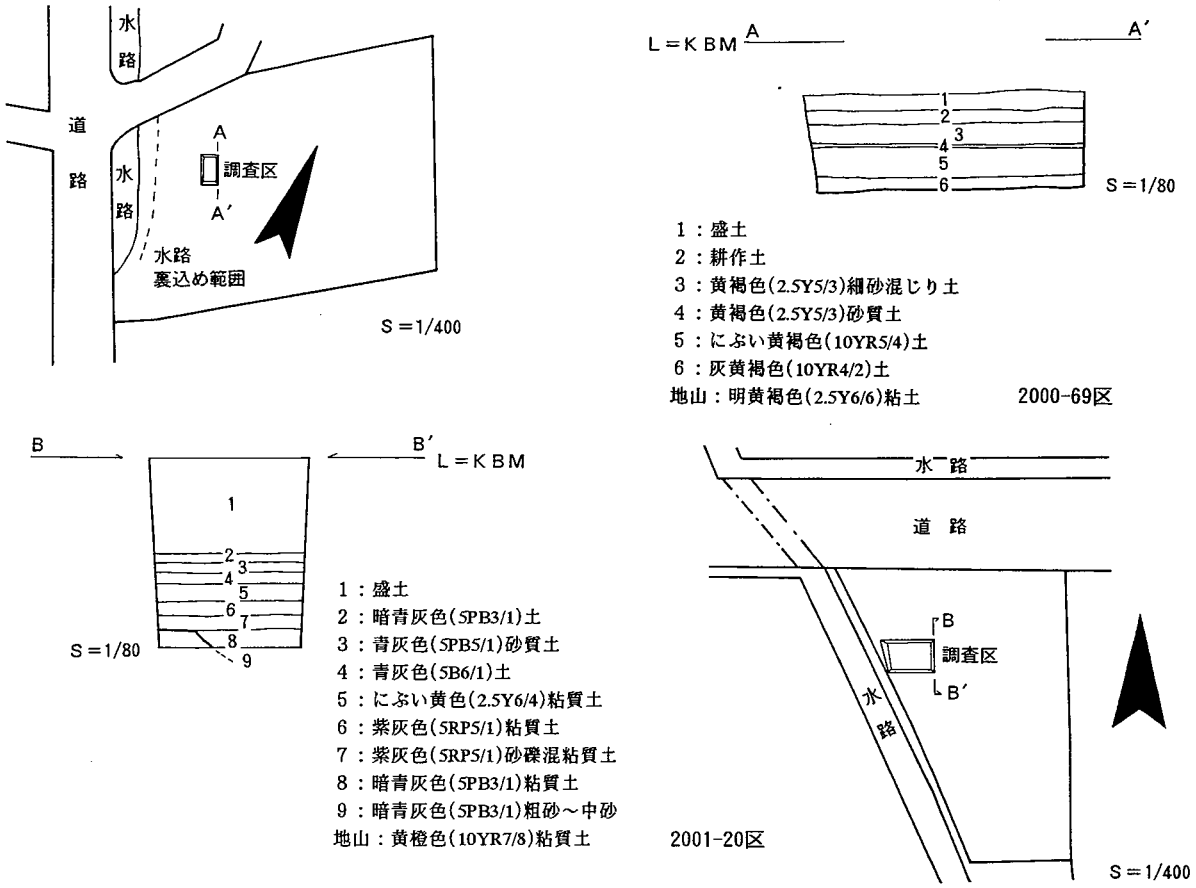


図24　2000－69区、2001－20区

XⅦ　木積観音寺跡

木積観音寺は神亀3年（726）に行基によって建立されたと伝わる寺院である。当時は七堂伽藍を備えていたが、豊臣秀吉と根来衆の合戦の際に炎上した。孝恩寺に残る観音堂は釘無堂と呼ばれ、昭和 28 年に国宝に指定されている。堂内の仏像群は平安時代のもので、重要文化財である。釘無堂の北西側に建てられた孝恩寺の仏像収蔵庫建設に伴う調査では中世の溝、井戸等を検出している。周辺は中世には耕作地に変わり、木積観音寺建立に関係する遺構は確認していないが、中世の石敷き溝や土坑等、寺院との関係を考えさせる遺構を確認している。

2001－5区の調査

調査地は貝塚市木積 2028－14 である。調査は 1.5 × 2.5 mの調査区を設定して行った。

調査地には盛土（第1層、層厚 0.3 ～ 0.5 m）の下に4層堆積している。上から黄灰色砂質土（第2層、層厚 0.1 m）、黄灰色土（第3層、層厚 0.1 ～ 0.15 m）、褐灰色砂礫混土（第4層、層厚 0.1 m）、暗赤灰色砂礫混粘質土（第5層、層厚 0.3 ～ 0.35 m）である。

第2～4層については第4層から土師器が出土しており、周辺調査成果から第2層は近世、第3・4層は中世の時期が与えられる。堆積状況から耕作土と考えられる。第5層については、第2～4層と比べて均質に堆積せず、耕作土とは考えにくい。層内から土師器、黒色土器等の古代の遺物が出土しているほか、土色・土質から周辺調査で確認される古代相当層に類似する。しかし瓦器が出土しているため、中世に周辺に堆積する古代の層を盛土したものと考えられる。調査区東側では道路部分で宅地造成時に調査を行っている。第4層までの堆積状況は同じだが、第5層は堆積していない。このため、第5層は遺構の埋土である可能性もある。地山はにぶい黄褐色粘質土で現状地盤より 0.9 ～ 1 mにて検出した。

調査区南壁では地山上面にて遺構ＳＸ－1を検出した。ＳＸ－1は幅約1m、深さ 0.2 mを測り、紫灰色粘質土を埋土とする。調査区の北・東壁では同様の遺構は確認できず、西壁は後世の撹乱で不明であるため、北東～南西方向の溝か土坑の可能性が考えられる。遺構内からは遺物の出土はなかった。　（上野裕子）

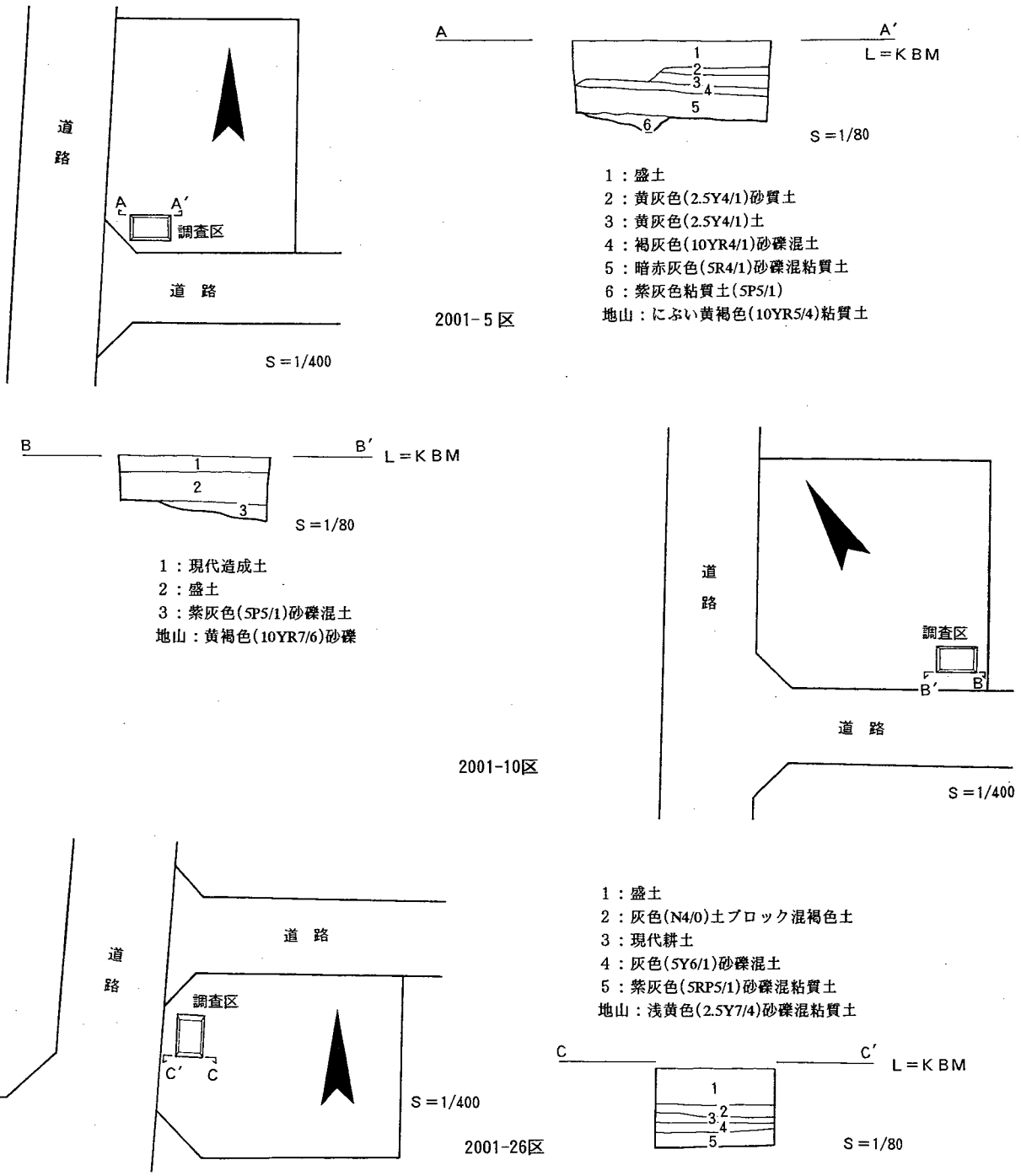


図25　2001－5区、2001－10区、2001－26区

2001－10区の調査

調査地は貝塚市木積1994－5である。調査は浄化槽設置部分に1.5×2mの調査区を設定して行った。

調査区には上から現代の造成土(第1層、層厚0.2m)、盛土(第2層、層厚0.4～0.45m)の下に紫灰色砂礫混土(第3層、層厚0.05～0.2m)が堆積している。

地山は現状地盤より0.65～0.8mにて検出し、東から西にかけて緩やかに低くなっている。第3層は地山の低くなった西側で最も厚く、東側には存在しない。遺物の出土はなく、周辺の調査例から中世の時期のものと考えられ、堆積の状況から耕作土ではなく整地土と考えられる。第3層の上は何らかの土層が堆積していた可能性は高いが、現代に削られて土地の改変が行われたものと考えられる。　(上野裕子)

2001－26区の調査

調査地は貝塚市木積657－3である。調査は開発地内西側の浄化槽設置部分に、1.4×2.5mの調査区を設定

し実施した。

調査区内には５層の土層が堆積していた。上から順に宅地造成時の盛土(第１層、層厚 0.45 m)、現代耕土ブロックの混在する褐色土(第２層、層厚 0.1 ～0.15 m)、現代耕土(第３層、層厚 0.1 ～0.15 m)、灰色砂礫混土(第４層、層厚 0.1 ～ 0.15 m)、紫灰色砂礫混粘質土(第５層、層厚 0.2 m)である。地山は浅黄色砂礫混粘質土で、現地表面より 0.95 ～１mで検出した。第４、５層からは瓦器、土師器が出土した。

第４、５層は周辺の調査例や出土遺物から中世の耕作土と考えられ、調査区は中世以後、耕作地となっていた。第２層は下層の現代耕土ブロックが混じっており、前建物を建設する際の整地層と考えられる。　(上野裕子)

2001 － 13 区の調査

調査地は貝塚市木積 804 －１、－２、805 －１、－２、806 －１、－２、－３の孝恩寺敷地内である。調査は孝恩寺

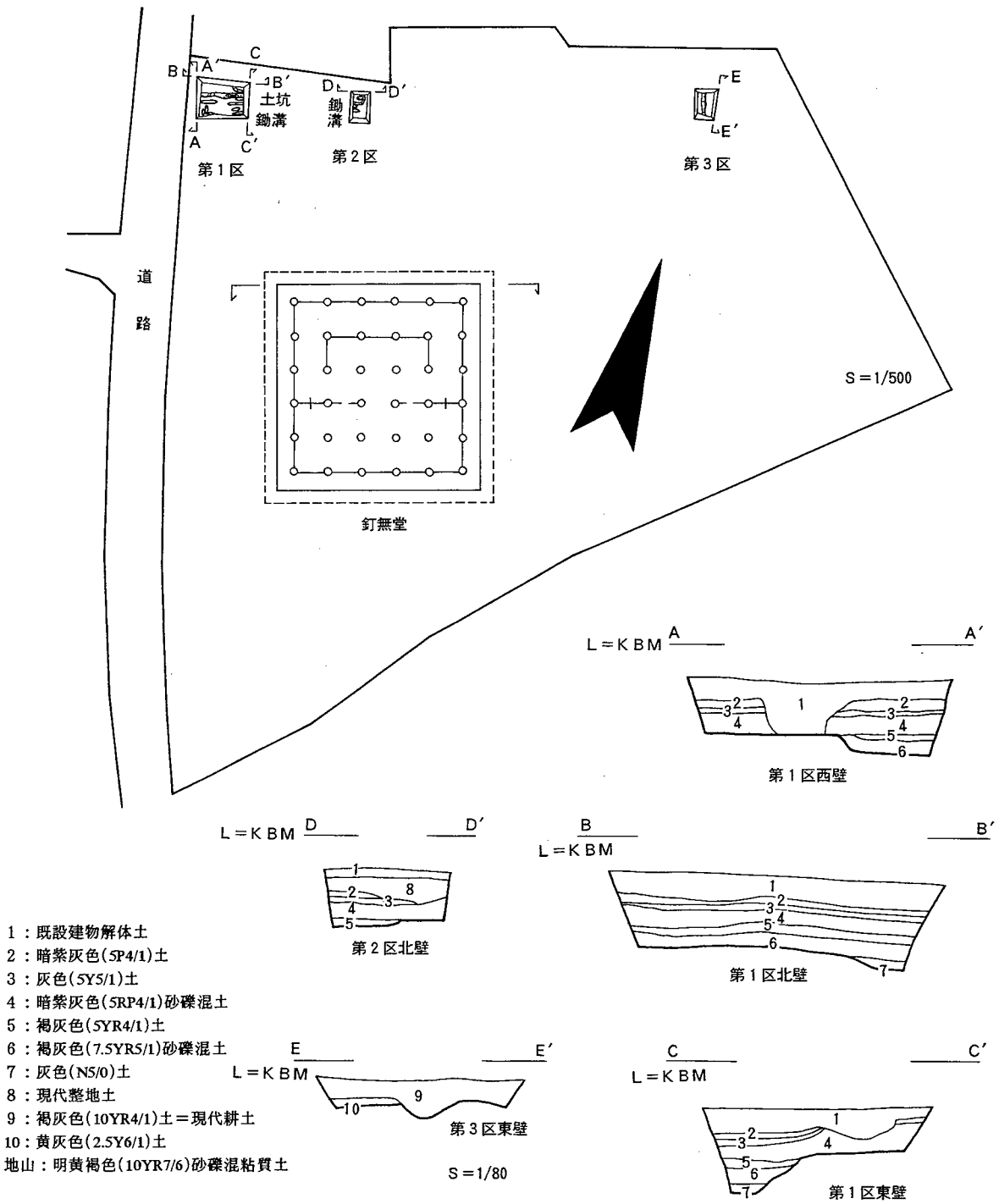


図26　2001 － 13 区

寺務所建設予定地の浄化槽及び基礎部分に4.2×3m、1.6×2.4mの調査区、庫裡建設予定地の部分に1.7×2.6mの調査区を設定し、第1区、第2区、第3区として調査を行った。

調査地は現状地盤、地山ともに東側の第3区から西側の第1区にむかって低くなっている。調査地の土層は西側の寺務所建設地と東側の庫裡建設地では堆積状況が異なる。

寺務所側の第1区、第2区では既設建物解体土及び現代整地土(第1、8層、層厚0.3～0.4m)の下に暗紫灰色土(第2層、層厚0.1～0.15m)、灰色土(第3層、層厚0.05～0.1m)、暗紫灰色砂礫混土(第4層、層厚0.15～0.3m)が堆積している。遺物は第2、3層から陶磁器、第4層から瓦器、土師器が出土し、第2、3層が近世、第4層が中世の時期が与えられる。第4層は下面の地山上面にて鋤溝を多数検出し、耕作土であると考えられる。地山は南側で現状地盤より0.5～0.7mにて明黄褐色粘質土を検出したが、北側の幅1.1～1.3mの範囲では更に深くなり、褐灰色土(第5層、層厚0.1m)、褐灰色砂礫混土(第6層、層厚0.1～0.2m)が堆積している。最初溝状の遺構として掘削したが、底部が平らで水が流れた痕跡がないこと、埋土は溝を埋めたような土ではなく、上層第4層と同様の土であることから、階段状に設定された耕作地の落ち込みであることが判明した。落ち込みは第2区にて北側に屈曲し、東側には及ばない。第6層下面の地山上面にて0.7×0.5m以上、深さ0.1mを測り、灰色土を埋土とする土坑を検出した。

庫裡側の第3区には褐灰色土の現代耕土(第9層、層厚0.25～0.3m)の下に黄灰色土(第10層、層厚0.1m)が堆積している。地山は第3区では現状地盤より0.35～0.4mで明黄褐色砂礫混粘質土を検出した。第3区では遺構は検出できなかった。第3区より東側の現収蔵庫建設時の調査では中世からの遺構を多数検出していることから、削平を受けている可能性が高い。

調査地は国宝 釘無堂に隣接する。釘無堂は神亀3(726)年、行基によって建立されたといわれる木積観音寺の伽藍を構成する堂宇の一つである。

調査の結果、創建当時の釘無堂及び木積観音寺に関係する遺構は検出できず、中世の耕作跡を検出するのみであった。調査地東側の現収蔵庫建設時の調査では中世の溝、井戸等を検出し、これらは農業用であると考えられる。周辺の調査結果を合わせても、調査地周辺は少なくとも中世の段階では耕作地であったと考えられ、寺地であった可能性は低いと考えられる。現在の釘無堂は現状地盤より高さ0.2～0.4mの基壇を持ち、その上に礎石を置いている。基壇が地山上面まで及ぶとは考えられず、今後釘無堂の建て替え、移築等の可能性も考慮して周辺調査を重点的に行う必要があるものと考えられる。 (上野裕子)

XⅧ 半田北遺跡

半田北遺跡は津田川及びその支流である小淵川左岸洪積段丘上に位置する。南には白鳳期寺院、秦廃寺跡や麻生中下代遺跡、半田遺跡、麻生中遺跡、新井ノ池遺跡が近接する。これらの遺跡からは6世紀後半～8世紀前半の集落を検出している。集落は秦廃寺に関連した人々が営んだものと考えられ、これらの遺跡群は本来大きく一つになるものと考えられる。

2001－46区の調査

1．調査概要

調査地は貝塚市半田757で半田町会館建設に伴うものである。調査は建物基礎掘削部分に調査区を設定して行った。調査区は建物南西側を第1区とし、南東側を第2区、北東側を第3区、中央部分を第4区、北西側を第5区とした。

調査区の基本層序は5層である。上から盛土(第1層、層厚0.3～0.5m)、現代耕土(第2層、層厚0.1～0.15m)、黄灰色土(第3層、層厚0.05～0.1m)、灰色土(第4層、層厚0.1～0.15m)、暗灰黄色砂礫混粘質土(第5層、層厚0.05～0.1m)、紫灰色粘質土(第6層、層厚0.05～0.15m)である。第6層は調査区北半部のみ堆積し、第4層は調査区北西の第5区には堆積していない。ほかの層は調査区全域に堆積し、第5層、第6層から土師器、須恵器が出土している。周辺の調査状況や出土遺物等から第3層は中世、第5、6層は古代の層と考えられる。

2．検出遺構(図27)

地山上面にて、土坑、柱穴、杭、溝等を検出した。

ＳＫ－１、２

本遺構は調査区東側の第２～３区にかけて検出した土坑である。検出時の幅２～ 2.5 m、長さ２mを測る。検出時、溝になるものと考えてＳＤ－１としたが、掘削途中に２基の土坑が重なっていることが判明したため、南側の土坑をＳＫ－１、北側の土坑をＳＫ－２とした。ＳＫ－１は幅約 1.1 m、長さ 2.45 m、深さ 0.85 ～0.9 mの

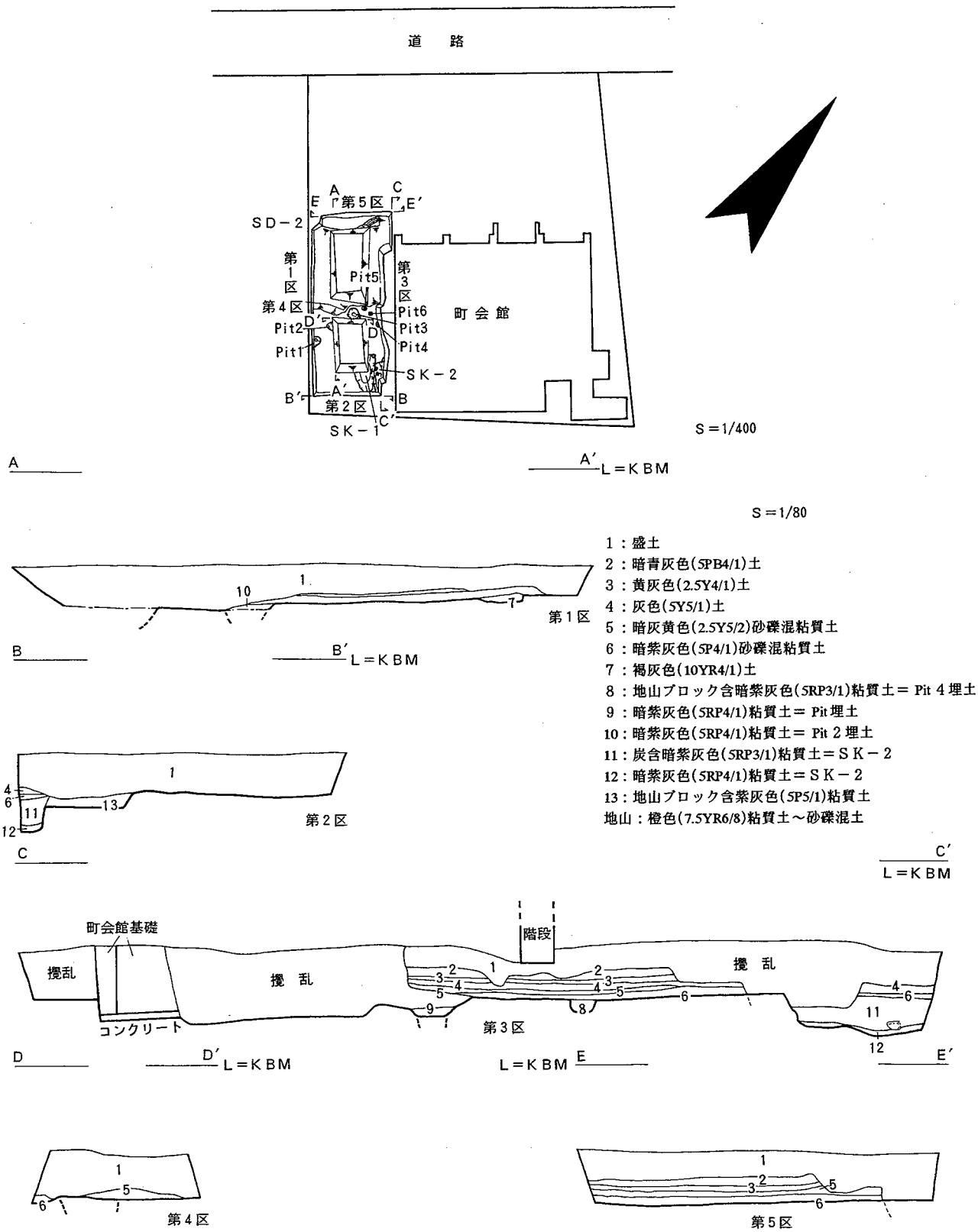


図27　2001 － 46 区

長楕円形を呈する。ＳＫ－２は南側がＳＫ－１に切られており、北側と東側が調査区外となるため全体規模は不明である。検出幅 0.9 m、検出長 1.95 m、深さ 0.55 ～ 0.6 mを測る。埋土はＳＫ－１は上層に炭灰を含むにぶい黄灰色土が堆積し、その下に地山ブロックを含むにぶい黄灰色土、最下層に黒褐色土が堆積する。遺物は奈良時代の須恵器、土師器の他、サヌカイト、平瓦、単弁蓮華文の軒丸瓦が出土し、特ににぶい黄灰色土層から多く出土した。単弁蓮華文の軒丸瓦については同じ軒丸瓦が周辺調査や府営住宅の建設に伴う調査でも出土しており、秦寺に葺かれていたものと考えられる。ＳＫ－２は上層に炭灰を含むにぶい黄灰色土が堆積し、下層に暗褐色粘質土が堆積している。遺物は奈良時代の須恵器、土師器、瓦が出土している。出土遺物、埋土の状態からＳＫ－１とほぼ同時期に掘削されたと考えられる。ＳＫ－１、ＳＫ－２の上層には両者を覆うように暗灰黄色土が堆積している。

土坑の性格については周辺調査においても類例がなく、不明と言わざるを得ない。土層の状況から長期間にわたり開口していたとは考えられない。ＳＫ－１、ＳＫ－２の上層と下層の遺物はそれぞれ接合できるものが多く、ほぼ同時期に一気に埋められている。今後他の調査例を調べて考える必要がある。

掘立柱建物

本遺構は第１区から第４区にかけて検出した建物である。一列に並ぶ４基の柱穴を確認した。

柱穴は一辺 0.7 ～ 0.8 mの隅丸方形を呈したもの（Pit １～３）と、一辺 0.2 mの隅丸正方形のもの（Pit ４）を検出した。柱穴はほぼ南北方向に並び柱間は 1.5 mである。北側は既設建物の撹乱によって不明だが、北東側の壁面において Pit と思われる落ち込みを確認しており、南北４間（６m）以上と考えられる。東西方向の柱穴は不明だが、東側の地山上面では検出していないため、西側の撹乱部分に柱穴があったものと考えられる。したがって、南北４間以上、東西２間以上の南北に長い建物になる可能性が高い。

Pit １～３の掘方埋土は地山ブロック含暗紫灰色粘質土、Pit ４の掘方埋土は暗紫灰色粘質土である。

Pit １と Pit ３にはほぼ中央に径 0.2 mを測る円形の柱当りが位置する。深さは約 0.6 mである。柱当りの埋土は上層が灰色シルトで、下層になると青灰色の粘質シルトとなる。水分を良く含み、下層から木片が出土した。木片は加工していない自然木である。掘形底部の柱当り周囲には約 0.1 m大の石を２個置いている。柱の根石かと思われたが、柱を固定するための補強材として置いたと考えられる。柱当り出土の木片についても柱を固定するための補強に用いられたものだろう。そのほかに Pit ３の掘形から土師器、柱当り上層から土師器が出土した。

Ｐｉｔ５、６

本遺構は第４区において検出した杭跡である。西側の杭を Pit ５とし、東側の杭を Pit ６とした。いずれも円形を呈しており、Pit ５は径 0.2 ～ 0.22 m、Pit ６は径 0.19 ～ 0.22 mを測る。埋土は暗紫灰色粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＤ－２

本遺構は第５区において検出した溝である。幅 0.25 ～ 0.27 m、検出長１mを測る。埋土は紫灰色粘質土である。遺物は出土していない。

３．出土遺物（図28）

出土遺物は包含層とＳＫ－１、２、柱穴から出土しているが図化できるものは少ない。大半は奈良時代のものである。ここでは主に土坑から出土した遺物について詳述する。なお、器形の分類、時期等については奈良文化財研究所の分類に従った。

１～６、21 はＳＫ－１、２の上層から出土した遺物である。１は土師器皿ＡＩである。復元口径 22.4 cmを測る。内面にはミガキを施す。胎土は密で丁寧な作りである。２、３は須恵器杯Ｂ蓋である。２は口径 14.4 cm、３は口径 19 cmを測る。４は須恵器杯ＡⅢである。復元底径 13 cmを測る。焼成は悪く、表面は炭が付着し摩滅が激しい。５は須恵器鉢Ｆである。復元口径 18.8 cmを測る。６は土師器甕Ａである。復元口径 30.8 cmを測る。体部外面に縦位ハケ、口縁端部内面には横位ハケを施す。21 は平瓦である。残存長約 14 cmを測る。凸面にタタキ目、凹面に布目が残る。凹面にヘラで文字を刻んでいる。文字は二字確認でき、上は「部」下は「乃」と読めるが、詳細は不明である。

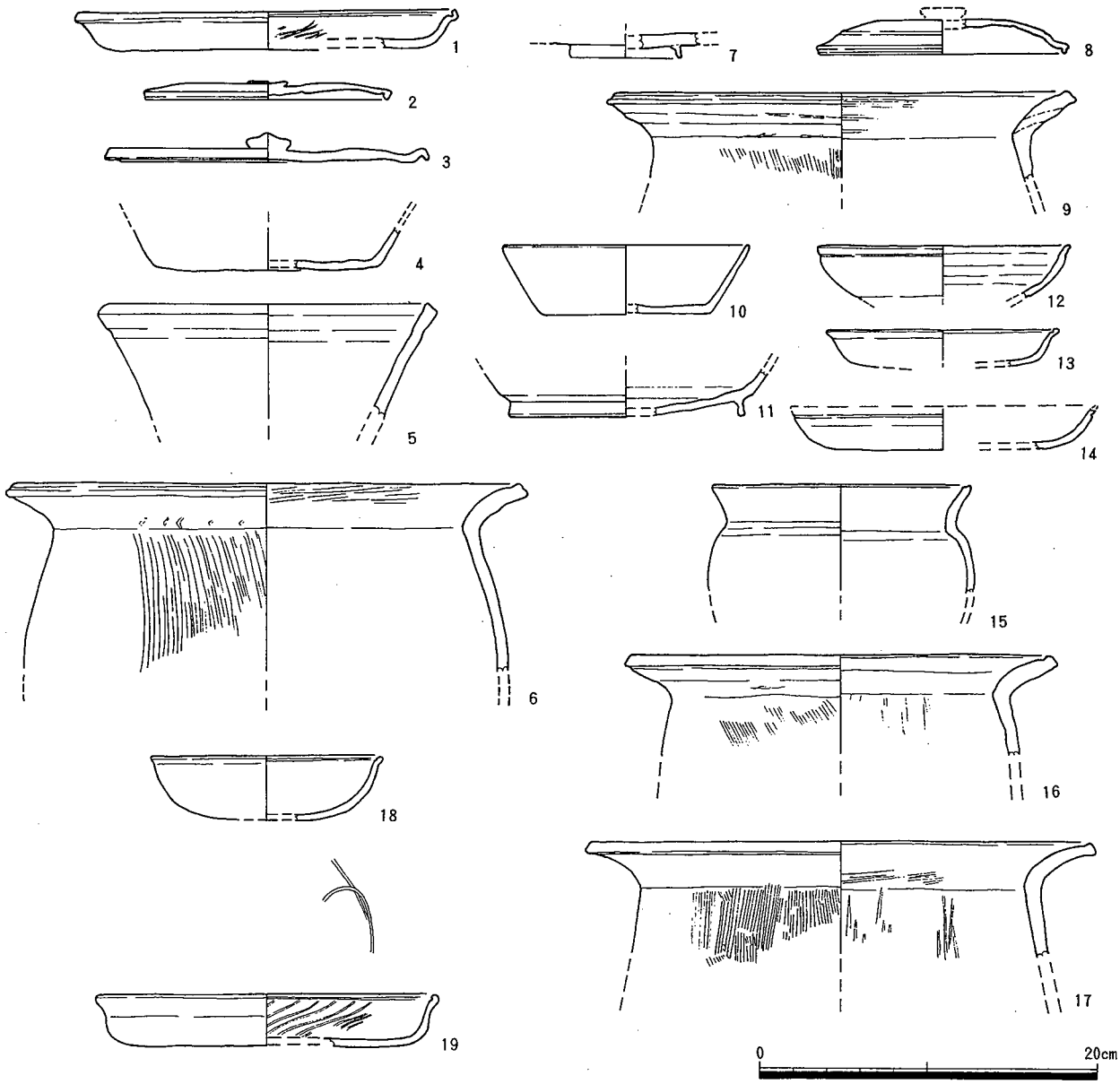


図28　2001－46区出土遺物

7、8はＳＫ－１上層から出土した遺物である。7は杯Ｂ高台部である。復元高台径 6.6 cmを測る。8は須恵器杯Ｂ蓋である。復元口径 14.6 cmを測る。

9～17はＳＫ－１下層から出土した遺物である。9は土師器甕Ａである。復元口径 27.8 cmを測る。体部外面に縦位ハケ、口縁端部内外面には横位ハケを施す。10、11は須恵器杯である。10は杯ＡⅢで、復元底径 12.4 cmを測る。焼成は悪く、表面は炭が付着し摩滅が激しい。11は杯Ｂの高台部である。復元高台径 13.4 cmを測る。12～14は土師器である。12は椀Ｃである。復元口径 14.8 cmを測る。13、14は皿Ａである。13は復元口径 13.6 cmを測り、14は口縁端部を欠いているが口径 18 cmほどに復元できる。いずれも内外面の調整については丁寧なナデを施す。ミガキの有無については不明である。15～17は土師器甕である。15は復元口径 15.2 cmを測る。胎土は密で固く焼き締まっている。16、17は甕Ａで16は復元口径 25.6 cm、17は復元口径 30.4 cmを測る。内外面に縦位ハケを施す。

18、19、20はＳＫ－２から出土した遺物である。18は土師器椀Ａである。復元口径 13.6 cmを測る。胎土は密で丁寧な作りである。19は土師器皿ＡＩである。復元口径 20.4 cmを測る。内面にはミガキを施す。20は単弁蓮華文軒丸瓦である。残存径 15 cmである。池田寺式に位置付けられるもので、秦廃寺推定地にあたる麻生河神社跡地や府営住宅建設に伴う調査で出土している。おそらく秦廃寺で葺かれていたものと考えられる。

4．まとめ

今回の調査では狭い範囲ながら奈良時代の掘立柱建物や土坑を検出する大きな成果を得た。これらは周辺調査においても検出している集落遺構と一連のものと考えられ、集落範囲を示す手がかりとなった。現在堂ノ池から南西側の府営住宅までの範囲で主要地方道大阪・和泉・泉南線の両側において集落を確認している。この範囲より外側は遺構の密度は少なくなる。削平の影響も考えられるが、概ね集落の範囲は現在確認している範囲で収まるものと考えられる。集落は秦廃寺と関係の深いものと考えられ、今回出土した単弁蓮華文軒丸瓦は秦廃寺との関係を証明するものである。

出土遺物は奈良時代のものが大半を占める。いずれの遺物も平城Ⅳ～Ⅴ期の範囲に収まるもので、平城京から平安京へ都が移る過渡期に位置するものである。平安時代前期の遺構は府営住宅建設に伴う調査で瓦溜まりを確認しており、伽藍の一部が崩壊を始めたと考えられる。平安時代には秦寺の勢力が弱まり、やがて集落も衰退し、以降の集落は確認できなくなる。今回検出した土坑は掘削後時期を置かず埋められている。土坑が何を目的として掘られたのかは不明であるが、掘削後時期を置かず埋める行為は秦寺が衰退する直前の状況を表しているのではないだろうか。（上野裕子）

XIX　地蔵堂丸山古墳

地蔵堂丸山古墳は近木川左岸の南東～北西にのびる台地上に位置する、全長約 72 mの前方後円墳である。西に前方部、東に後円部を配し、後円部径約 43 m、高さ約５m、前方部最大幅約 27 m、高さ約４mを測る。昭和 26 年、所有者によって後円部北東側の一部を採土した際、大きく破壊を受けている。大阪府教育委員会の緊急調査により、古墳としての原形を良く留めている、葺石が認められる、埴輪が採取された等の報告がなされている。また主体部は発見されなかった。古墳の形状や出土した埴輪から丸山古墳は古墳時代前期と考えられ、大阪府最南端に位置する前期古墳との位置付けがなされた。

昭和 31 年５月 15 日には国史跡に指定され、昭和 32 年 12 月 14 日に所有者から土地の寄付を受け、昭和 33 年２月 13 日に貝塚市が管理団体となった。

今回の発掘調査は古墳周囲の排水路改修および管理用フェンスを設置することを目的とした現状変更申請の許可を受け、2000 年度から行ったものである。

1．調査概要

2000 － 72 区（図 29）

本調査は 2001 年３月 22 日～ 23 日に実施した排水路改修に伴う調査である。排水路掘り方部分に、幅約 0.45 m、総延長約 24 mの調査区を設定して実施した。掘削深度は 0.3 ～ 0.6 mを測る。掘削深度は地山面に到達するものではないので、遺構等は確認できない。調査区における基本層序は 0.3 ～ 0.6 mを測る盛土である。この層の上部は腐植作用によって黒色化しており、図では一応２種としている。下層の部分は３種に分別できる。石垣裏込め層（第２、３層）と石垣本体である。これらからは、円筒埴輪片、瓦片、陶器片が出土した。

一部旧石垣基底部を除去した部分において地山を確認した。そこでは、盛土の下に２層（第４、５層）の遺物包含層を確認したが、上層（第４層）については下層（第５層）よりも土の粘りが弱く、盛土時に整地等の影響を受けた可能性がある。第５層は層厚約 0.1 mを測り、非常に小範囲での確認であるので、遺物の出土はないが、古墳周辺調査において確認している中世遺物包含層と同一のものである。一部掘削が第４層にかかる。遺物は第４層より土師器細片一点が出土した。

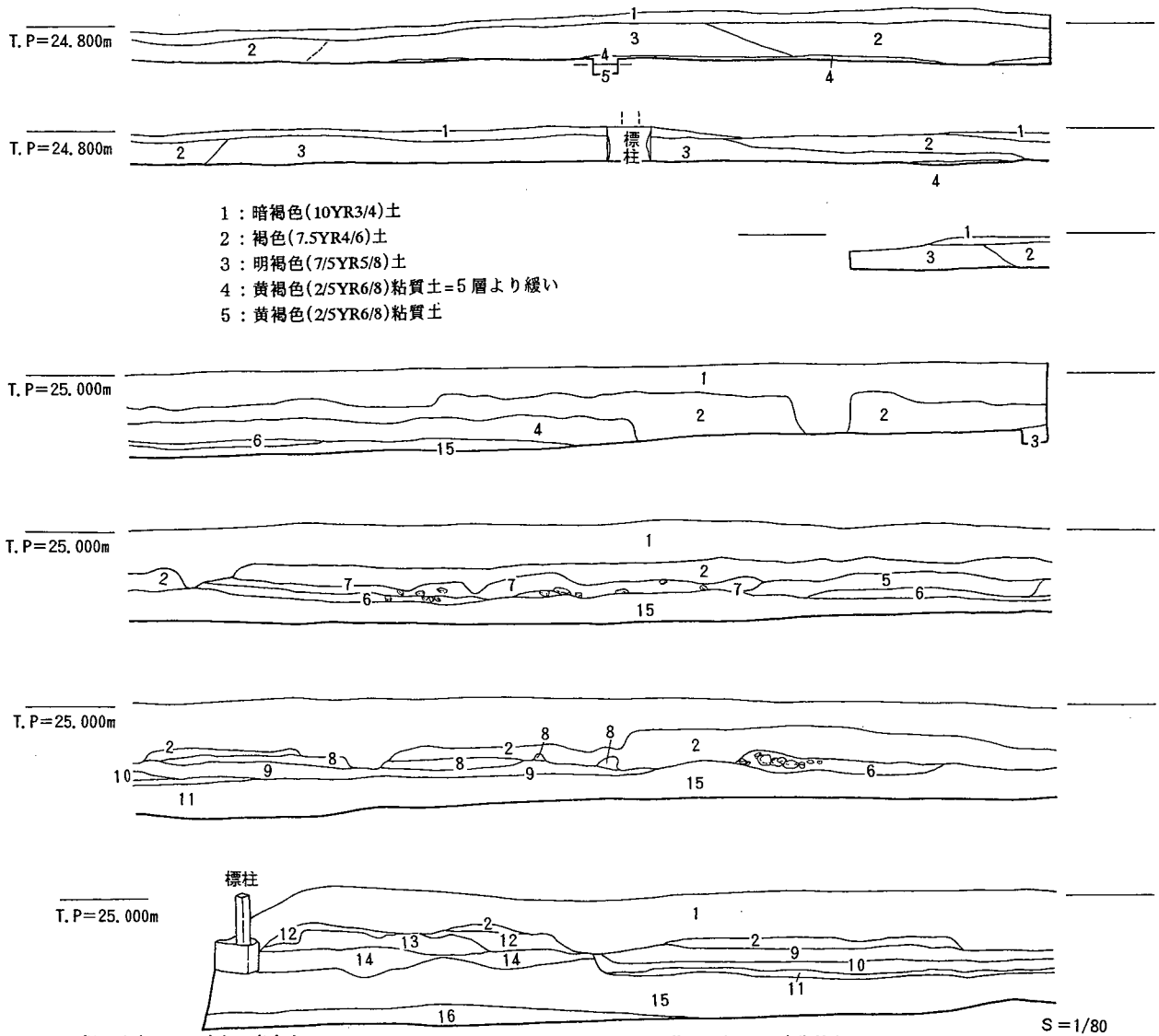
今回の調査では、一部中世遺物包含層を確認した以外は、古墳にかかわる遺構、層等は確認できず、掘削範囲内はすべて現代の造作であることが判明した。（前川浩一）

2001 － 27 区（図 28）

本調査は 2001 年８月９日～９月 26 日にかけて実施した排水路改修に伴う調査である。

調査は 2000 － 72 区の西側に連続して排水路掘方部分に幅約 0.7 m、総延長約 42 mの調査区を設定した。掘削深度は 0.7 ～ 1.6 mを測る。

調査区の基本層序は腐食土層（第１層、層厚 0.3 ～ 0.7 m）、石垣裏込相当層（第２層、層厚 0.2 ～ 0.4 m）の



1：暗褐色(10YR3/4)土
2：褐色(7.5YR4/6)土
3：明褐色(7/5YR5/8)土
4：黄褐色(2/5YR6/8)粘質土＝5層より緩い
5：黄褐色(2/5YR6/8)粘質土

1：褐灰色(10YR5/1)土＝腐食土
2：黄褐色(10YR5/6)砂礫混土＝石垣裏込相当層
3：灰色(N4/0)土ブロック混明黄褐色(10YR6/8)砂礫混粘質土
4：灰黄色(2.5Y6/2)粗砂～砂礫混粘質土
5：灰黄褐色(10YR5/2)土
6：褐灰色(7/5YR4/1)粘質土
7：灰黄色(2.5Y6/2)砂礫混土
8：灰色(5Y5/1)土
9：黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
10：灰黄褐色(10YR5/2)土
11：黄褐色(10YR5/8)砂礫混土
12：黄灰色(2.5Y5/1)ブロック混橙色(7.5YR6/8)土
13：明黄褐色(10YR6/6)粘質土
14：橙色(7.5YR6/8)粘質シルト＝地山
15：橙色(7.5YR6/8)砂礫混土＝地山
16：橙色(7.5YR6/8)砂礫混シルト＝地山

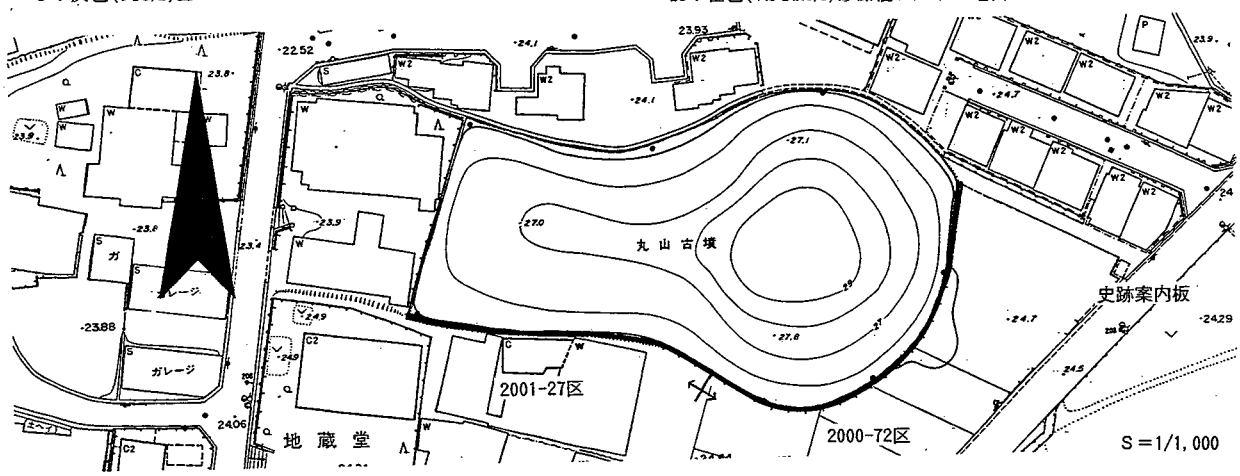


図29　2000－72区、2001－27区

下に６層の盛土が堆積している。盛土は層厚 0.1 ～ 0.5 mを測る。上から灰色土ブロック混明黄褐色砂礫混粘質土（第３層）、灰黄色粗砂～砂礫混粘質土（第４層）、灰黄褐色土（第５層）、褐灰色粘質土（第６層）、灰黄色砂礫混土（第７層）、灰色土（第８層）、黄灰色ブロック混橙色土（第 12 層）である。くびれ部より約 10 m西側の前方部では第２層下に黄灰色砂質土（第９層）、灰黄褐色土（第 10 層）、黄褐色砂礫混土（第 11 層）の３層が堆積している。これらは水平に堆積し、土質等から耕作土ではないかと考えられるものである。盛土及び耕作土からは本古墳に伴うと考えられる円筒埴輪片、形象埴輪片のほか、近世の陶磁器、瓦等が出土している。最下層に位置する第 11 層から 19 世紀の陶器片が出土しており、本古墳は近世以降に大規模な改変を受けていたと考えられる。

地山は明黄褐色砂礫で、盛土及び耕作土下にて検出した。古墳に伴う層は近世以降の改変により失われている可能性が高い。前方部南西隅部分において腐植土層を取り除いた後、地山直上にて明黄褐色粘質土（第 13 層、層厚 0.1 ～ 0.2 m）の堆積を確認した。出土遺物がなく年代の確定は困難であるが、堆積状況等からみて中世以後の整地等と考えられる。（上野裕子）

2001 － 38 区（図 29）

本調査は 2001 年 10 月３日～ 26 日にかけて実施した古墳南側の管理用フェンス設置に伴う調査である。

調査は古墳南半部の後円部に２ヶ所（第１、２区）前方部に３ヶ所（第３～５区）の計５ヶ所に調査区を設定して墳丘の確認を行った。各調査区の範囲は第１区は１×３m、第２区は１×３m、第３区は１×４m、第４区は 1.5 ×５m、第５区は１×３mを設定し、調査状況により必要に応じて拡張を行った。

第１区

後円部東側に１×３mの調査区を設定した。途中、東端にて石群を検出し、広がりを確認するため、北側半分をさらに東へ 1.4 m拡張した。

調査区は層厚 0.1 ～ 0.2 mを測る現表土下、0.6 ～１mまで近世～現代までの遺物を含む層が堆積している。これは墳丘土取り工事（昭和 27 年）の復旧土（昭和 32 年に補助金を得て実施）の可能性が高い。その下には明黄褐色粘質シルト（第７層）、明黄褐色粘質シルト（第９層）が堆積している。第９層は古墳墳丘土である。第７層は第９層を覆うように堆積しているが、若干の埴輪片が出土しているため、流れ込みの可能性がある。厚さは 0.3 ～ 0.6 m以上である。上面は削平を受け、埴輪列、葺石等の外部施設は確認できなかった。第７層上面の調査区東端において石列を検出した。石列は 0.1 ～ 0.15 mの河原石を斜面に並べている。当初古墳の葺石の可能性を考えたが、石の間に多量の円筒埴輪片、朝顔形埴輪片、瓦器椀片を含むこと等から、後世の石垣と考えられる。築造の時期は出土した瓦器椀からは中世以降となるが、これまでの調査から近世以降のものと考えられる。

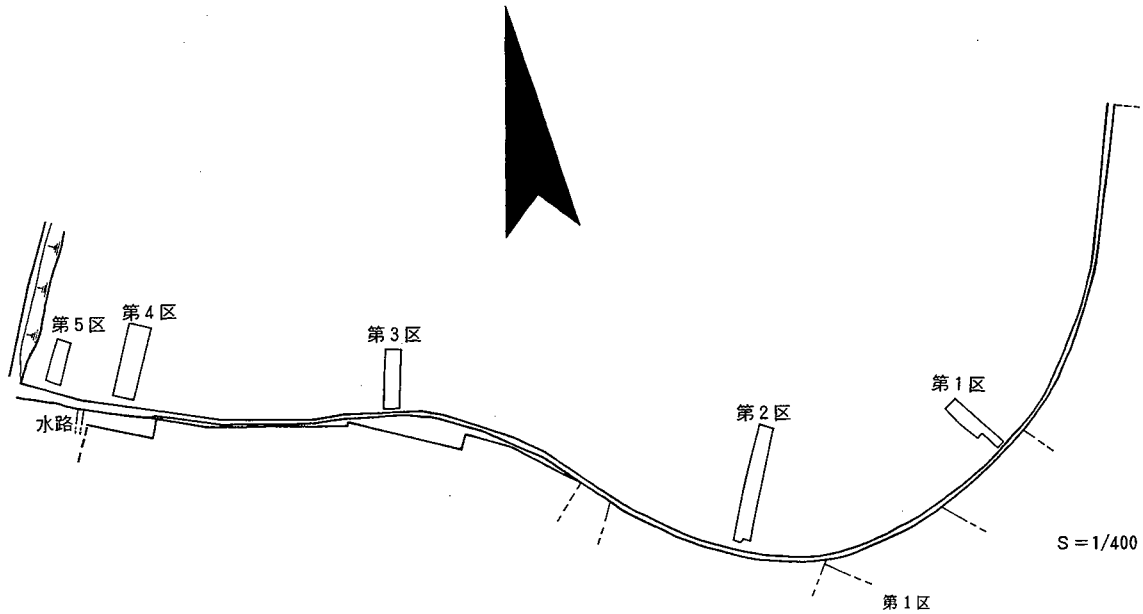
第２区

後円部南側に１×４mの調査区を設定した。途中、南端にて石群を検出し、広がりを確認するため、西側半分をさらに南へ 0.4 m拡張した。

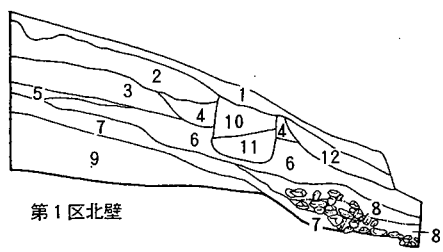
調査区は層厚 0.1 ～ 0.2 mを測る現表土下、0.15 ～１mまで近世～現代までの遺物を含む層が堆積している（第２～６、17 層）。調査区南端では後世に古墳と周囲の土地を区画した石垣を築き、このため本来の古墳墳丘面は後世に大きく削平を受けていることが判明した。石の間から多量の円筒埴輪片、朝顔形埴輪片が出土した。このため、古墳本来の墳丘面について確認することを目的として、北側に約４mの拡張を行った。

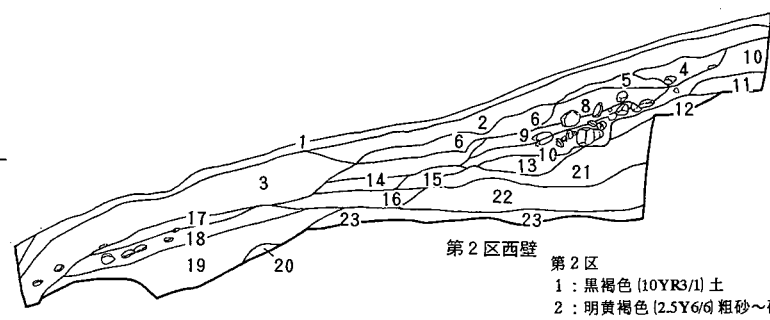
北側拡張区では近世～現代層下の腐植土（第 10 層）上面において石群を確認した。石群は南端の石垣と異なり、検出状況から斜面から崩落した古墳の葺石ではないかと考えられる。石の間及び周辺の堆積層から円筒埴輪片、朝顔形埴輪片が出土した。石群の下には粘質土層とシルト層が交互に堆積している（第 21 ～ 24 層）。土質は緻密で固く締まっているため、古墳墳丘の堆積土と考えられる。埴輪列等は確認できなかった。古墳墳丘面については葺き石が動いており、埴輪が原位置を保っていない等の理由により、後世に墳丘面が削平されて残っていないものと考えられる。

第 21 層上面は北端から墳丘裾に向かって緩やかに下降し、調査区北側より 2.4 mの地点から幅 0.8 mの範囲で平坦面を持つ。この平坦面は本来の墳丘面とは考えられないものの、古墳墳丘１段目テラス部分の名残ではない

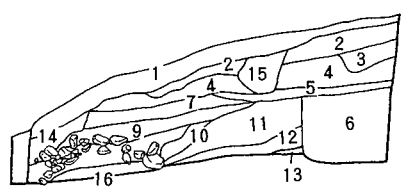


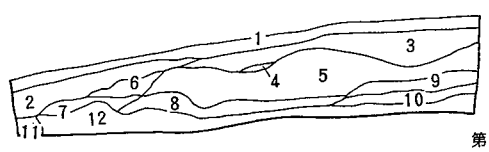
第1区
1：黒褐色（10YR3/1）土
2：明褐色（10YR6/6）砂礫混土
3：赤褐色（2.5YR4/6）粗砂～砂礫
4：にぶい褐色（7.5YR5/4）粗砂混土
5：黄褐色（10YR5/6）砂質土
6：明褐色（7.5YR5/6）砂礫粗砂～細砂
7：明黄褐色（2.5Y6/6）粘質シルト
8：明黄褐色（2.5Y6/6）砂礫混粘質シルト
9：明黄褐色（2.5Y7/6）粘質シルト
10：浅黄色（2.5Y7/4）粗砂～砂礫
11：黄灰色（2.5Y4/1）砂礫混土
12：黒褐色（10YR3/2）砂礫混土

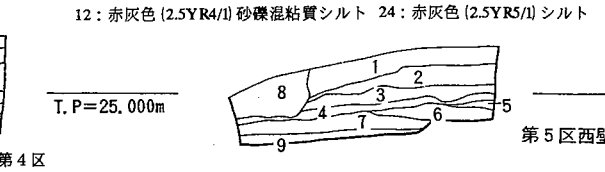




第2区
1：黒褐色（10YR3/1）土
2：明黄褐色（2.5Y6/6）粗砂～砂礫混土
3：灰黄褐色（10YR4/2）土
4：橙色（5YR6/8）砂礫混粘質土
5：明黄褐色（10YR6/6）砂礫混土
6：黄褐色（10YR5/6）粗砂混粘質土
7：灰色（5Y4/1）土（腐植土）
8：にぶい赤褐色（5YR5/4）粗砂混粘質土
9：褐色（7.5YR5/6）シルト
10：褐灰色（5YR4/1）土
11：明赤褐色（5YR5/6）土
12：赤灰色（2.5YR4/1）砂礫混粘質シルト
13：明褐色（7.5YR5/8）粘質土
14：黄橙色（7.5YR7/8）粗砂～砂礫混粘質土
15：明褐色（7.5YR5/6）粘質シルト
16：明黄褐色（10YR6/6）粘質シルト
17：明黄褐色（10YR6/8）砂礫混粘質土
18：明褐色（7.5YR5/6）粘質シルト
19：赤褐色（5YR3/1）砂礫混土
20：明褐色（7.5YR5/8）粘質シルト
21：橙色（7.5YR6/8）粘質土
22：褐灰色（5YR5/1）シルト
23：明黄褐色（10YR6/6）シルト
24：赤灰色（2.5YR5/1）シルト







第3区
1：黒色（10YR2/1）土
2：褐灰色（10YR4/1）土
3：にぶい褐色（7.5YR5/4）砂礫混土
4：にぶい黄褐色（10YR5/4）砂礫混粘質土
5：褐色（7.5YR4/3）砂礫混土
6：灰褐色（7.5YR4/2）土
7：灰褐色（10YR5/2）砂礫混粘質シルト
8：灰褐色（7.5YR5/2）粗砂～砂礫混土
9：明褐色（7.5YR5/6）砂礫混粘質土
10：褐色（7.5YR4/6）砂礫混粘質土
11：赤褐色（5YR4/8）砂礫土
12：明褐色（7.5YR5/6）砂礫混シルト
13：橙色（7.5YR6/8）粘質シルト
14：橙色（7.5YR6/8）粘質土
15：褐灰色（7.5YR4/1）土（旧水路掘方）
16：灰褐色（5YR4/2）土（攪乱）
17：橙色（5YR6/8）粘質土（地山）

第4区
1：黒色（7.5YR2/1）土
2：灰黄褐色（10YR5/2）砂礫混土（旧水路掘方）
3：赤褐色（5YR4/8）砂礫～粗砂混土
4：褐灰色（7.5YR4/1）土
5：灰黄色（2.5Y6/2）砂礫混粘質土
6：灰色（7.5Y6/1）砂礫混粘質土
7：明黄褐色（10YR6/8）粘質土
8：にぶい赤褐色（5YR5/3）粗砂～砂礫
9：赤褐色（2.5YR4/3）粘質土
10：明黄褐色（10YR6/6）粘質シルト
11：褐灰色（10YR5/1）土（耕作土）
12：橙色（7.5YR6/8）砂礫混粘質土（地山）

第5区
1：暗灰黄色（2.5Y5/2）土
2：黒色（7.5YR2/1）砂礫混土
3：明黄褐色（10YR6/6）砂礫混粘質土
4：褐灰色（10YR5/1）土
5：灰色（10Y6/1）極細砂
6：灰黄色（2/5Y6/2）粗砂混土
7：明褐色（7.5YR5/6）粘質土
8：褐灰色（5YR4/1）砂礫混土（旧水路掘方）
9：橙色（7.5YR6/8）砂礫混粘質土（地山）

図30　2001－38区

かと考えられる。したがって、丸山古墳は少なくとも２段の段築を持っている可能性が高い。

第３区

前方部のくびれ部に接近した場所で１×４ｍの調査区を設定した。

調査区は層厚 0.1 ～ 0.2 ｍを測る現表土下、0.5 ～ 1.45 ｍまで近世～現代までの遺物を含む層が堆積し、地山面まで達している。地山は橙色粘質土である。

古墳にともなうものとしては、わずかに調査区北東隅で墳丘と考えられる橙色粘質土（第 13 層）を確認した。上面には埴輪列、葺石等の外部施設は残っていない。第 13 層の上には橙色粘質シルト（第 12 層）が堆積しており、古墳築造後に流れ込んだ土と考えられる。

その後、墳丘を大きく崩し、調査区南端にて 0.05 ～ 0.15 ｍ大の河原石を使用して石垣が築かれている。石垣は古墳と周囲の土地を区画するものと考えられ、近世以降、少なくとも３～４回は築きなおしている。石垣の石の間からは円筒埴輪片、朝顔形埴輪片が多量に出土した。また、調査区東南部は現代に大きく攪乱を受けており、石垣も残っていない状況であった。

第４区

前方部西端寄りに 1.5 ×５ｍの調査区を設定して行った。

調査区は層厚 0.1 ～ 0.2 ｍを測る現表土下、0.3 ～ 0.6 ｍまで近代～現代までの遺物を含む層が堆積し、地山面まで達している。地山は橙色砂礫混粘質土である。

調査区南端では、幅約 0.5 ｍ、高さ約 0.1 ｍに地山を残して畦を作り、さらに南側で耕作を行っている。この耕作土については、古墳南側の水路改修時の調査においても確認している（水路改修に伴う現状変更調査報告第９、10 層）。

古墳にともなうものとしては、調査区北端で赤褐色粘質土、明黄褐色粘質シルト（第９、10 層）を確認した。土質は緻密で堆積の状況より古墳の墳丘と考えられる。上面は埴輪列、葺石等の外部施設は残っていなかった。

第５区

前方部西端に１×３ｍの調査区を設定した。

調査区は層厚 0.15 ～ 0.25 ｍを測る現表土下、0.3 ～ 0.7 ｍまで近代～現代までの遺物を含む層が堆積し、地山面まで達している。地山は橙色砂礫混粘質土である。古墳に伴う遺構、遺物は確認できなかった。

２．出土遺物

調査では多量の遺物が出土した。後世の盛土及び石垣裏込め等から出土した近世～近代の陶磁器、瓦類をのぞくとそのほとんどが埴輪片である。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪を確認している。原位置を保ったものは無く、全て後世盛土内からの出土であるが、2001 － 38 区第２区出土の遺物に関しては、その出土状況から丸山古墳造営の時期を考える上で重要と考えられる。以下主なものについて述べる。

１～４は 2001 － 38 区第１区から出土した埴輪である。１は第７層から出土した円筒埴輪で復元口径 22 ㎝、残存高６㎝である。調整は摩滅により不明である。２～４は後世の石垣内から出土した。２は残存高 5.2 ㎝である。体部径は復元できなかった。円筒埴輪と考えられるが、下部がやや開き気味になる。調整は剥離、摩滅により不明である。３は円筒埴輪である。体部径は復元できなかった。上部はスカシで、形状から円形と考えられる。調整は外面にタテハケかと思われる痕跡が認められるが、摩滅により不明である。４は円筒埴輪口縁部である。口径は復元できなかった。調整は器表面の残る部分にタテハケが認められるが、大部分は剥離により不明である。

５～９は 2001 － 38 区第２区から出土した埴輪、土器である。５、６は石群の下から出土した朝顔形埴輪である。５はタガ部の復元径 30.5 ㎝、最大復元径 42 ㎝、残存高 10.4 ㎝である。６はタガ部の復元径 24.6 ㎝、最大復元径 27.4 ㎝、残存高８㎝である。５、６ともに外面全面にベンガラを塗っており、器壁に塗布の際のハケ痕跡が残る。調整は不明である。７は円筒埴輪である。タガ部復元径 39.2 ㎝、残存高 4.4 ㎝である。調整は摩滅により不明である。８は第２層から出土した瓦質羽釜である。復元口径 18.8 ㎝、残存高 4.6 ㎝である。９は第８層の転落した葺石かと考えられる石の中から出土した須恵器高杯脚台部である。復元底径 9.4 ㎝、残存高 2.2 ㎝である。陶邑編年Ｉ－２期に属し、出現期に近い須恵器である。

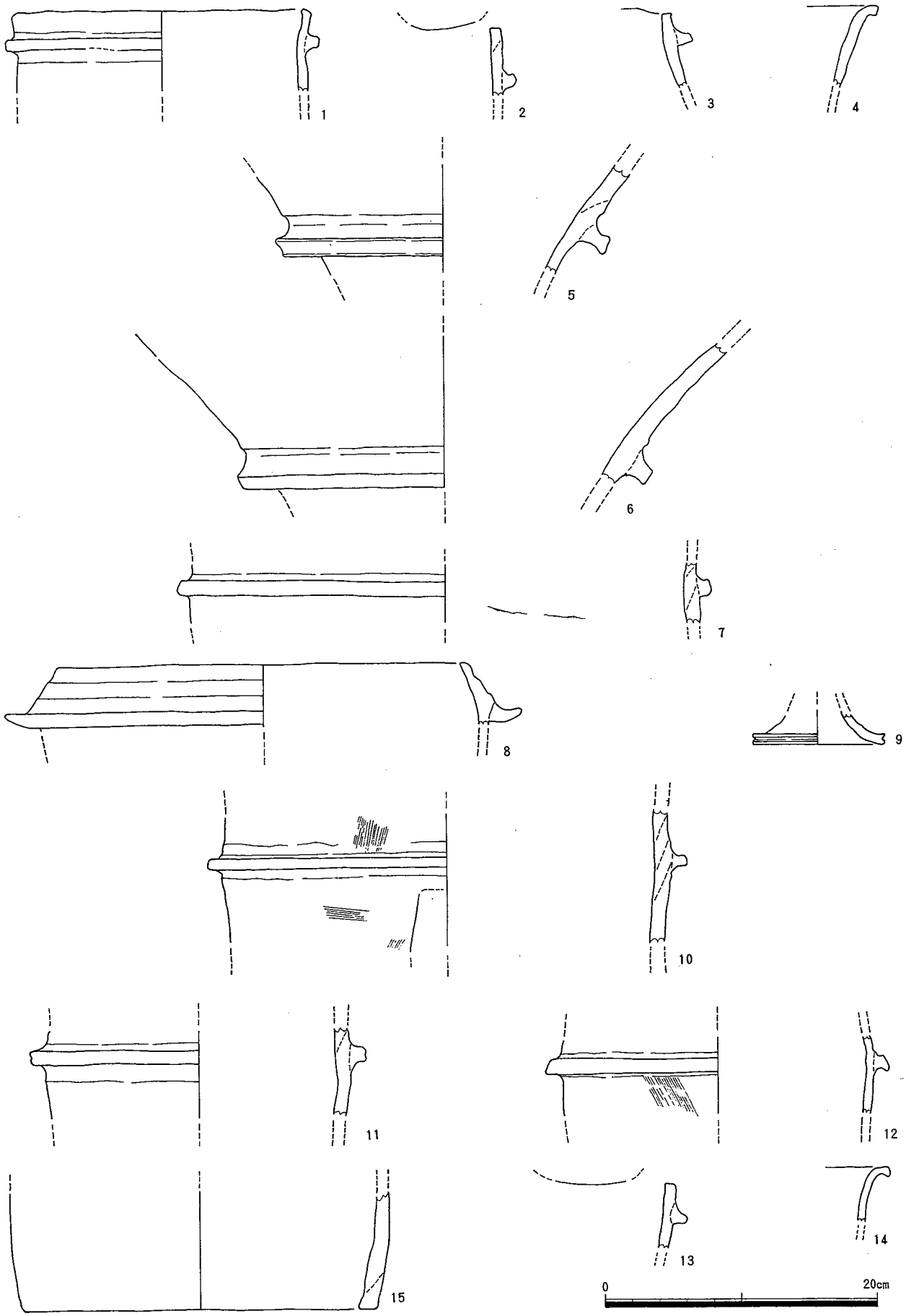


図31　2001－38区出土遺物

10～15は2001－38区第3区から出土した円筒埴輪である。10はタガ部復元径35.2㎝、残存高10.4㎝である。外面はタテハケ後、二次調整にヨコハケを施している。ヨコハケはわずかに残っているのみで、A種、B種の区別はできない。スカシが残っており、形状から方形と考えられる。11はタガ部復元径24.6㎝、残存高6.4㎝である。調整は摩滅により不明である。12はタガ部復元径25.2㎝、残存高5.6㎝である。外面にナナメハケがわずかに残るが、大部分は摩滅により不明である。13は円筒埴輪口縁部である。口径は復元できなかった。薄手で外面にタテハケを施す。14は円筒埴輪である。径は復元できず、調整も摩滅により不明である。上面にスカシがあり、形状から円形と考えられる。15は円筒埴輪底部である。復元底径26㎝、残存高8.5㎝である。摩滅により調整は不明である。16～18は2001－27区から出土した形象埴輪である。いずれもくびれ部の周辺から出土した。16は最大残存長18㎝で、何を表したものか不明である。17は家形埴輪である。どの部位にあたるかは不明で、最大残存長15㎝である。18は盾か靫を表したと考えられる。最大残存幅10㎝である。

3．まとめ

今回の調査は狭い範囲でのトレンチ調査であったが、丸山古墳の実態について多くのことが判明した。

墳丘裾は後世の石垣の構築により、改修を受けている。改修は断面の状況から数度にわたり、最下層に近代の陶器片を含むことから、近世～近・現代まで及んでいたと思われる。

第2区拡張区で検出した石群については、墳丘裾の石垣の石と比較して大きく、石の種類も異なる。
出土状況から人為的に石を置いたものとは考えにくく、石群の中や下層からは古墳時代より新しい時期の遺物を含まない。このため、古墳に葺いていた葺石が崩落したものと考えられる。崩落した時期については、石群直上層から瓦質羽釜が出土しているため、中世、おそらく秀吉の本陣が置かれた頃の可能性が高い。

第1～3区では墳丘に伴うと考えられる堆積土を確認した。いずれも粘質土で緻密な土を盛っている。第2区ではシルトと粘質土を交互に盛っていることが確認された。第4～5区では墳丘に伴う堆積土は認められなかった。第4～5区は最下層まで近・現代の盛土が及び、本来の墳丘が削平されているのか、元来墳丘が無かったのかは不明である。前方部については戦時中の防空壕を築いていたという話もあり、削平、改変している可能性が高い。全体的に後世の盛土が約0.6～1m堆積しており、埴輪は原位置を留めておらず、埴輪列が認められないことから、墳丘面は削平を受け、旧状を留めていないものと考えられる。

出土遺物は埴輪の他、近世以降の陶磁器・瓦が大部分を占める。

埴輪は原位置を留めておらず、古墳に伴うものと断定できるものはない。出土した埴輪は破片が多く、径の復元できるものは少ない。復元径が20㎝前後のものが多く、復元径30㎝前後のものも少量混じる。また、胎土、形態等から4種類が認められる。1．薄手で橙色を呈し、砂粒を多く含んで器壁が脆いもの、2．薄手で灰白色を呈し、砂粒を多く含んで器壁が脆いもの、3．薄手で灰白色を呈し、砂粒が少なく緻密なもの、4．厚手で黄褐色を呈し、砂粒をほとんど含まず緻密なもの、の4種類である。このうち1、2については近・現代の石垣から出土し、調整、タガの形態等から前期の埴輪である。3は第2区中央部の上層から出土しているものが多い。調整、タガの形態がわかりにくいものが多いが、薄手であることから前期の埴輪と考えられる。4は第2区の葺石かと考えられる石群周辺から出土した朝顔形埴輪である。胎土は緻密で、調整も丁寧に行っており、器壁には朱が残っている。その胎土や形態から他の埴輪と全く異質なものである。出土状況からいえば古墳に伴う可能性が最も高い。厚手でタガの形態から中期の可能性がある。石群の中からは須恵器高坏脚部が出土しており、これらの遺物が古墳に伴うものとするならば、丸山古墳の築造年代を中期とするべきであろう。しかし後世の石垣からとはいえ、多量に出土した前期の埴輪をどう捉えるべきか、また、周辺の集落や他の和泉地域の古墳との関係等、課題が多く、今後明らかにしていかなければならないと考えている。　（上野裕子）

XX　ま　と　め

平成13年は19遺跡36地点の調査を行った。いずれも小規模なトレンチ調査であるが、一定の成果を得ている。貝塚寺内町遺跡では整地層や土間を確認し、町屋の状況を確認した。また、寺内南側を区画する濠の一部を検出した。濠は今年度調査区の西側でも検出されており、段丘崖に沿って続いていることが確認できた。窪田遺跡・窪田廃寺、麻生中下代遺跡では中世の柱穴を検出している。窪田遺跡・窪田廃寺では調査区北側でも掘立柱

建物を検出しており、中世集落域がさらに南に広がっていたことが確認された。中世の建物跡は沢城跡、濕池遺跡でも検出しており、今回の調査は沢地区の中世集落域を考える上で重要なものとなった。また、木積観音寺跡では、中世の耕作に伴う層や鍬溝を検出し、中世以降に農地が広がっていたことが確認された。特に木積観音寺の堂宇と伝えられる孝恩寺釘無堂に近接した地域でも、寺域に関連した遺構は検出できず、創建当時の観音堂について考え直していく必要が出てきた。

平成 13 年の調査において、特筆すべきものは地蔵堂丸山古墳の調査と半田北遺跡の調査である。地蔵堂丸山古墳の調査では今まで解明されなかった古墳の実態が判明し、古墳の築造年代について考え直す必要が出てきた。丸山古墳が前期の古墳ならば、同じ前期に築かれた岸和田市摩湯山古墳との関係も考えなくてはならないであろう。また、周辺の古墳時代の集落の動態については、前期の集落に活発な動きが無く、石才南遺跡、加治・神前・畠中遺跡等中期以降に大規模な集落が営まれることを考えれば、丸山古墳の築造年代を中期と位置づける方が良いのかとも思える。いずれにしても、今後も周辺地域を含めた調査が必要であろう。また、半田北遺跡は奈良時代の掘立柱建物や土坑を検出した。これらは秦廃寺に大きく関係した人々の集落であることは周辺の調査からもわかる。今後も引き続き調査を進め、これらの集落の動態について考えていく必要がある。

最後に本報告書を作成するにあたり、西出安芸子、山本寿子、永橋和子諸氏の参加、協力を得た。記して感謝いたします。また、地蔵堂丸山古墳の調査については大阪府教育委員会芝野圭之助、三宅正浩、堀江門也、藤沢真依、大野薫、森屋直樹、小浜成、大阪府文化財調査研究センター伊藤徹、赤木克視、岡戸哲紀諸氏にご助言、ご教示いただいた。記して感謝いたします。

（上野裕子）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かいづかし いせきぐん はっくつちょうさがいよう
書 名	貝塚市遺跡群発掘調査概要
副 書 名	
巻 次	24
シ リ ー ズ 名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 62 集
編 著 者 名	前川浩一、三浦基、上野裕子
編 集 機 関	貝塚市教育委員会
所 在 地	〒 597-8585 大阪府貝塚市畠中 1 － 17 － 1 Tel 0724(23)2151
発 行 年 月 日	西暦 2002 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	大阪府 貝塚市西町	27208	22	34 度 27 分	135 度 21 分	2001 0130	1.8	個人住宅
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	大阪府 貝塚市中	27208	22	34 度 27 分	135 度 21 分	2001 0302 ～03	12	個人住宅
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	大阪府 貝塚市近木	27208	22	34 度 27 分	135 度 21 分	2001 0323 ～28	2.5	個人住宅
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	大阪府 貝塚市北町	27208	22	34 度 27 分	135 度 21 分	2001 0702	3	個人住宅
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	大阪府 貝塚市西町	27208	22	34 度 27 分	135 度 21 分	2001 0925 ～27	14	個人住宅
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	大阪府 貝塚市中	27208	22	34 度 27 分	135 度 21 分	2001 1120 ～21	4.2	個人住宅
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	大阪府 貝塚市南町	27208	22	34 度 27 分	135 度 21 分	2001 1203	2.2	個人住宅
しゃくぜんじじょうあと 積善寺城跡	大阪府 貝塚市橋本	27208	35	度 分	度 分	2001 0122 ～23	11.1	個人住宅
うみづかいせき 海塚遺跡	大阪府 貝塚市海塚	27208	110	34 度 26 分	135 度 21 分	2001 0129	1.5	個人住宅
うみづかいせき 海塚遺跡	大阪府 貝塚市海塚	27208	110	34 度 26 分	135 度 21 分	2001 0410 ～11	7.5	個人住宅
ひがしいせき 東遺跡	大阪府 貝塚市堀	27208	97	34 度 26 分	135 度 21 分	2001 0131	7.2	個人住宅
ほりあきげいせき 堀秋毛遺跡	大阪府 貝塚市海塚	27208	94	34 度 26 分	135 度 21 分	2001 0417 ～	12	個人住宅
かじこうざきはたけなかいせき 加治・神前・畠中遺跡	大阪府 貝塚市加神	27208	23	34 度 30 分	135 度 20 分	182001 0403	3.2	個人住宅
かじこうざきはたけなかいせき 加治・神前・畠中遺跡	大阪府 貝塚市加神	27208	23	34 度 30 分	135 度 20 分	2001 0620 ～21	15.5	個人住宅
かじこうざきはたけなかいせき 加治・神前・畠中遺跡	大阪府 貝塚市畠中	27208	23	34 度 30 分	135 度 20 分	2001 1213 ～14	10	個人住宅
せちごいせき 清児遺跡	大阪府 貝塚市麻生中	27208	36	34 度 25 分	135 度 21 分	2001 0314 ～15	14	個人住宅
なごせいせき 名越遺跡	大阪府 貝塚市清児	27208	71	34 度 25 分	135 度 23 分	2001 0315	3.25	個人住宅
くぼたいせき・くぼたはいじ 窪田遺跡・窪田廃寺	大阪府 貝塚市沢	27208	51	34 度 25 分	135 度 23 分	2001 0820	22.5	個人住宅
くぼたいせき・くぼたはいじ 窪田遺跡・窪田廃寺	大阪府 貝塚市沢	27208	51	34 度 25 分	135 度 23 分	2000 1009	2.8	個人住宅
さわしんでいせき 沢新出遺跡	大阪府 貝塚市沢	27208	1	34 度 26 分	135 度 21 分	2001 0416	1.8	個人住宅
はぶいせき 土生遺跡	大阪府 貝塚市久保	27208	61	34 度 27 分	135 度 23 分	2001 0524 ～25	4	個人住宅
にいのいけいせき 新井ノ池遺跡	大阪府 貝塚市鳥羽	27208	30	34 度 26 分	135 度 22 分	2001 0625	2	個人住宅
つだいせき 津田遺跡	大阪府 貝塚市堀	27208	80	34 度 26 分	135 度 22 分	2001 0816	3.9	個人住宅
あそなかしもだいいせき 麻生中下代遺跡	大阪府 貝塚市麻生中	27208	93	34 度 26 分	135 度 22 分	2001 0712 ～13	16.3	個人住宅
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	大阪府 貝塚市地蔵堂	27208	8	34 度 25 分	135 度 21 分	2001 0515	6.5	個人住宅
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	大阪府 貝塚市地蔵堂	27208	8	34 度 25 分	135 度 21 分	2001 0914 ～17	15	個人住宅
みけやまにしいせき 三ケ山西遺跡	大阪府 貝塚市三ツ松	27208	69	34 度 24 分	135 度 23 分	2001 0316	6	個人住宅
みけやまにしいせき 三ケ山西遺跡	大阪府 貝塚市三ツ松	27208	69	34 度 24 分	135 度 23 分	2001 0702	4.4	個人住宅
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	大阪府 貝塚市木積	27208	18	34 度 24 分	135 度 23 分	2001 0416	3.75	個人住宅
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	大阪府 貝塚市木積	27208	18	34 度 24 分	135 度 23 分	2001 0524	3	個人住宅
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	大阪府 貝塚市木積	27208	18	34 度 24 分	135 度 23 分	2001 0528 ～29	21	個人住宅
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	大阪府 貝塚市木積	27208	18	34 度 24 分	135 度 23 分	2001 0808	3.5	個人住宅

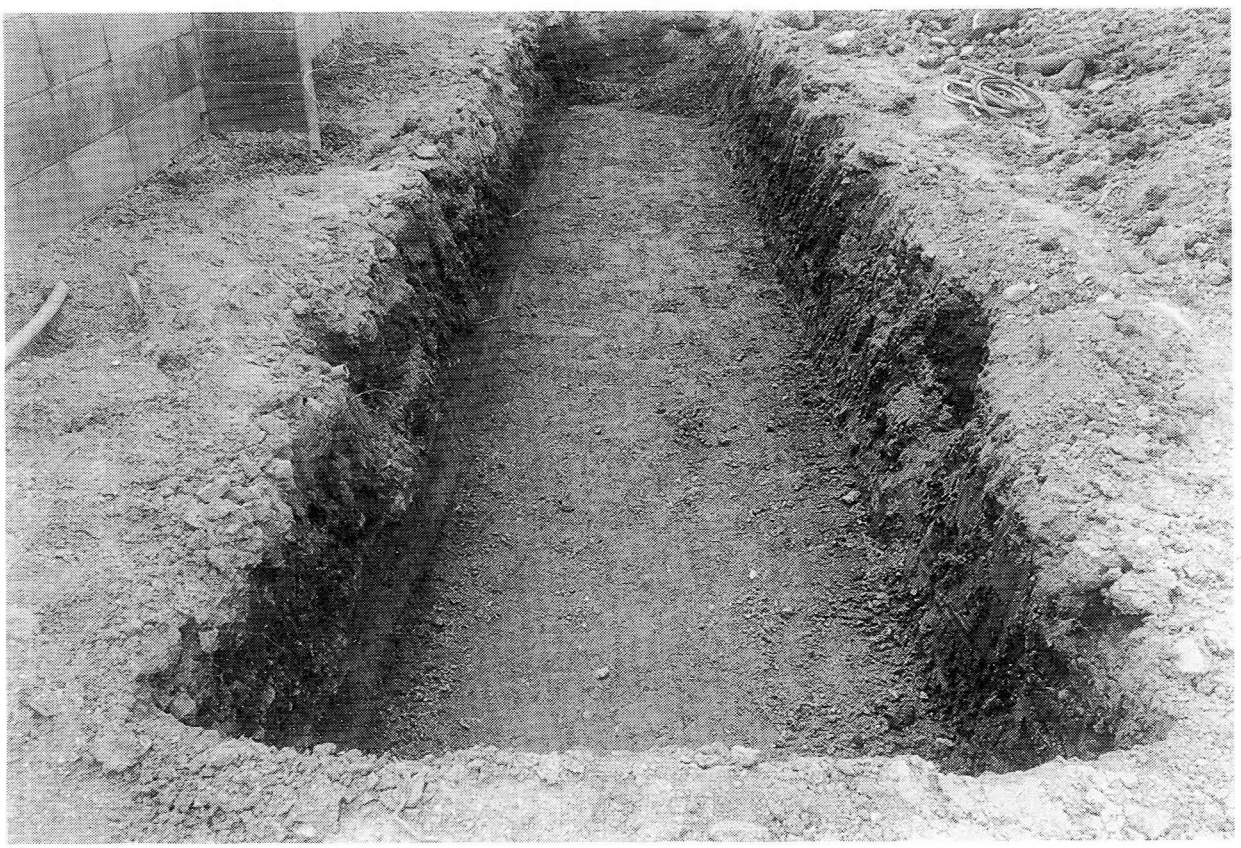
はんだきたいせき 半田北遺跡	大阪府 貝塚市半田	27208	95	34 度 26 分	135 度 22 分	2001 1112 ～19	52	町会館
じぞうどうまるやまこふん 地蔵堂丸山古墳	大阪府 貝塚市地蔵堂	27208	7	34 度 25 分	135 度 21 分	2001 0322 ～23	12	排水路改修
じぞうどうまるやまこふん 地蔵堂丸山古墳	大阪府 貝塚市地蔵堂	27208	7	34 度 25 分	135 度 21 分	2001 0809 ～0926	29.4	排水路改修
じぞうどうまるやまこふん 地蔵堂丸山古墳	大阪府 貝塚市地蔵堂	27208	7	34 度 25 分	135 度 21 分	2001 1003 ～26	23	管理用ﾌｪﾝｽ 個人住宅

ふりがな 所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近　代	整地層		
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近　世	整地層、土間	陶磁器、瓦質土器	
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近　代		陶磁器	
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近　世	整地層、土間	陶磁器、貝	
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近　世	土坑、焼土層	陶磁器、瓦	
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近　世	整地層、水路	陶磁器、瓦	
かいづかじないちょういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近　世	濠	陶磁器	
しゃくぜんじじょうあと 積善寺城跡	城跡	近　世 近　代	落ち込み	陶器	
うみづかいせき 海塚遺跡	集落跡				
うみづかいせき 海塚遺跡	集落跡	奈　良	溝	土師器	
ひがしいせき 東遺跡	集落跡	奈良～平安、 明治		須恵器、土師器、陶磁器	
ほりあきげいせき 堀秋毛遺跡	集落跡	近　世	粘土採掘坑		
かじこうざきはたけなかいせき 加治・神前・畠中遺跡	集落跡	近　世 近　代		陶磁器	
かじこうざきはたけなかいせき 加治・神前・畠中遺跡	集落跡	近　世 近　代		陶磁器	
かじこうざきはたけなかいせき 加治・神前・畠中遺跡	集落跡	近　世 近　代		陶磁器	
せちごいせき 清児遺跡	散布地	中　世		須恵器、土師器、瓦器、磁器	
なごせいせき 名越遺跡	散布地	中　世		土師器、瓦器	
くぼたいせき・くぼたはいじ 窪田遺跡・窪田廃寺	散布地、 寺院跡	中　世	柱穴	須恵器、土師器、瓦器	
くぼたいせき・くぼたはいじ 窪田遺跡・窪田廃寺	散布地、 寺院跡	中　世	柱穴	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器	
さわしんでいせき 沢新出遺跡	散布地	近　世		陶磁器、瓦、 土師質蛸壺	
はぶいせき 土生遺跡	集落跡	近　代			
にいのいけいせき 新井ノ池遺跡	集落跡	近　代	自然流路		
つだいせき 津田遺跡	集落跡、 窯跡	近　代	粘土採掘坑		
あそなかしもだいいせき 麻生中下代遺跡	集落跡	中　世	鋤溝、柱穴	須恵器、土師器、瓦器	
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	古墳、集落跡、社寺跡	中　世		瓦器	
じぞうどういせき 地蔵堂遺跡	古墳、集落跡、社寺跡	中　世 近　世	土坑	陶磁器、瓦 土師質土器	
みけやまにしいせき 三ケ山西遺跡	散布地	中　世		土師器、瓦器	
みけやまにしいせき 三ケ山西遺跡	散布地	中　世	溝		
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	寺院跡、 集落跡	中　世	土坑	土師器、黒色土器、瓦器	
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	寺院跡、 集落跡	中　世			
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	寺院跡、 集落跡	中　世		土師器、瓦器	
こつみかんのんじあと 木積観音寺跡	寺院跡、 集落跡	中　世 近　世	鋤溝、土坑	瓦器、土師器、 陶磁器、瓦	
はんだきたいせき 半田北遺跡	集落跡	奈　良	土坑、溝、柱穴	土師器、須恵器、瓦	
じぞうどうまるやまこふん 地蔵堂丸山古墳	前方後円墳	古　墳	古墳	埴輪、陶磁器、瓦	
じぞうどうまるやまこふん 地蔵堂丸山古墳	前方後円墳	古　墳	古墳	埴輪、土師器、陶磁器、瓦	
じぞうどうまるやまこふん 地蔵堂丸山古墳	前方後円墳	古　墳	古墳	埴輪、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦	

図　　版

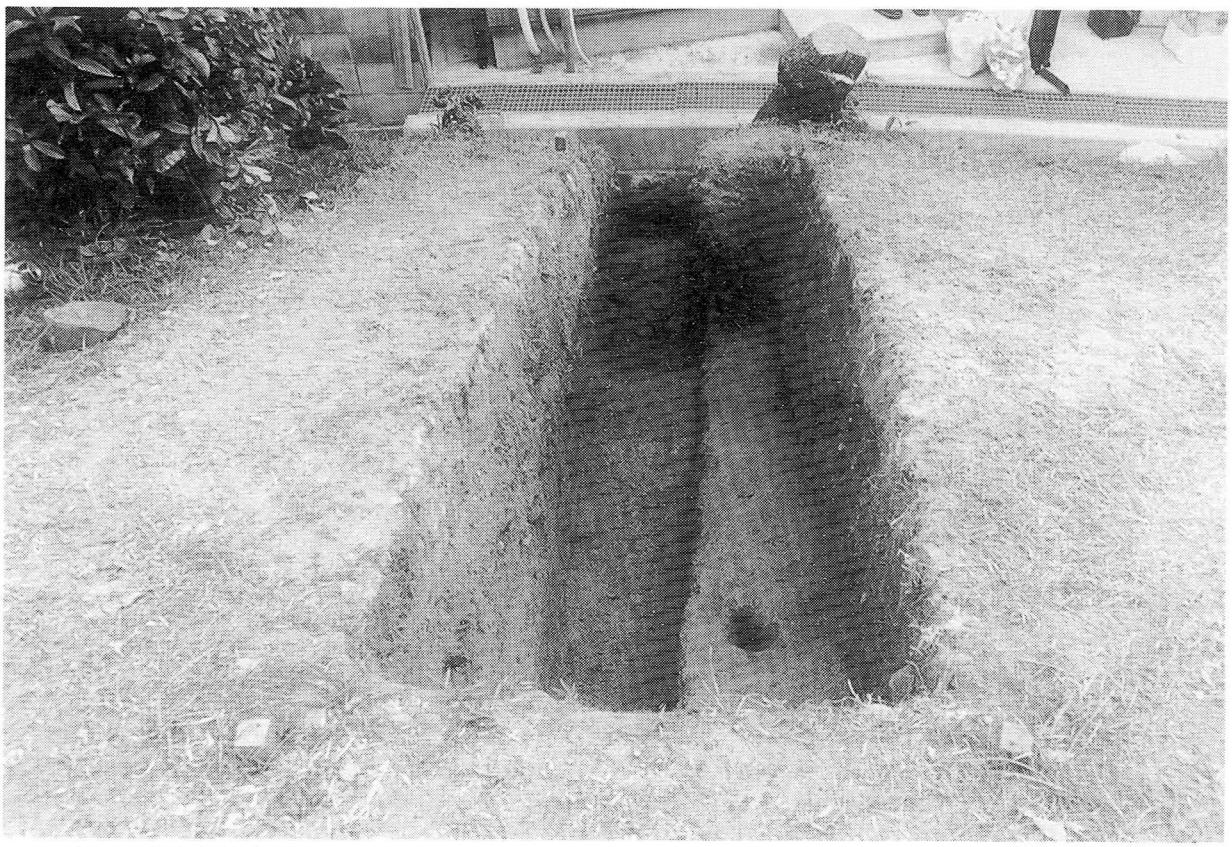
図版1　木積観音寺跡（2001－13区）、麻生中下代遺跡（2001－23区）

1．木積観音寺跡調査区全景　　東より



2．麻生中下代遺跡調査区全景　　北西より

図版2　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）



1．第1区調査区全景　　西より

2．北壁断面　　南西より

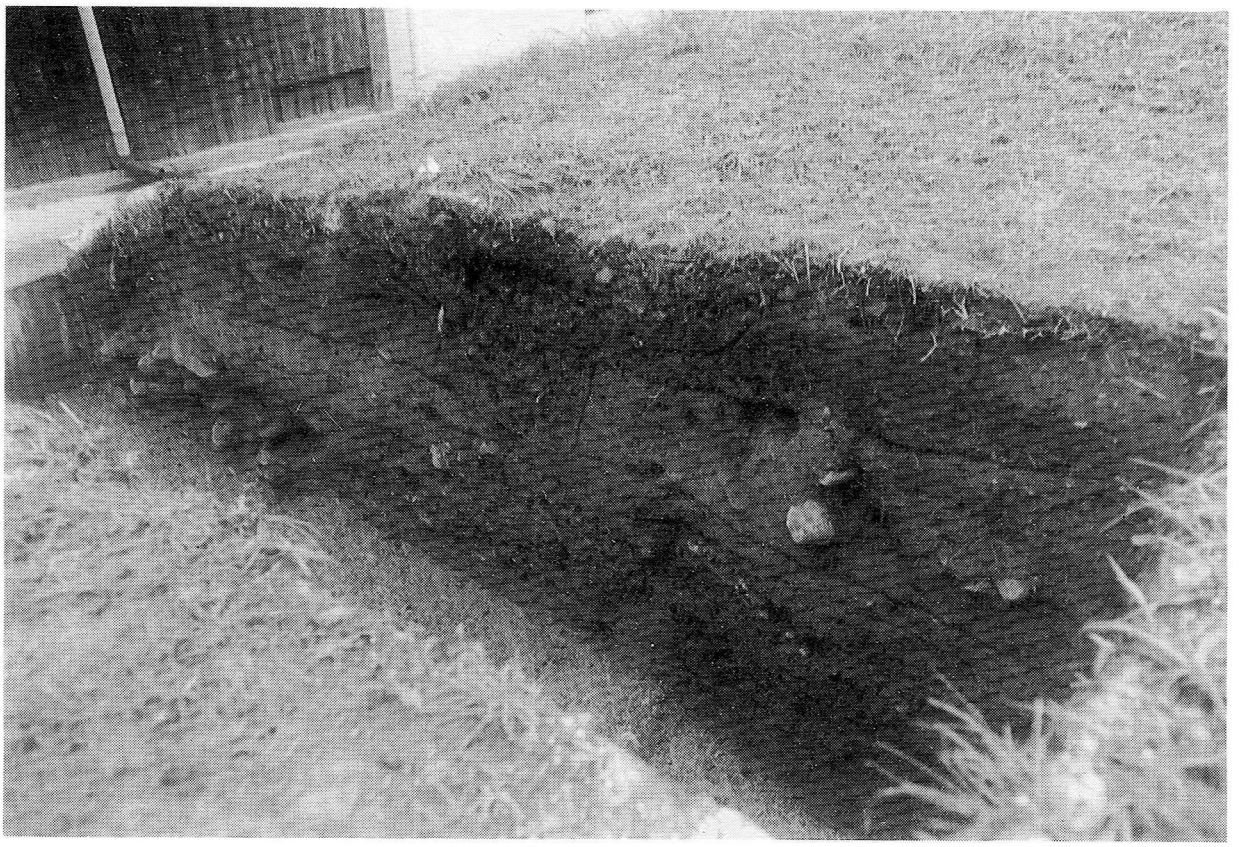
図版3　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）

1．第2区調査区全景　　北より

2．西壁断面　　北東より

図版4　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）

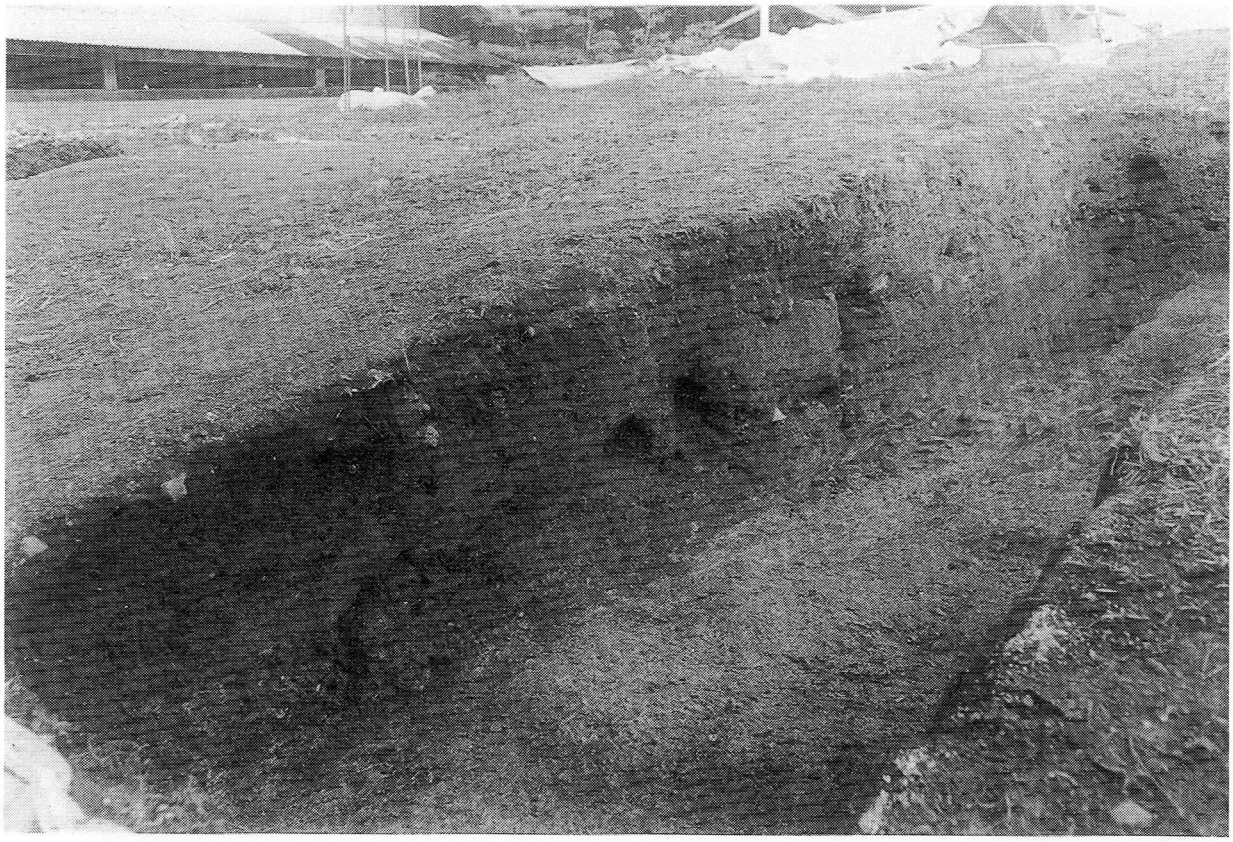
1．第3区調査区全景　　南より



2．西壁断面　　北東より

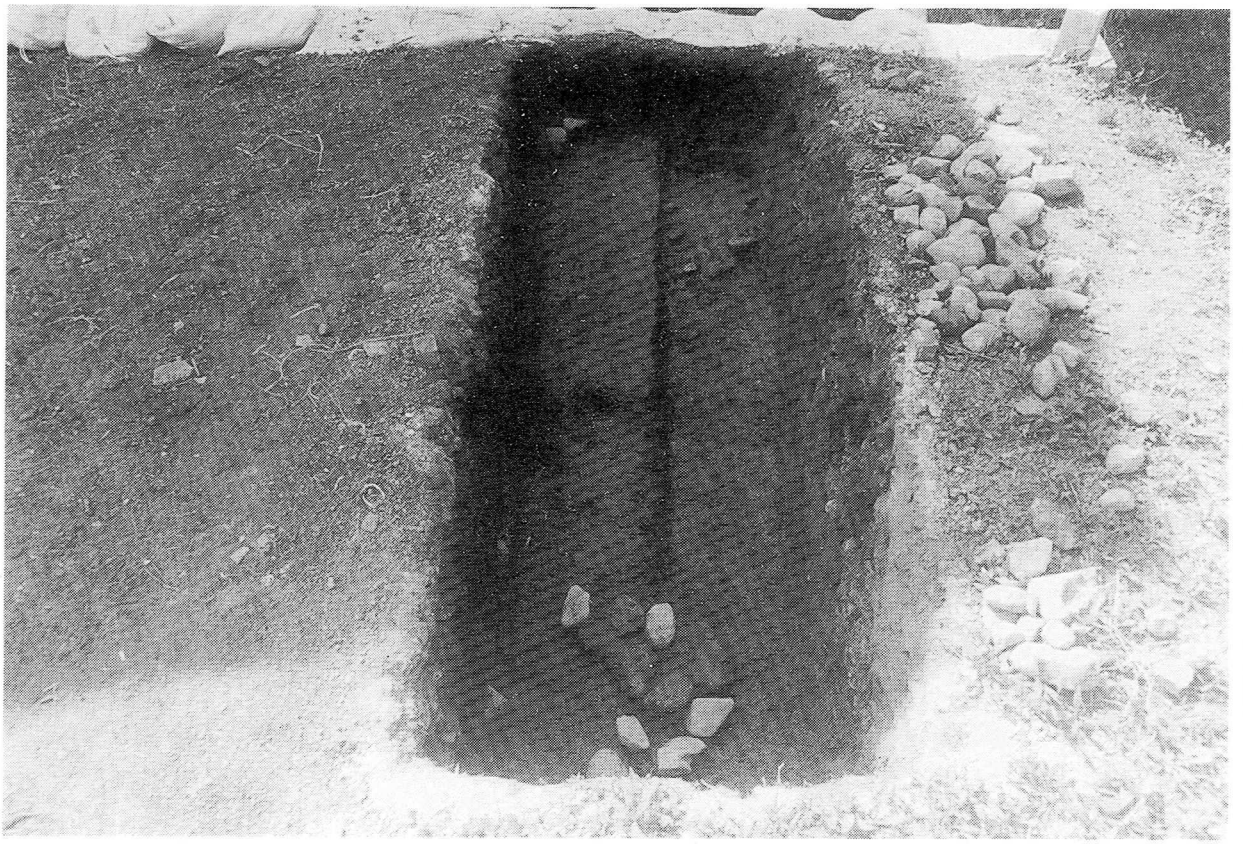
図版5　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）

1．第4区調査区全景　　北より

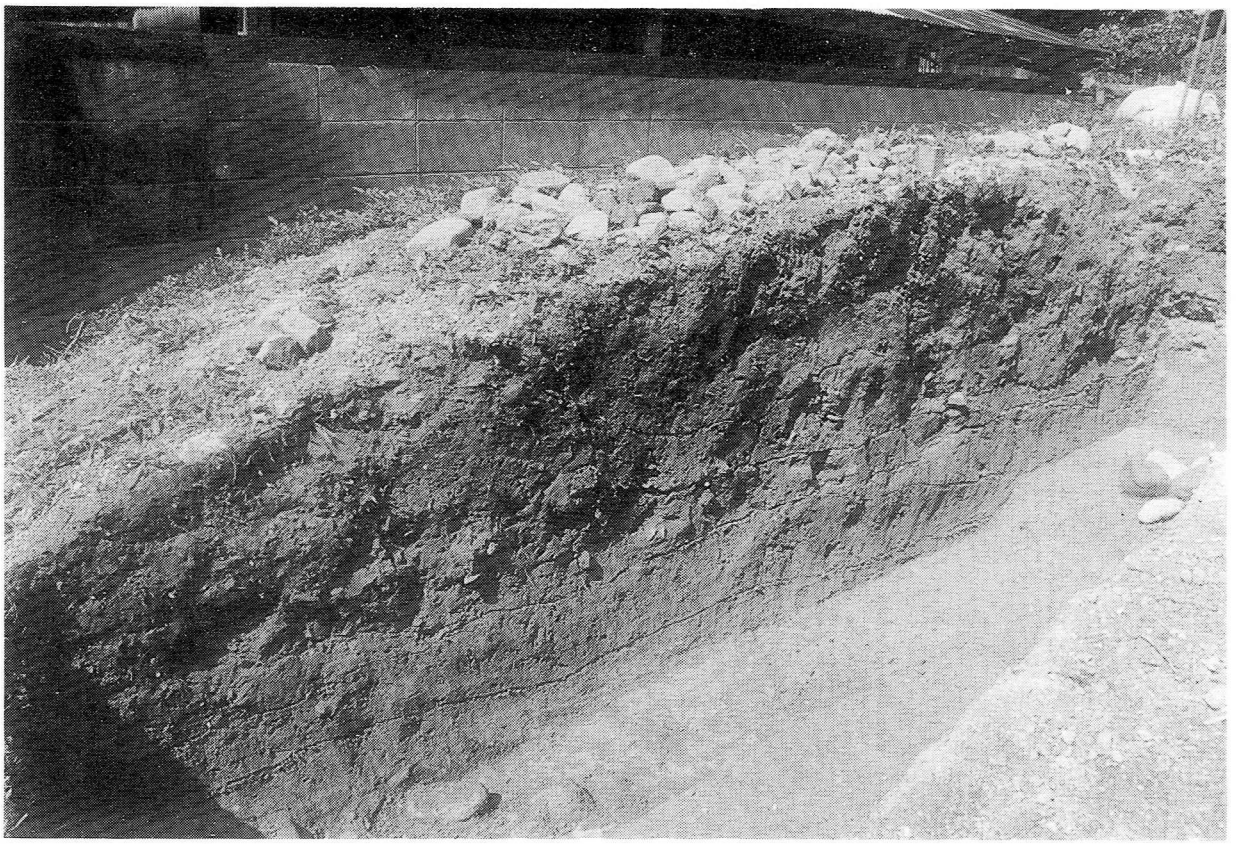


2．西壁断面　　南東より

図版6　地蔵堂丸山古墳（2001－38区）

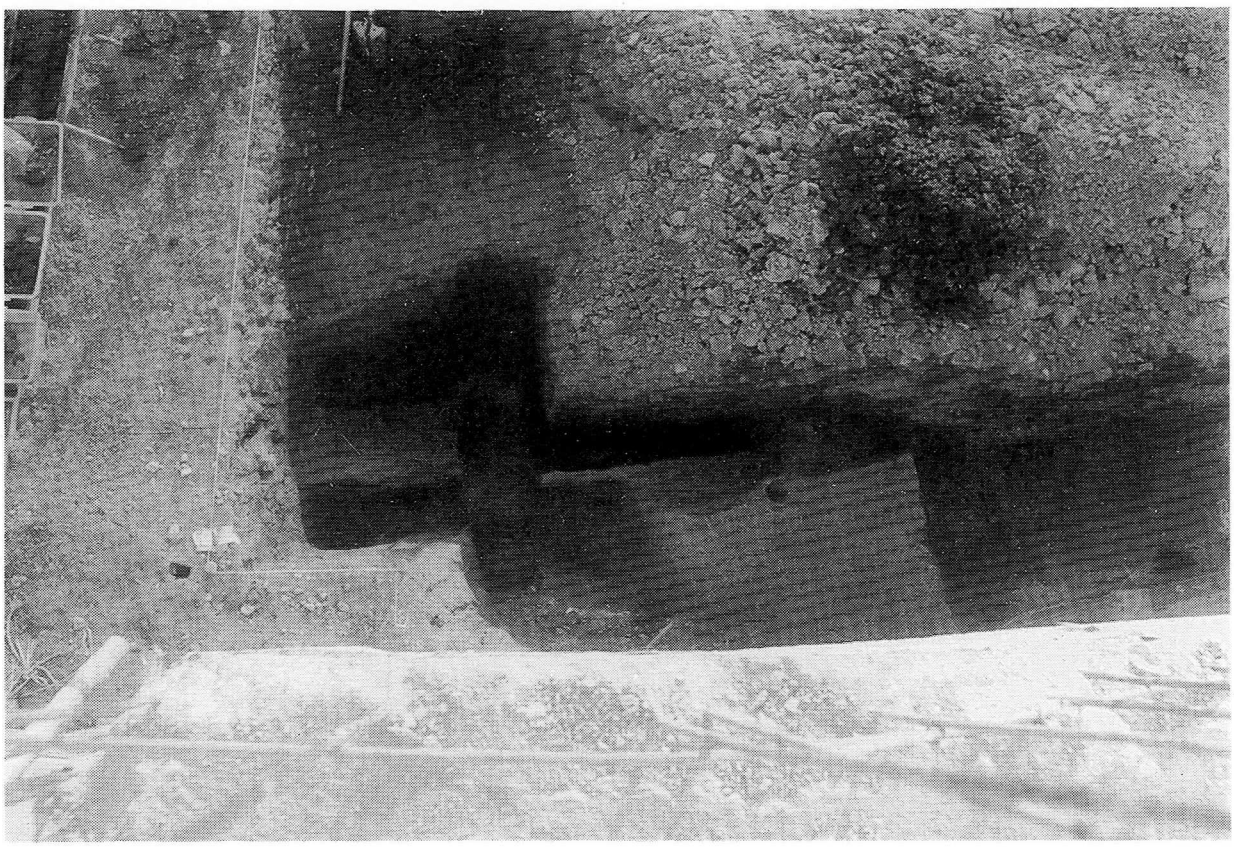


1．第5区調査区全景　　北より

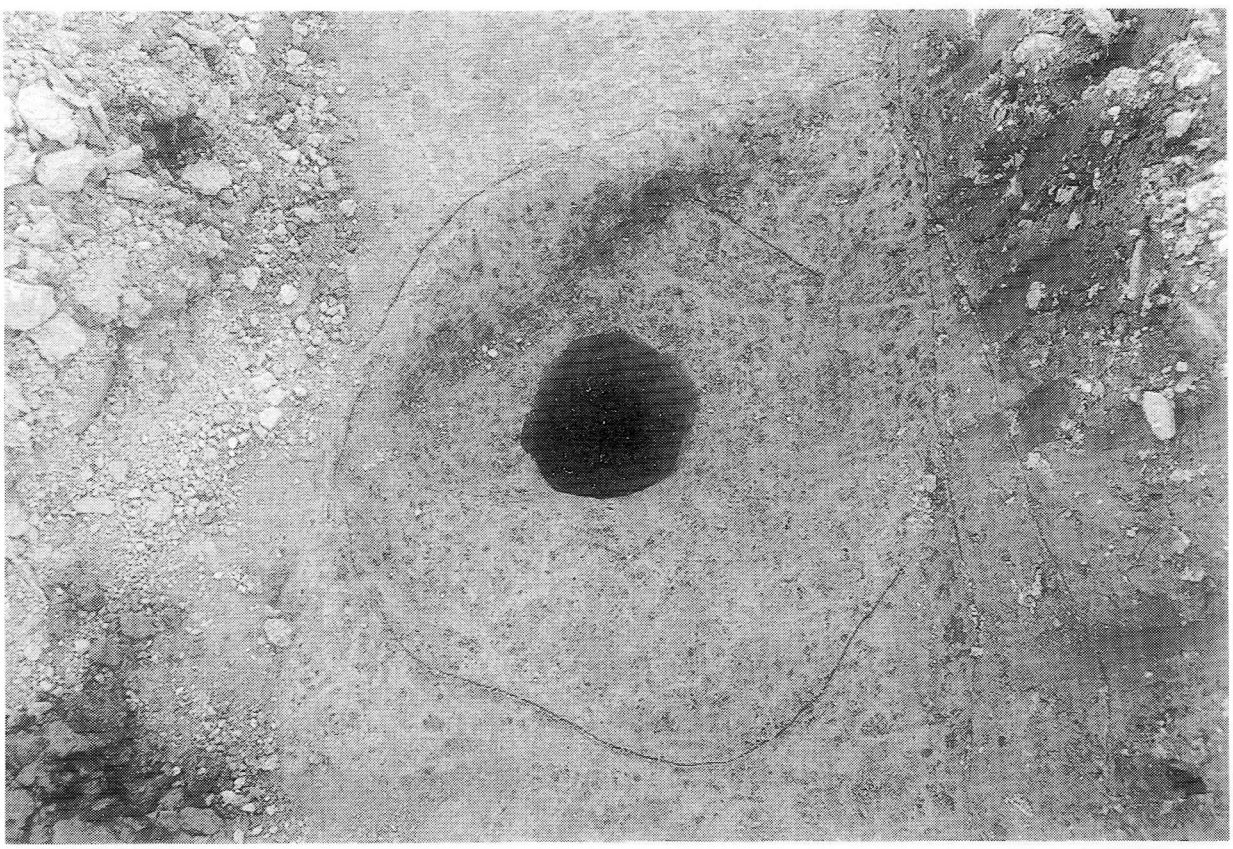


2．西壁断面　　南東より

図版7　半田北遺跡（2001－46区）

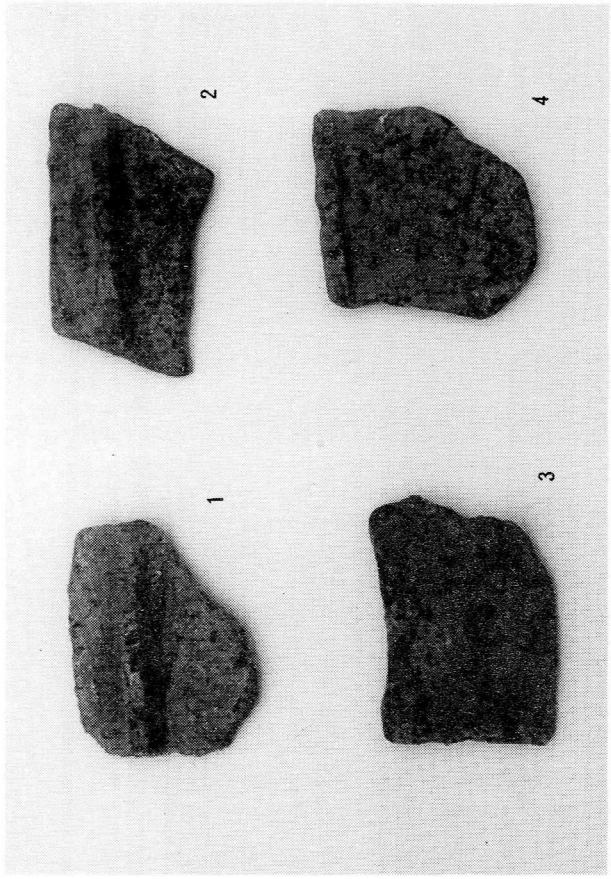


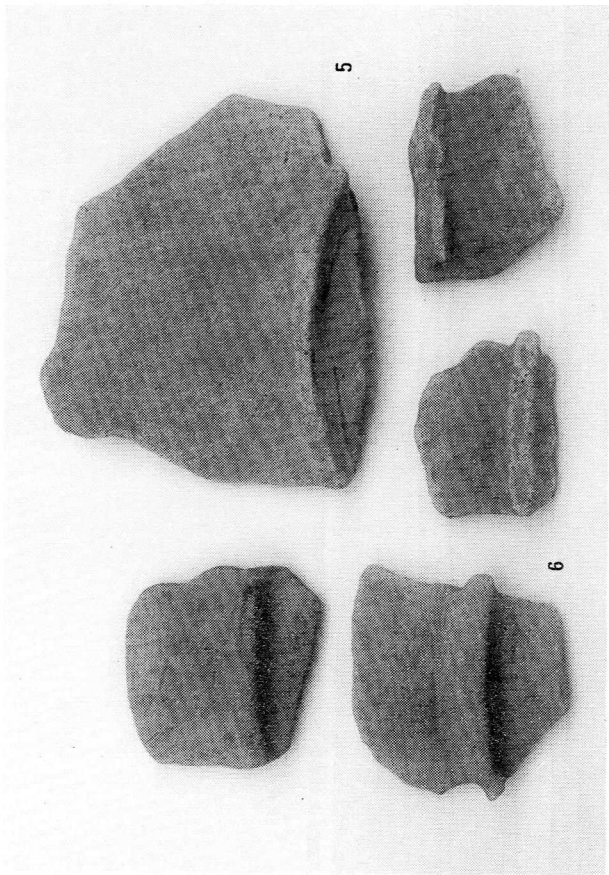
1．SK－1、2　　北東より

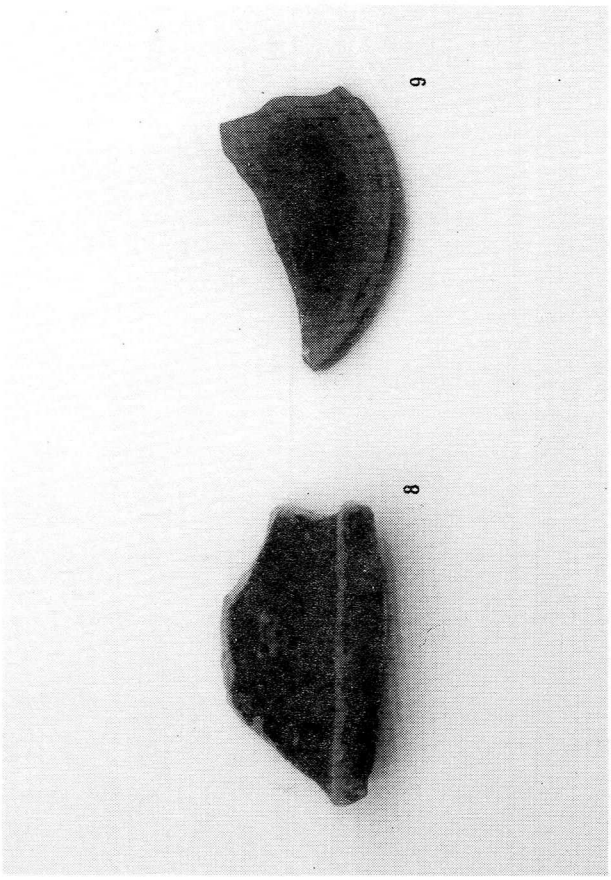


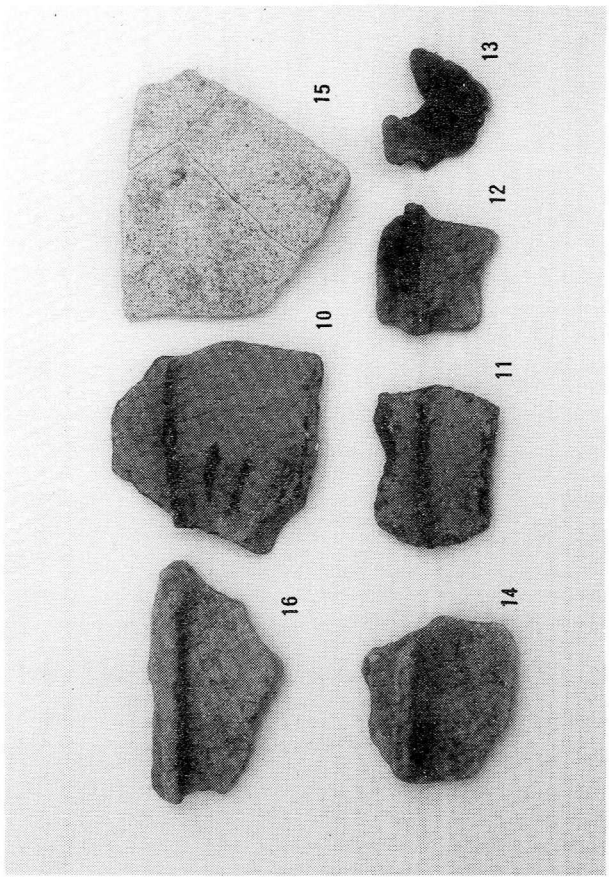
2．Pit3　　南西より

図版8　地蔵堂丸山古墳

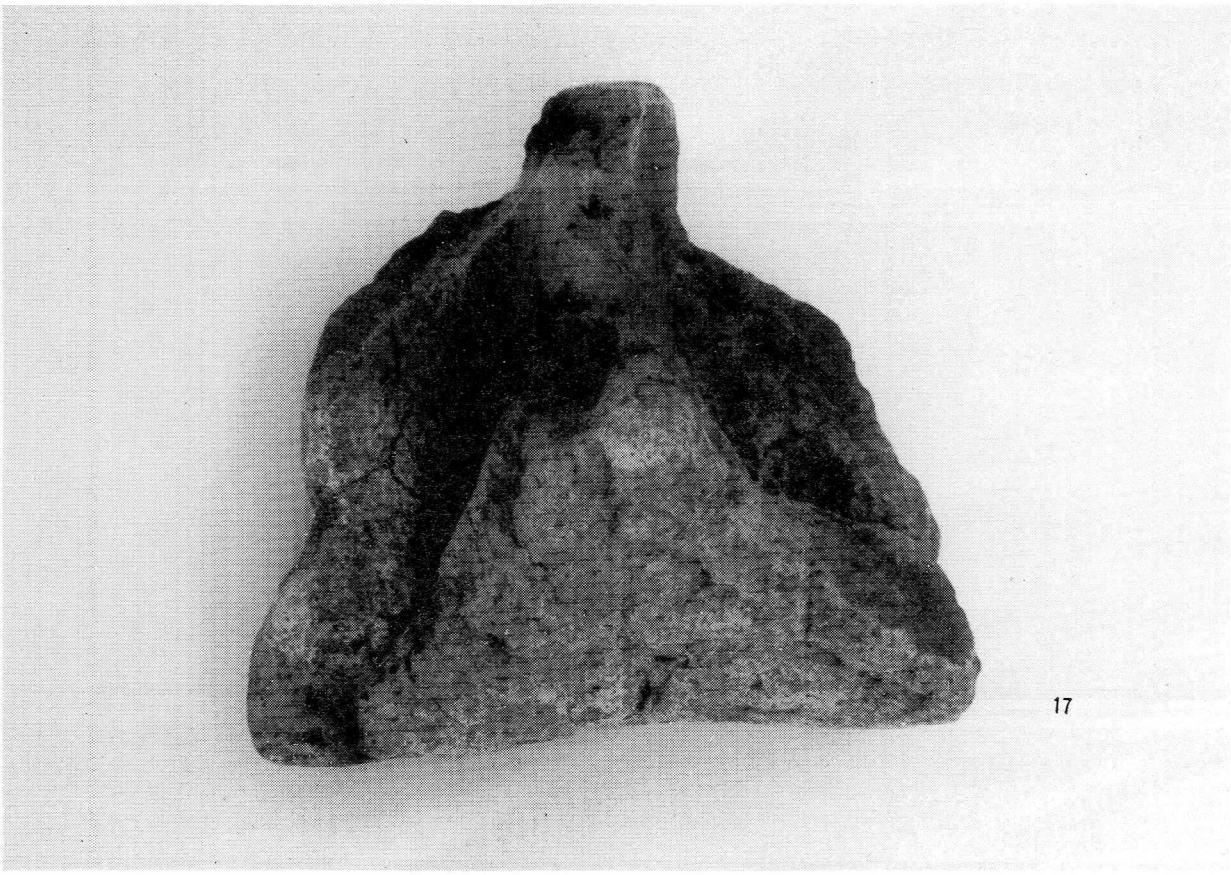






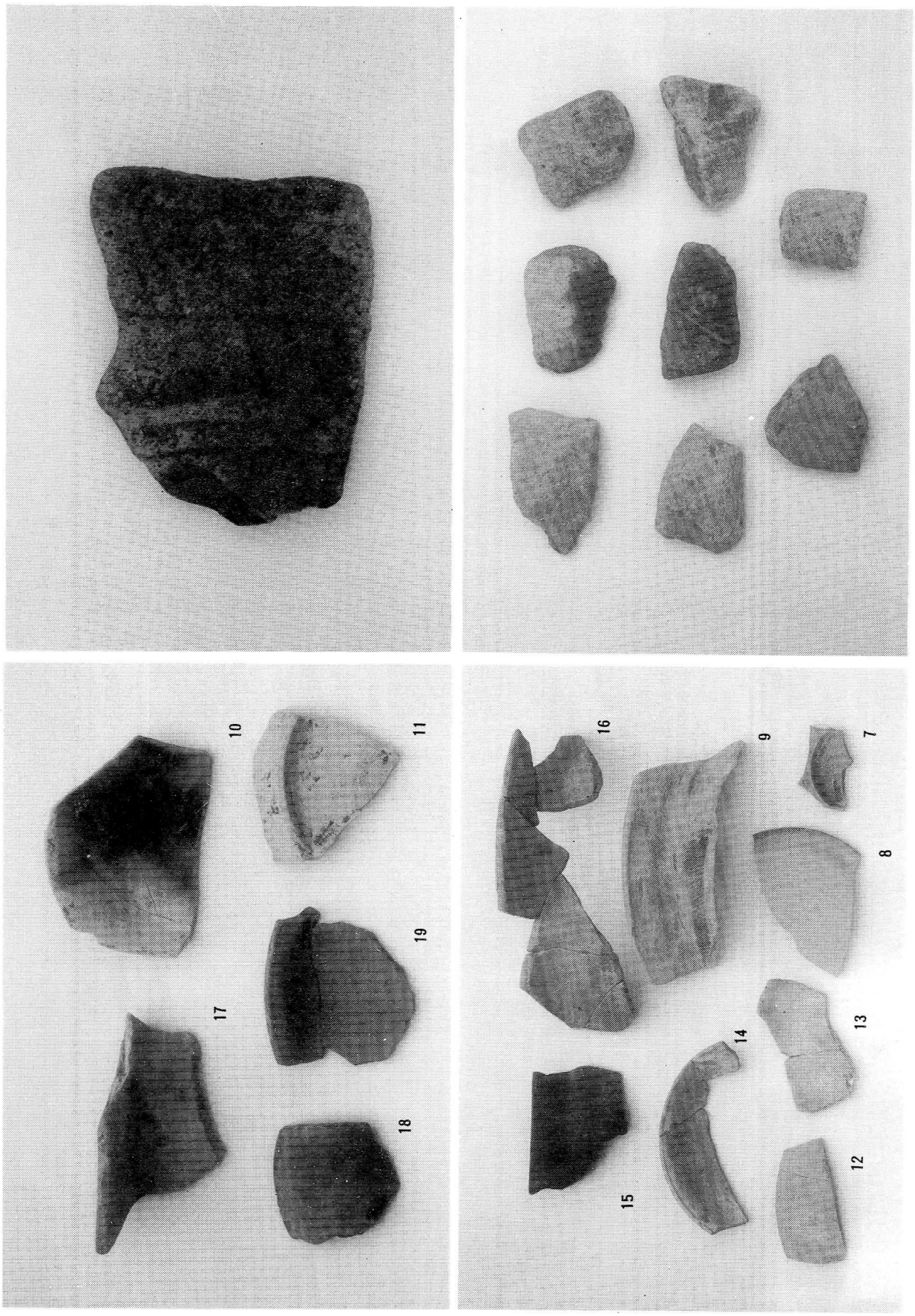


2001－38区 第1区（1～4）、第2区（5、6、8、9）、第3区（10～16）出土円筒埴輪、朝顔型埴輪、土器

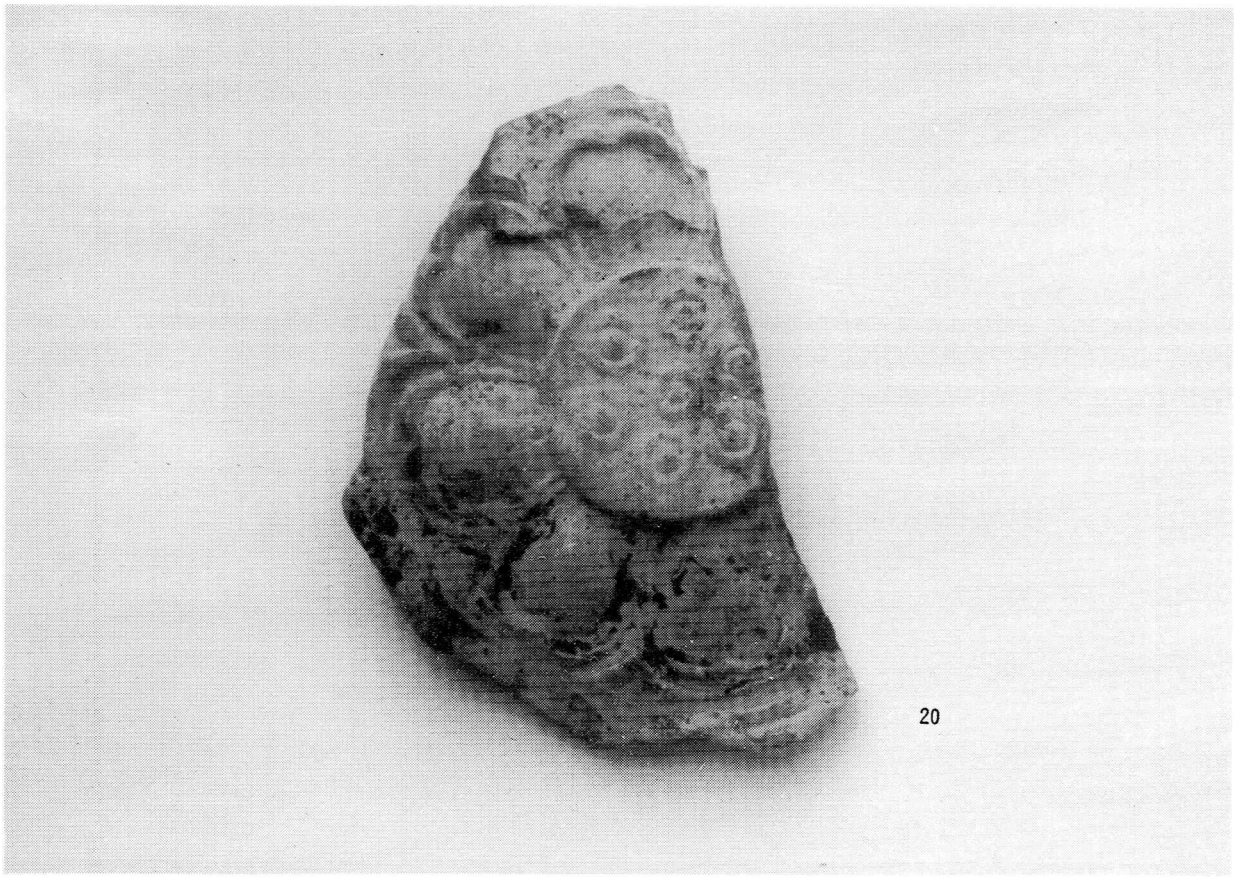


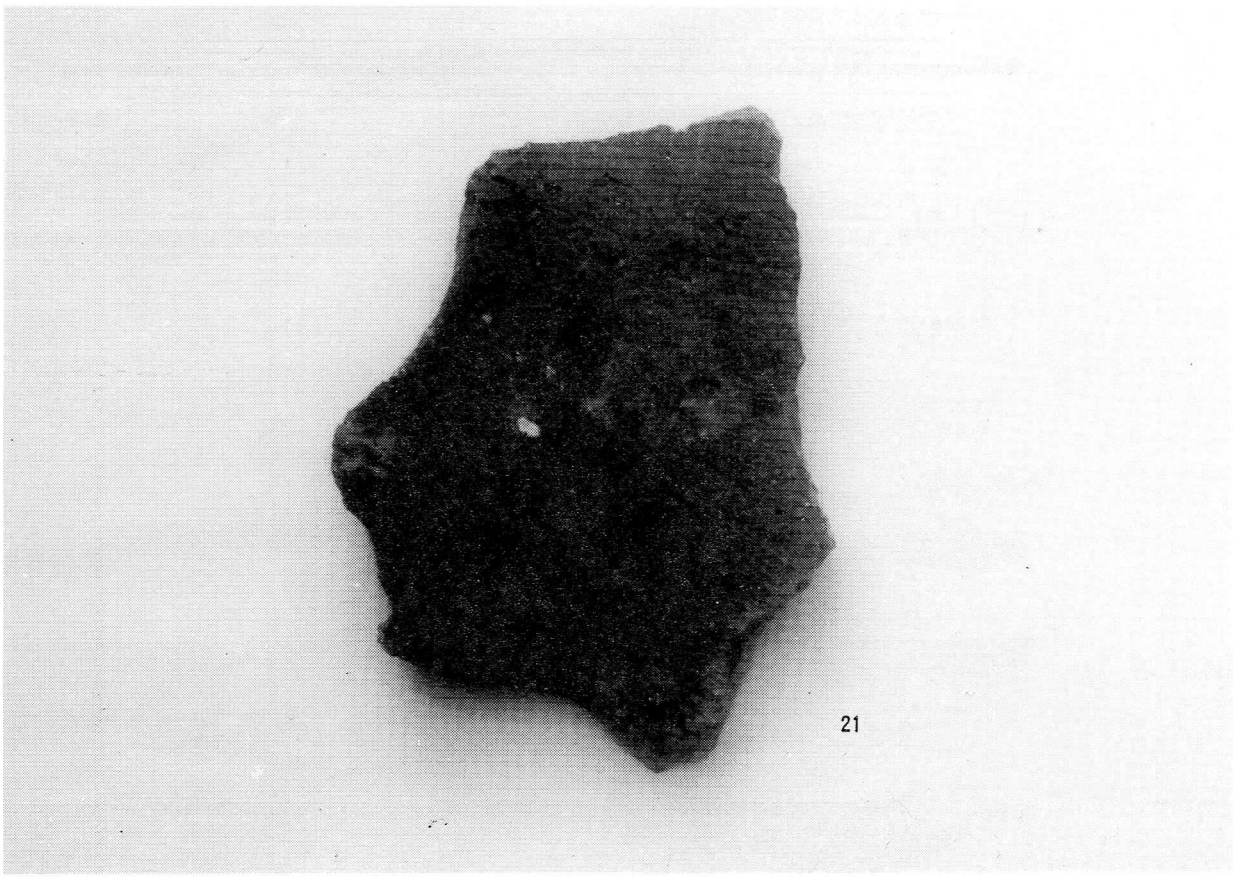
2001－27区　出土形象埴輪（17、18）

図版10　地蔵堂丸山古墳　半田北遺跡



2001－27区(19)、2001－38区、2001－46区ＳＫ－１(７～17)、ＳＫ－２ (18､19) 出土遺物





2001－46区ＳＫ－1、2出土瓦

貝塚市埋蔵文化財調査報告第62集

貝塚市遺跡群発掘調査概要 24

発　行　日　　平成14年(2002) 3月31日

編集・発行　　貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中1－17－1

印　　刷　　㈲ 春 木 印 刷 所
岸和田市下野町2－2－8